Sun Java™ System

Sun Java Enterprise System インストールガイド (Microsoft Windows 版)

2005Q1

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-3114

Copyright © 2005 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は http://www.sun.com/patents に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE ロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。

Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

目 次

表目次 9

図目次 11

手順一覧 13

はじめに 17

対象読者 17
このマニュアルの構成 18
表記上の規則 19
関連マニュアル 19
　このドキュメントセット内のマニュアル 19
Sun マニュアルへのアクセス 21
サードパーティの Web サイト 22
Sun のテクニカルサポートへの問い合わせ 22
ご意見、ご要望の送付先 22

第 1 章 インストール計画の概要 23
Java Enterprise System ソリューションのライフサイクルにおけるインストールの位置付け 23
インストール計画のタスクの概要 26
　インストールされるコンポーネント 27
　システムの準備状態の確認 28
　　システム要件 28
　　アクセス権 28
　　メモリとディスク容量の要件 28
次の手順 29

第 2 章 インストールシーケンスの作成 31
配備の実行に必要な事項 31
配備アーキテクチャーの確認 32
主要なインストールの問題 33
コンポーネントの相互依存関係がインストールに与える影響 34
最適なセットアップタイプ 38
「デフォルト」オプション 38
「カスタム」オプション 38
最適な設定オプション 38
「クイック設定」オプション 39
「あとで設定」オプション 39
必要なインストールセッションの数 39
単一インストールセッション 39
複数インストールセッション 40
次の手順 40

第 3 章 インストール手順と前提条件 41
Sun Java Enterprise System ソフトウェアの入手 41
Sun Java Enterprise System のインストール手順 42
インストーラのモード 42
言語の選択 43
依存性の確認 43
設定オプションとパラメータの設定 44
Sun Java Enterprise System のアンインストール手順 45
全般的な動作 46
相互依存関係の処理 46
リモートホストからのコンポーネント依存関係 47
設定によるコンポーネントの依存関係 47
インストールの前提条件 48
次の手順 49

第 4 章 インストールのシナリオ 51
単一セッションインストールの例 52
評価の例 52
Access Manager のみをインストールする例 53
Access Manager と Directory Server の例 55
Access Manager と Portal Server の例 56
Application Server のみをインストールする例 58
Communications Express と Messaging Server の例 60
Directory Server のみをインストールする例 62
Directory Proxy Server のみをインストールする例 63
Instant Messaging のみをインストールする例 65
Message Queue のみをインストールする例 67

Portal Server のみをインストールする例 68
Portal Server Secure Remote Access のみをインストールする例 70
Web Server のみをインストールする例 72
Calendar Server と Messaging Server の例 74
Schema 1 Calendar-Messaging の例 76
アイデンティティ管理の例 78
通信サービスと共同作業サービスの例 78
リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例 81

第 5 章 インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール 83
前提条件 83
インストールウィザードの実行 84
インストールの取り消し 93
次の手順 93

第 6 章「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集 95
この章の利用方法 96
情報の参照方法 96
Administration Server の設定 96
Access Manager の設定情報 97
Access Manager: パラメータ情報 97
Access Manager: Directory Server 情報 101
Access Manager: Web コンテナ情報 102
Web コンテナ情報 : Access Manager と Web Server 102
Web コンテナ情報 : Access Manager と Application Server 103
Application Server の設定情報 105
Application Server: 共有コンポーネント情報 108
Application Server: Web Server 情報 109
Delegated Administrator の設定情報 110
Delegated Administrator: 管理情報 110
High Availability Session Store の設定情報 111
High Availability Session Store: 管理情報 112
Web Server の設定情報 113
Web Server: 管理情報 113
Web Server: デフォルトの Web Server インスタンス情報 113
Instant Messaging の設定情報 115
Portal Server の設定情報 117
Portal Server Secure Remote Access の設定情報 121
Messaging Server の設定情報 127
Communications Express の設定情報 128
アンインストール 130

第 7 章「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定 131
インストールされたコンポーネント 131
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定 133
「あとで設定」オプションでのインストール後の管理サーバーの設定 135
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定 135
「あとで設定」オプションでのインストール後の HADB の設定 136
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定 136
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Communications Express の設定 138
「あとで設定」オプションでのインストール後の Delegated Administrator の設定 139
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Proxy Server の設定 139
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定 140
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定 141
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Message Queue の設定 141
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定 142
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定 143
「あとで設定」オプションでのインストール後の Portal Server SRA の設定 143
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定 144
次の手順 145

第 8 章 サイレントモードでのソフトウェアのインストール 147
サイレントインストールのイベント 148
応答ファイルの作成 149
応答ファイルの編集 150
サイレントモードでのインストーラの実行 151
Setup.log ファイルの理解 152
次の手順 154

第 9 章 コンポーネントの起動と停止 155
前提条件 156
Java Enterprise System の起動シーケンス 156
Access Manager の起動と停止 156
管理サーバーの起動と停止 157
Application Server の起動と停止 158
Calendar Server の起動と停止 160
Directory Server の起動と停止 161
Directory Server の起動 161
Directory Server の停止 164
Directory Proxy Server の起動と停止 165
HADB 管理エージェントの起動と停止 167
Instant Messaging の起動と停止 167
Message Queue の起動と停止 169
Messaging Server の起動と停止 170
Portal Server の起動と停止 171

Web Server の起動と停止 171
次の手順 177

第 10 章 ソフトウェアのアンインストール 179
前提条件 179
アンインストール前の作業 180
グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行 181
サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行 184

第 11 章 トラブルシューティング 187
一般的なトラブルシューティング方法 187
インストールログファイルの検証 188
コンポーネントログファイルの検証 188
製品の依存関係の検証 189
リソースと設定のチェック 189
インストール後の設定のチェック 190
配布メディアのチェック 190
Directory Server の接続性チェック 190
Web Server のファイルとディレクトリの削除 190
パスワードの確認 190
インストールに関する問題 191
アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗 191
インストールの失敗 192
予期しない外部エラー 193
サイレントインストールの失敗 : 「応答ファイルに互換性がないか、破損している」 193
サイレントインストールの失敗 193
アンインストールに関する問題 194
アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った 194
コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報 194
Access Manager のトラブルシューティングツール 195
管理サーバーのトラブルシューティングツール 195
Application Server のトラブルシューティングツール 196
Calendar Server のトラブルシューティングツール 196
Communications Express のトラブルシューティングツール 197
Directory Proxy Server のトラブルシューティングツール 198
Directory Server のトラブルシューティングツール 198
Instant Messaging のトラブルシューティングツール 199
Message Queue のトラブルシューティングツール 200
Messaging Server のトラブルシューティングツール 200
Portal Server のトラブルシューティングツール 201
Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール 202
Web Server のトラブルシューティングツール 202

Delegated Administrator のトラブルシューティングツール 203
High Availability Session Store のトラブルシューティングツール 204
トラブルシューティングの追加情報 204

付録 A　Java ES コンポーネント 205
選択可能なコンポーネント 205

付録 B　デフォルトのポート番号 209

付録 C　応答ファイルの例 213

用語集 217

索引 219

表目次

表 1 Java Enterprise System ドキュメントセットに含まれるマニュアル 20
表 1-2 サポートするプラットフォーム 28
表 2-1 考慮する必要のあるインストールの問題 33
表 2-2 コンポーネント間の相互依存関係 34
表 4-1 Access Manager のインストール情報 55
表 4-2 Application Server のインストール情報 59
表 4-3 Directory Server のインストール情報 63
表 4-4 Directory Proxy Server のインストール情報 65
表 4-5 Instant Messaging のインストール情報 67
表 4-6 Message Queue のインストール情報 68
表 4-7 Portal Server のインストール情報 70
表 4-8 Portal Server Secure Remote Access のインストール情報 72
表 4-9 Web Server のインストール情報 73
表 4-10 Calendar Server のインストール情報 75
表 4-11 Messaging Server のインストール情報 76
表 6-1 Administration Server の設定 96
表 6-2 Access Manager のパラメータ情報 97
表 6-3 Access Manager のインストール時に必要となる Directory Server に関する設定情報 . . 101
表 6-4 Access Manager と Web Server を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 102
表 6-5 Access Manager と Application Server 8.x を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 103
表 6-6 Application Server の管理に関する設定情報 105
表 6-7 Application Server のインストール時に必要となる共有コンポーネントに関する設定情報 108
表 6-8 Application Server のインストール時に必要となる Web Server に関する設定情報 109
表 6-9 Delegated Administrator Server の管理に関する設定情報 110
表 6-10 High Availability Session Store の管理に関する設定情報 112

表 6-11 Web Server のインストール時に必要となる管理に関する設定情報 113
表 6-12 Web Server のインストール時に必要となるデフォルト Web Server インスタンスに関する設定情報 113
表 6-13 Instant Messaging の設定情報 115
表 6-14 PSConfig.properties パラメータ 117
表 6-15 SRAConfig.properties ファイルの説明 121
表 6-16 RWPConfig.properties ファイルと RWPConfig-default.properties ファイルの説明 . . . 122
表 6-17 GWConfig.properties ファイルと GWConfig-default.properties ファイルの説明 123
表 6-18 NLPConfig.properties ファイルと NLPConfig-default-properties ファイルの説明 125
表 6-19 Instant Messenger の設定情報 127
表 6-20 UwcCfgDefaults.properties ファイルの設定情報 128
表 8-1 サイレントインストールのイベント 148
表 8-2 ログファイルの応答 ResultCode キー 153
表 11-1 再インストール前に削除が必要なコンポーネントのサービスエントリ 192
表 11-2 Access Manager のトラブルシューティングツール 195
表 11-3 Administration Server のトラブルシューティングツール 195
表 11-4 Application Server のトラブルシューティングツール 196
表 11-5 Calendar Server のトラブルシューティングツール 196
表 11-6 Communications Express のトラブルシューティングツール 197
表 11-7 Directory Proxy Server のトラブルシューティングツール 198
表 11-8 Directory Server のトラブルシューティングツール 198
表 11-9 Instant Messaging のトラブルシューティングツール 199
表 11-10 Message Queue のトラブルシューティングツール 200
表 11-11 Messaging Server のトラブルシューティングツール 200
表 11-12 Portal Server のトラブルシューティングツール 201
表 11-13 Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール 202
表 11-14 Web Server のトラブルシューティングツール 202
表 11-15 Delegated Administrator のトラブルシューティングツール 203
表 11-16 High Availability Session Store のトラブルシューティングツール 204

図目次

図 1-1 Sun Java Enterprise System ソリューションのライフサイクル 24
図 2-1 配備アーキテクチャーの例 32
図 5-1 インストールウィザードの「言語サポート」画面 85
図 5-2 インストールウィザードの「インストールする場所を選択」画面 86
図 5-3 インストールウィザードの「セットアップタイプ」画面 87
図 5-4 インストールウィザードの「製品の設定」画面 88
図 5-5 インストールウィザードの「インストールのカスタマイズ」画面 89
図 5-6 インストールウィザードの「Web コンテナの選択」画面 90
図 5-7 インストールウィザードの「管理者設定」画面 90
図 9-1 System Server へのログイン画面 162
図 9-2 「システムサーバー」コンソール画面 162
図 9-3 「管理サーバー」コンソールの「タスク」タブ画面 163
図 9-4 「Web Server 6.1 Administration Server」画面 172
図 9-5 Web Server の「Server Manager」画面 173
図 9-6 Web Server の Server Manager の成功確認ダイアログボックス 174
図 9-7 Web Server の停止画面 175
図 10-1 インストールされたコンポーネントを変更するための「ようこそ」画面 181
図 10-2 アンインストールするコンポーネントの選択 182
図 10-3 インストールされたコンポーネントを削除するための「ようこそ」画面 183
図 10-4 インストールされたコンポーネントの削除確認ダイアログボックス 183
図 10-5 アンインストールの完了画面 184

手順一覧

インストールを開始するには 84
「デフォルト」セットアップタイプでインストールするには、次の手順に従います。. 87
「カスタム」セットアップタイプでインストールするには、次の手順に従います。. 87
「クイック設定」インストールを開始する 88
「あとで設定」インストールを開始する 91
「あとで設定」オプションでのインストール後に Access Manager を設定する 133
「あとで設定」オプションでのインストール後に管理サーバーを設定する 135
「あとで設定」オプションでのインストール後に Application Server を設定する 136
「あとで設定」オプションでのインストール後に Calendar Server を設定する 137
「あとで設定」オプションでのインストール後に Communications Express を設定する 138
「あとで設定」オプションでのインストール後に Delegated Administrator を設定する 139
「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Directory Proxy Server を設定するには . . 139
「あとで設定」オプションでのインストール後に Directory Server を設定する 140
「あとで設定」オプションでのインストール後に Instant Messaging を設定する 141
「あとで設定」オプションでのインストール後に Messaging Server を設定する 142
「あとで設定」オプションでのインストール後に Portal Server を設定する 143
「あとで設定」オプションでのインストール後に Portal Server SRA を設定する 143
「あとで設定」オプションでのインストール後にゲートウェイを設定する 144
「あとで設定」オプションでのインストール後に Netlet プロキシを設定する 144
「あとで設定」オプションでのインストール後に Rewriter プロキシを設定する 144
「あとで設定」オプションでのインストール後に Web Server を設定する 144
サイレントモードでインストーラを実行するには 151
管理サーバーを「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 157
管理サーバーを「サービス」から起動するには、次の手順に従います。. 157
管理サーバーを start-admin.bat から起動するには、次の手順に従います。 157
管理サーバーをコンソールから停止するには、次の手順に従います。 157
管理サーバーを「サービス」から停止するには、次の手順に従います。. 158
管理サーバーを stop-admin.bat から停止するには、次の手順に従います。. 158
Application Server ドメインを起動するには、次の手順に従います。. 158
Application Server ドメインを停止するには、次の手順に従います。. 158
Application Server インスタンスを起動するには、次の手順に従います。. 159

Application Server インスタンスを停止するには、次の手順に従います。 159
Application Server エージェントを起動するには、次の手順に従います。 159
Application Server エージェントを停止するには、次の手順に従います。 159
Calendar Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 160
Calendar Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 160
Calendar Server を start-cal.bat から起動するには、次の手順に従います。 160
Calendar Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。 161
Directory Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 161
「管理サーバー」コンソールから Directory Server を起動するには、次の手順に従います。 161
Directory Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 163
Directory Server を start-slapd.bat から起動するには、次の手順に従います。 163
Directory Server をコンソールから停止するには、次の手順に従います。 164
Directory Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。 164
Directory Server を stop-slapd.bat から停止するには、次の手順に従います。 164
Directory Proxy Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 165
Directory Proxy Server を「管理サーバー」コンソールから起動するには、次の手順に従います。 165
Directory Proxy Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 165
Directory Proxy Server インスタンスを start-dps.exe から起動するには、次の手順に従います。 . 166
Directory Proxy Server をコンソールから停止するには、次の手順に従います。 166
Directory Proxy Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。 166
Directory Proxy Server インスタンスを stop-dps.exe から停止するには、次の手順に従います。 . 167
HADB を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。 167
Instant Messaging を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 167
Instant Messaging を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 168
Instant Messaging を imadmin.bat から起動するには、次の手順に従います。 168
Instant Messaging の停止 168
Instant Messaging を imadmin.bat から停止するには、次の手順に従います。 168
Message Queue を Windows の「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 169
Windows サービスを使用して Message Queue を起動するには、次の手順に従います。 169
Windows サービスを使用して Message Queue を停止するには、次の手順に従います。 169
Messaging Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 170
Messaging Server を start-msg.bat から起動するには、次の手順に従います。 170
Messaging Server の停止 170
Messaging Server を stop-msg.bat から停止するには、次の手順に従います。 171
Web Server を Windows の「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。 . . . 171
Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を起動および停止するには、次の手順に従います。 171
Web Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。 175
Web Server を startsvr.bat から起動するには、次の手順に従います。 175
Web Server インスタンスを startsvr.bat から起動するには、次の手順に従います。 176
Web Server を停止するには、次の手順に従います。 176
Web Server を stopsvr.bat から停止するには、次の手順に従います。 176
Web Server インスタンスを stopsvr.bat から停止するには、次の手順に従います。 176

Windows ウィザード / グラフィカルアンインストールプログラムを起動するには、次の手順に従います。 181
現在のインストール内容を変更するには、以下の手順を実行します。 181
インストールされているすべてのコンポーネントを削除するには、以下の手順を実行します。. . 182
応答ファイルを生成する 184
ファイルをクリーンアップする 191

はじめに

『Sun Java™ Enterprise System インストールガイド (Microsoft Windows 版)』には、Windows オペレーティングシステムに Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールするために必要な情報が記載されています。

この章で説明する項目は次のとおりです。

- 17 ページの「対象読者」
- 18 ページの「このマニュアルの構成」
- 19 ページの「表記上の規則」
- 19 ページの「関連マニュアル」
- 21 ページの「Sun マニュアルへのアクセス」
- 22 ページの「サードパーティの Web サイト」
- 22 ページの「Sun のテクニカルサポートへの問い合わせ」
- 22 ページの「ご意見、ご要望の送付先」

対象読者

このマニュアルは、Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールする評価担当者、システム管理者、およびソフトウェア技術者を対象としています。

このマニュアルは、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品のインストール
- サポートしている Sun Java Enterprise System プラットフォーム上のシステム管理とネットワーキング
- インターネットと World Wide Web

このマニュアルの構成

このマニュアルは以下の章で構成されています。

第 1 章「インストール計画の概要」では、Windows 環境にインストールするための計画タスクについて説明します。また、今回のリリースでインストール可能なコンポーネントも示します。

第 2 章「インストールシーケンスの作成」では、インストールに伴う主な問題、コンポーネントの相互依存関係、および利用できる設定オプションについて説明します。

第 3 章「インストール手順と前提条件」では、Windows JES ソフトウェアの入手方法、およびインストールとアンインストールの手順について説明します。この章では、コンポーネントの依存関係などのインストール前提条件についても説明します。

第 4 章「インストールのシナリオ」では、さまざまなインストール方法の具体例を示します。

第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」では、Windows インストールウィザードを使用したインストール手順について説明します。

第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」では、さまざまなコンポーネントの設定情報について説明します。

第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」では、「あとで設定」オプションでインストールした後に、バッチファイルを実行してコンポーネントを設定する方法について説明します。

第 8 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」では、設定を常に監視していなくともバックグラウンドで複数のインストール作業を実行できる応答ファイルを生成する方法について説明します。

第 9 章「コンポーネントの起動と停止」では、アプリケーションコンポーネントをインストールして設定した後に実行する方法について説明します。また、コンポーネントの停止方法についても説明します。

第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」では、ソフトウェアのアンインストール方法について説明します。

第 11 章「トラブルシューティング」では、最もよく発生する問題とそれらの解決方法について説明します。

用語集では、Sun の用語集 Web ページを参照します。ここには、用語とその定義が収録されています。

索引は、このマニュアルで説明しているトピックのテキストを検索するために役立ちます。

表記上の規則

表記*	意味	例
`AaBbCc123`	API および言語の要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、画面出力の表示、サンプルコード。	`.login` ファイルを編集します。 `ls -a` を使用してすべてのファイルを表示します。 `% You have mail.`
`AaBbCc123`	画面出力の表示に対し、ユーザーが入力する文字。	**`% su`** `Password:`
AaBbCc123	実際の名前または値によって置き換えられるコマンドまたはパス名の可変部分。	これらは *class* オプションと呼ばれます。

*. お使いのブラウザの設定は、ここで示している設定とは異なる場合があります。

関連マニュアル

http://docs.sun.com Web サイトでは、Sun テクニカルマニュアルにオンラインでアクセスできます。アーカイブを参照したり、特定のマニュアルのタイトルまたは件名で検索したりできます。

このドキュメントセット内のマニュアル

Sun Java Enterprise System のマニュアルは、PDF (Portable Document Format) 形式および HTML (HyperText Markup Language) 形式のオンラインファイルとして用意されています。どちらの形式のファイルも、障害を持つユーザーにも参照可能です。Sun™ のマニュアルには、次の Web サイトからアクセスできます。

http://docs.sun.com

Sun Java Enterprise System マニュアルには、システム全体についての情報と個々のコンポーネントについての情報が含まれています。このマニュアルには次の場所からアクセスできます。

http://docs.sun.com/prod/entsys.05q1

次の表は、Sun Java Enterprise System ドキュメントセットに含まれる、システムレベルのマニュアルを示しています。左の列は各ドキュメントの名称とアクセスできる URL、右の列はドキュメントの簡単な説明を示しています。

表 1 Java Enterprise System ドキュメントセットに含まれるマニュアル

マニュアルのタイトル	説明
『Java Enterprise System リリースノート』 http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja	既知の問題など、Java Enterprise System に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネントごとにリリースノートがあります。
『Sun Java Enterprise System ドキュメントロードマップ』 http://docs.sun.com/doc/819-1912?l=ja	Java Enterprise System に関連するマニュアルについて説明しています。ここから、コンポーネントに関連するマニュアルにリンクすることができます。
『Sun Java Enterprise System 技術の概要』 http://docs.sun.com/doc/819-1926?l=ja	Java Enterprise System の技術的な概念、およびそのマニュアルで使用されている用語を説明しています。Java Enterprise System、そのコンポーネント、および分散型エンタープライズアプリケーションのサポートで果たす役割の説明があります。システム配備の紹介を含む、ライフサイクルの概念についても説明しています。
『Java Enterprise System 配備計画ガイド』 http://docs.sun.com/doc/819-1919?l=ja	Java Enterprise System に基づいた大規模な配備を計画する方法の概要を説明しています。配備計画の基本的な概念と原則を示し、全社的な配備の設計を行う際の開始点として使用できるプロセスを多数説明しています。
『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』 http://docs.sun.com/doc/819-2228?l=ja	ユーザー管理を最適化するプロセスについて説明しています。
『Java Enterprise System Deployment Example Series: Evaluation Scenario』 http://docs.sun.com/doc/819-0059	複数の評価シナリオを実行する、一連の例が紹介されています。
『Java Enterprise System Deployment Example Series: Small Scale Communications Scenario』 http://docs.sun.com/doc/819-0060	複数のシステム要件を満たすために実行できる、一連の配備シナリオが紹介されています。

表 1　Java Enterprise System ドキュメントセットに含まれるマニュアル (続き)

マニュアルのタイトル	説明
『Sun Java Enterprise System インストールガイド』 http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja	Java Enterprise System のインストールプロセスについて説明しています。インストールするコンポーネントの選択方法と設定方法、およびインストールしたソフトウェアが適切に機能していることを確認する方法を説明しています。
『Java Enterprise System アップグレードと移行』 http://docs.sun.com/doc/819-2235?l=ja	前のバージョンから新しいバージョンへアップグレードおよび移行するための手順について説明しています。
『Sun Java Enterprise System 用語集』 http://docs.sun.com/doc/819-1933?l=ja	Sun Java Enterprise System マニュアルで使用している用語が定義されています。

Sun マニュアルへのアクセス

製品のダウンロード、プロフェッショナルサービス、サービスパックとサポート、および開発者向け追加情報については、次のオンライン上のリソースにアクセスしてください。

- ダウンロードセンター
  http://wwws.sun.com/software/download/
- プロフェッショナルサービス
  http://www.sun.com/service/sunps/sunone/index.html
- Sun Enterprise サービス、Windows サービスパック、およびサポート
  http://sunsolve.sun.com/
- 開発者向け情報
  http://developers.sun.com/prodtech/index.html

次の場所には、Sun Java Enterprise System およびそのコンポーネントに関する情報が用意されています。

http://wwws.sun.com/software/learnabout/enterprisesystem/

ローカライズ版を含む幅広い種類の Sun マニュアルは、次のサイトで閲覧、印刷、または購入できます。

http://www.sun.com/documentation

サードパーティの Web サイト

Sun は、このマニュアルに記載されているサードパーティの Web サイトが利用可能かどうかについて責任を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆる内容、広告、製品、およびその他の資料を保証するものではなく、責任または義務を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆるコンテンツ、製品、またはサービスによって生じる、または使用に関連して生じる、または信頼することによって生じる、いかなる損害または損失についても責任または義務を負いません。

Sun のテクニカルサポートへの問い合わせ

製品のドキュメントで解決できない、本製品に関する技術的な質問の問い合わせ先については、次のサイトを参照してください。

http://www.sun.com/service/contacting

ご意見、ご要望の送付先

Sun ではマニュアルの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。ご意見をお送りになるには、http://docs.sun.com にアクセスして「コメントの送信」をクリックしてください。オンラインフォームで、マニュアルのタイトルと Part No. を入力してください。部品番号は、マニュアルのタイトルページまたは最上部に記載されている 7 桁または 9 桁の番号です。

第 1 章

インストール計画の概要

この章では、Sun Java Enterprise System のインストールを準備する方法の概要を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

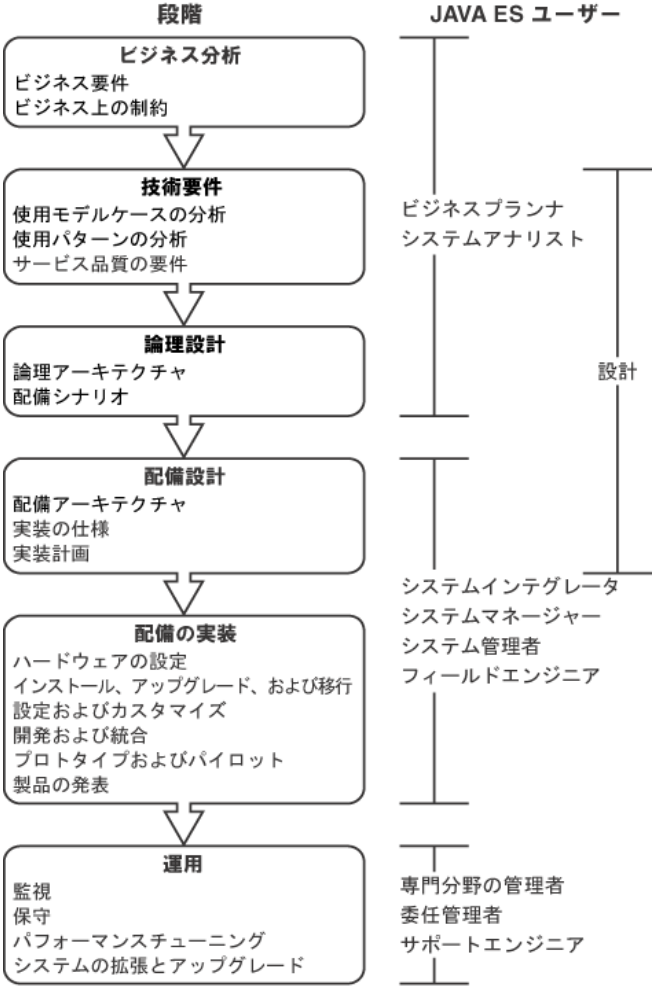
- 23 ページの「Java Enterprise System ソリューションのライフサイクルにおけるインストールの位置付け」
- 26 ページの「インストール計画のタスクの概要」
- 29 ページの「次の手順」

Java Enterprise System ソリューションのライフサイクルにおけるインストールの位置付け

Java Enterprise System は、多くの Sun のサーバー側製品を 1 つのソフトウェアシステムに統合し、分散型のエンタープライズアプリケーションのサポートに必要なサーバーソフトウェアを提供します。この製品群を構成する個々の製品間の関係によっては、インストール手順が複雑になる場合があります。

次の図は、インストールが Java Enterprise System ソリューションのどの段階に位置付けられるのかを示しています。この図の右側のボックスは、ソリューションの各段階に当てはまるユーザープロファイルを示しています。

図 1-1　Sun Java Enterprise System ソリューションのライフサイクル



コンポーネントの依存関係が複雑なため、Sun Java Enterprise System のインストール手順は単純ではありません。付属のマニュアルを使用して、順序どおりにインストールタスクを実行することが重要です。インストールタスクは、次のように進める必要があります。

1. Sun Java Enterprise System で利用できるマニュアルへのアクセス方法を理解します。

   『Sun Java Enterprise System ドキュメントロードマップ』(http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-1912?l=ja) を参照してください。

2. Java Enterprise System とは何か、およびそのコンポーネントとサービスがどのように動作するかを理解します。

   『Sun Java Enterprise System 技術の概要』
   (http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-1926?l=ja) を参照してください。

3. 配備を計画します。

   『Java Enterprise System 配備計画ガイド』
   (http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-1919?l=ja) に記載されている配備計画の考え方の説明を参照してください。

4. インストールを計画します。

   - イベントのインストールシーケンスを作成し、インストールに必要な情報を収集します。
   - Windows または特定のコンポーネントに関連するインストールの問題については、『Java Enterprise System リリースノート』
     (http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-0815?l=ja) を参照してください。

5. Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールします。

   ソフトウェアをホストにインストールし、必要に応じてインストール後の設定を行い、個々のコンポーネントを起動します。

6. 配備を終了します。

   カスタマイズまたはデータの移行など、配備の実装に必要な追加タスクを完了します。ガイダンスについては、次の Java Enterprise System マニュアルを参照してください。

   - 『Sun Java Enterprise System ドキュメントロードマップ』
     (http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-1912?l=ja)
   - 『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』
     (http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-2228?l=ja)

インストール計画のタスクの概要

次の表は、どの Java Enterprise System インストールにも共通しているインストール計画タスクを示しています。左の列には、上位レベルのタスクと、各タスクのサブタスクの一覧を示しています。右の列には各タスクを実行する手順の参照先を示しています。

表 1-1 インストール計画のタスク

実行するタスク	情報の参照先
1. ターゲットホストの調査	
ホストまたはターゲットホストにどの Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールするのかを確認します。	27 ページの「インストールされるコンポーネント」
ホストでインストールの準備が整っているかどうかを確認します。システム要件、アクセス権限、メモリおよびディスクの要件などを確認します。	28 ページの「システムの準備状態の確認」
2. インストールシーケンスの作成	
配備アーキテクチャーと実装の仕様を確認します。	31 ページの「配備の実行に必要な事項」
配備するにあたり、Sun Java Enterprise System のインストール方法に影響を与える特定の状況を確認します。	33 ページの「主要なインストールの問題」
インストールするコンポーネントの依存関係を識別します。	34 ページの「コンポーネントの相互依存関係がインストールに与える影響」
設定をインストール時に行うか、またはインストール後に行うかを選択します。	38 ページの「最適な設定オプション」
インストールセッションの回数と順序を決定します。	39 ページの「必要なインストールセッションの数」
3. 設定データの収集	
管理サーバー設定を確認します。	96 ページの「Administration Server の設定」
インストーラが「クイック設定」オプションで必要とする設定データを判断します。	95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

Sun Java Enterprise System インストールプログラムの動作の詳細については、41 ページの第 3 章「インストール手順と前提条件」を参照してください。

インストールされるコンポーネント

このリリースに関連する Sun Java Enterprise System ソフトウェアには、次の選択可能なコンポーネントが含まれています。

- Access Manager
- 管理サーバー
- Application Server
- Calendar Server
- Communications Express
- Delegated Administrator Server
- Directory Server
- Directory Proxy Server
- HADB
- Instant Messaging
- Message Queue
- Messaging Server
- Portal Server
- Portal Server Secure Remote Access
- Web Server

コンポーネントによっては、選択可能なサブコンポーネントがあります。

インストール前に次の手順に従ってホストを調査できます。

システムの準備状態の確認

インストール手順を開始する前に、この項で説明する問題を確認します。

システム要件

Sun Java Enterprise System をインストールする前に、システム内のホストがハードウェアとオペレーティングシステムの最小要件を満たしていることを確認します。

表 1-2　サポートするプラットフォーム

S.No	サポートするプラットフォーム
1	Windows 2000 Advanced Server SP4 以上
2	Windows 2000 Server SP4 以上
3	Windows 2000 Professional Edition SP4 以上
4	Windows XP Professional Edition SP2

サポートするプラットフォーム、ソフトウェア要件、およびハードウェア要件に関する最新の情報は、次の Web サイトにある『Sun Java Enterprise System Release Notes for Windows』(http://docs.sun.com/doc/819-1573) の「Hardware and Software Requirements」を参照してください。

ホストに実装されているオペレーティングシステムが Sun Java Enterprise System の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは処理を中断します。インストール前に、この問題を解決する必要があります。

アクセス権

Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールするには、管理者としてログインするか、管理者権限を持っている必要があります。

メモリとディスク容量の要件

必要なディスク容量は、Windows システムドライブ内のインストーラのサイズ、および製品のインストール先のドライブ内のインストーラのサイズの 2 倍です。

注　ここに示したサイズは、ユーザーが選択する製品のサイズです。

選択したコンポーネントが必要とするメモリとディスク容量が十分であるかどうかについて、インストーラはホストを検証します。

- ホストのメモリが Sun Java Enterprise System の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは警告メッセージを表示しますが、インストールを続行することを許します。
- ホストのディスク容量が不足している場合は、インストーラは処理を中断します。この問題を解決してからインストールを再開する必要があります。

  この問題は、`%TEMP%` を必要な量の空き領域があるほかのドライブにマッピングすると解決できます。

次の手順

どのインストール計画タスクが必要なのかを理解し、ターゲットホストの調査が完了したら、作成した配備ドキュメントに基づいてインストールシーケンスを作成することができます。31 ページの第 2 章「インストールシーケンスの作成」に進んでください。

第 2 章

インストールシーケンスの作成

この章では、Sun Java Enterprise System の配備計画に基づいてインストールシーケンスを作成するための情報とガイドラインを示します。まだ配備計画を作成していない場合、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 配備計画ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1919?l=ja) を参照してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 31 ページの「配備の実行に必要な事項」
- 33 ページの「主要なインストールの問題」
- 34 ページの「コンポーネントの相互依存関係がインストールに与える影響」
- 38 ページの「最適な設定オプション」
- 39 ページの「必要なインストールセッションの数」
- 40 ページの「次の手順」

配備の実行に必要な事項

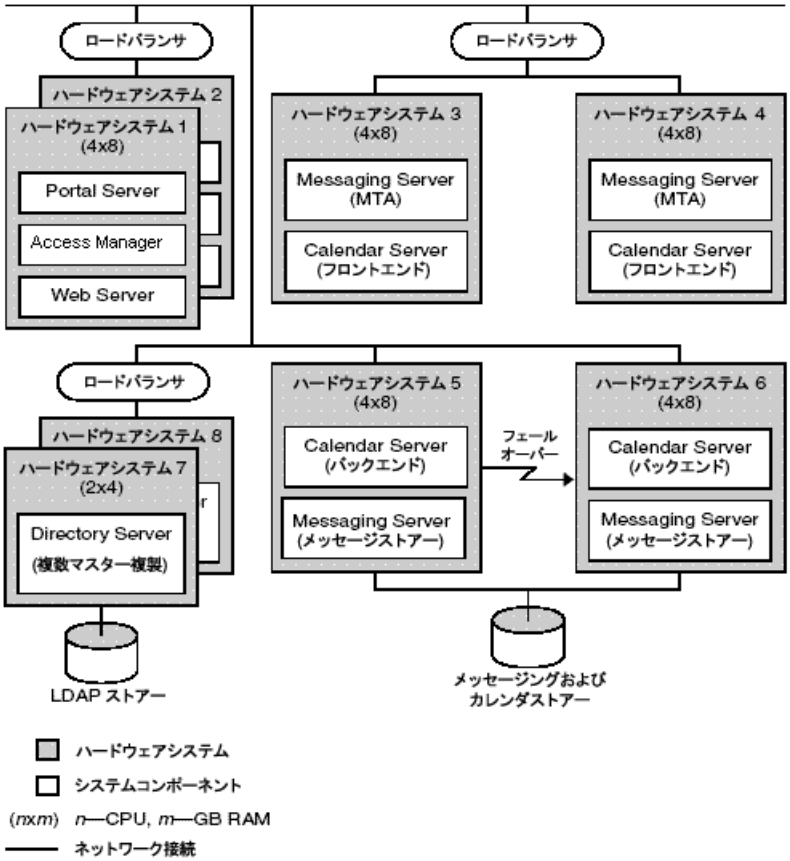
ここでは、実行する必要のある Sun Java Enterprise System のインストールタスクに関連する配備計画ドキュメントを解釈する方法について説明します。インストール計画の基礎を成す配備計画ドキュメントには、2 つのドキュメントがあります。配備アーキテクチャーと実装仕様です。

配備アーキテクチャーの確認

「配備アーキテクチャー」とは、論理アーキテクチャーを物理的なコンピュータ環境に大まかにマッピングしたものです。物理環境には、イントラネットまたはインターネット環境のコンピュータノード、これらのネットワークリンク、およびソフトウェアのサポートに必要な物理デバイスが含まれます。

次の図は、代表的な配備アーキテクチャーを示しています。

図 2-1　配備アーキテクチャーの例



主要なインストールの問題

各配備では、さまざまなコンポーネントで問題が発生します。実装仕様を調査することで、インストールを実行するのに必要なタスクを決定する主な問題を識別することができます。

次の表は、インストールシーケンスに影響を与える可能性のあるいくつかの代表的な配備状況を示します。

表 2-1 考慮する必要のあるインストールの問題

状況	ガイドラインまたは取扱説明書
ディレクトリの複製	Directory Server の複製を設定するためのガイドラインは、『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』(http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-2228?l=ja) にあります。
Portal Server と Access Manager の分離	Portal Server と Access Manager は、別々のマシンにインストールできます。
Schema 1	Schema 1 配備の場合は、Access Manager を使用することはできません。
シングルユーザーエントリ	シングルユーザーエントリの設定用のガイドライン (通常はシングルサインオンに使用する) は、『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』(http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-2228?l=ja) にあります。Schema 2 でシングルサインオンを設定するには、Access Manager が必要です。

コンポーネントの相互依存関係がインストールに与える影響

Sun Java Enterprise System の最適なインストールの順序を決定するには、コンポーネントの相互依存関係を理解することが重要です。インストールの観点からすると、Sun Java Enterprise System コンポーネントは通常は、最下部のレイヤーが上部レイヤーすべての土台となるように、層状に配置されます。

5	Portal Server、Portal Server Secure Remote Access
4	Calendar Server、Messaging Server Instant Messaging、Communications Express
3	Directory Server、Access Manager、Directory Proxy Server
2	Web コンテナ (Application Server、Web Server)
1	Windows

前の図は、同じホスト内でどのコンポーネントがほかのどのコンポーネントを「必要」としているのかを必ずしも示してはいません。たとえば、配備で Web コンテナが不要の場合、図中の 2 番目のレイヤーはインストール計画で考慮する要素にはなりません。

次の表は、Sun Java Enterprise System コンポーネント間の依存関係を示しています (J2SE などの、共有コンポーネント間の依存関係は示していない)。この表を利用して、インストールのために依存連鎖のリストやダイアグラムを作成することができます。左側の列はコンポーネント、中央の列は各コンポーネントの必要コンポーネントを示し、右側の列はこの必要なコンポーネントをローカルマシンにインストールする必要があるかどうかを示します。

表 2-2 コンポーネント間の相互依存関係

コンポーネント	必要コンポーネント	ローカルである必要があるか
Access Manager	Directory Server	なし
	Web コンテナ。次の 2 つのいずれか。 • Application Server • Web Server	あり
Access Manager SDK	Access Manager	なし
管理サーバー	Directory Server	なし
Application Server	Message Queue	あり
	Web Server (負荷分散に必要)	あり

表 2-2　コンポーネント間の相互依存関係 (続き)

コンポーネント	必要コンポーネント	ローカルである必要があるか
Calendar Server	Directory Server	なし
	Schema 2 の場合 :	
	Access Manager または Access Manager SDK	なし あり
	Web コンテナ。「Access Manager」を参照。	なし
Communications Express	Directory Server	なし
	管理サーバー	あり
	Access Manager または Access Manager SDK	なし あり
	Web コンテナ。次の 2 つのいずれか。 • Application Server • Web Server	あり
	Calendar Server (カレンダーサービスを使用する場合)	なし
	管理サーバーでの Messaging Server (メッセージングサービスを使用する場合)	あり
Delegated Administrator	任意の Web コンテナと Access Manager	あり
Directory Proxy Sever	Directory Server	なし
	管理サーバー	あり
Directory Server	なし	なし
Directory Preparation Script	Directory Server	あり
HADB	なし	なし

表 2-2　コンポーネント間の相互依存関係 (続き)

コンポーネント	必要コンポーネント	ローカルである必要があるか
Instant Messaging	Directory Server	なし
	シングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシー :	
	Access Manager または Access Manager SDK	いいえ (Instant Messaging コア) はい (Instant Messaging リソース)
	Web コンテナ。「Access Manager」を参照。	なし
Message Queue	なし	なし
Messaging Server	Directory Server	なし
	管理サーバー	あり
	Schema 2 の場合 :	
	Access Manager または Access Manager SDK	なし あり
	Web コンテナ。「Access Manager」を参照。	なし
Portal Server	Access Manager または Access Manager SDK	なし あり
	Web コンテナ。「Access Manager」を参照。	あり
Portal Server Secure Remote Access	Portal Server	なし
	Access Manager または Access Manager SDK	なし あり
	Web コンテナ。「Access Manager」を参照。	あり
Web Server	なし	なし

コンポーネントの依存関係は、あらゆる面でインストールに影響を与えます。

例 :

- **Web コンテナ :** Access Manager、Portal Server、Communication Express、Delegated Administrator などのいくつかの製品には、Web コンテナが 1 つ必要です。Web コンテナは、Application Server か Web Server のいずれかにすることができます。
- **リモート依存性 :** 必要なコンポーネントのリモートコピーを使用して、数多くのコンポーネントの依存性を満たすことができます。リモートコンポーネントに依存するコンポーネントをインストールする前に、リモートコンポーネントをインストールして稼働しておく必要があります。これには、複数のインストールセッションが必要になります。
- Schema 1: Calendar Server と Messaging Server はともに、Schema 1 または Schema 2 のどちらかを使用できます。Schema 1 で Calendar Server または Messaging Server を使用している場合、Access Manager は使用できません。
- Schema 2: Calendar Server または Messaging Server を Schema 2 で使用する場合は、Access Manager または Access Manager SDK を選択する必要があります。
- **シングルサインオン**: Schema 2 環境でシングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシーを実装する場合は、Access Manager が必要です。Delegated Administrator は、Access Manager とともに自動的にインストールされます。
- Access Manager SDK: Access Manager SDK は、Access Manager を使用する場合にのみ必要です。個別にインストールする場合、Access Manager SDK には Access Manager のリモートコピーが必要です。

インストール時に、要件を満たすコンポーネントの選択に失敗した場合、要件が満たされていないことを示すメッセージが表示されます。この要件が満たされるまで、インストールを進めることはできません。

複数のホストにコンポーネントをインストールする順序は、選択したコンポーネントの相互依存関係によって決まります。

Sun Java Enterprise System のインストール経験があるユーザーなら、さまざまな方法でインストールシーケンスを調整して所要時間を短縮できる場合があります。次のインストールシナリオは、この点を理解する助けになります。

最適なセットアップタイプ

Sun Java Enterprise System インストーラには、次の 2 種類のセットアップオプションがあります。

- デフォルト
- カスタム

注 セットアップタイプを選択するように要求されるのは、最初のインストーラ実行セッション時のみです。

「デフォルト」オプション

インストーラは、インストールするすべての Java Enterprise System コンポーネントを選択し、依存関係を確立することによって製品を自動的に設定します。すべての製品に適用される管理者設定を設定することができます。製品のサブセットを選択することはできず、設定タイプを選択することもできません。このインストールタイプは、評価目的で 1 台のシステムにインストールする場合に最適です。

「カスタム」オプション

インストーラで「製品の選択」画面が表示され、このセッションでインストールする「コンポーネント」を選択できます。インストールされる製品のサブセットに対する設定を選択することもできます。

最適な設定オプション

Sun Java Enterprise System インストーラには、システムコンポーネントを設定するための次の 2 つのオプションがあります。

- **インストール中に自動的に設定 (クイック設定)。**インストール後、インストーラによって決定されるデフォルト設定を使用して直ちに設定が有効になります。
- **インストール後に手動で設定 (あとで設定)。このセッションではインストールのみが行われ、**設定はあとのセッションでバッチファイルを使用して行われます。

設定の種類を選択するように要求されるのは、最初のインストーラ実行セッション時のみです。それ以降のどのセッションでも、最初のセッションで選択した設定オプションが使用されます。複数セッションの詳細については、40 ページの「複数インストールセッション」を参照してください。

「クイック設定」オプション

「クイック設定」オプションを選択すると、インストーラは各製品のデフォルト値を使用して設定を完了します。ユーザーは、「製品の選択」パネルから製品を選択したり選択解除したりできます。選択した製品はすべて、クイック設定インストール時に設定されます。

「あとで設定」オプション

「あとで設定」オプションを選択した場合、インストーラは、コンポーネントのパッケージファイルをそれぞれのディレクトリにインストールします。パラメータの設定は行われず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネントはそのままでは機能しません。インストール後に、インストールしたコンポーネントごとに設定ツールを実行する必要があります。

必要なインストールセッションの数

分散配備シナリオで複数のシステムにさまざまな Java ES コンポーネントをインストールする場合、それぞれのシステム上で複数のインストールセッションが必要になります。そのような状況では「あとで設定」モードを使用することをお勧めします。評価用インストールを作成する間、1 回のセッションですべてをインストールすることも、あるいはインストーラを何回か実行してコンポーネントを徐々に追加していくこともできます。単一システムインストールでは、どちらの設定モードも使用できます。

単一インストールセッション

単一インストールセッションは、次の場合に便利です。

- 評価目的でインストールする場合。

  評価目的の場合は、デフォルト値を使用して単一インストールセッションですべてのコンポーネントをインストールすることが普通です。

- 1 つのコンポーネントを 1 台のホストにインストールする場合。

  単一インストールセッションは、その 1 つのコンポーネントでリモート依存性などの依存要件がすでにすべて満たされている場合にうまくいきます。

複数インストールセッション

複数インストールセッションでは、いくつかのコンポーネントをインストールするためにインストーラを 1 回実行してから、再度インストーラを実行してその他のコンポーネントを別のホストにインストールします。

関連するコンポーネント (たとえば、Directory Server、Directory Proxy Server、管理サーバー) に対して複数インストールセッションを使用する場合は、各セッションを通じてパラメータ設定を同一にする必要があります。

次の手順

既存のホストの調査と必要なアップグレードをまだ実行していない場合は、以下を参照してください。

『Java Enterprise System アップグレードと移行』
(http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-2235?l=ja)

インストールの前提条件およびコンポーネントの相互依存関係については、41 ページの第 3 章「インストール手順と前提条件」を参照してください。

第 3 章

インストール手順と前提条件

この章には、Sun Java™ Enterprise System ソフトウェアのインストールを開始する前に必要な情報が記載されています。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 41 ページの「Sun Java Enterprise System ソフトウェアの入手」
- 42 ページの「Sun Java Enterprise System のインストール手順」
- 45 ページの「Sun Java Enterprise System のアンインストール手順」
- 48 ページの「インストールの前提条件」
- 49 ページの「次の手順」

Sun Java Enterprise System ソフトウェアの入手

Sun Java Enterprise System ソフトウェアは、次の方法で入手できます。

- CD または DVD

  http://wwws.sun.com/software/javaenterprisesystem/index.html またはご購入先から CD または DVD を含むメディアキットを入手できます。各 CD には、単一オペレーティングシステム用のインストールファイル、Sun Java Enterprise System インストーラプログラム、およびすべての実行ファイルが収録されています。

- Web ダウンロード

  Sun Download Center (`http://www.sun.com/download`) では、Sun Java Enterprise System ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。次の形式で入手できます。

  - 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む ISO CD イメージ。

  - 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ。
  - 単一コンポーネントのすべてのインストールファイルの圧縮アーカイブ。選択されたコンポーネントが依存するすべてのサブコンポーネントを含む。

- **ネットワーク上のファイルサーバー**

  各企業の操作手順によっては、社内ネットワークに Sun Java Enterprise System のインストールファイルが用意されている場合があります。このような環境に該当するかどうかについて、システムを操作または管理する担当者に確認してください。

Sun Java Enterprise System のインストール手順

Sun Java Enterprise System インストーラは、インストールに Windows インストーラサービスを利用します。インストーラはウィザード (GUI インタフェース) を使用し、実行すべき作業を一連の対話型パネルによって順に示します。また、パラメータによるサイレントインストールモードもサポートしています。サイレントインストールモードでは、インストールを開始する前にインストール要件にしたがって応答ファイルを生成します。

Sun Java Enterprise System のどのコンポーネントも単一セッションでインストールでき、そのようにすることには次の利点があります。

- 一貫したインストールとアンインストールのポリシーおよび動作
- 同じリリースレベルで認証された共有コンポーネント

インストーラのモード

インストーラは、次の 2 種類のインストールをサポートします。

- **対話的なグラフィカルモード :** ホストに Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールするためのタスクを順に示す対話的なグラフィカルウィザードを提供します。
- **サイレントモード :** 複数のホスト上で Sun Java Enterprise System インストーラをサイレントモードで実行するオプションを提供します。インストーラへの入力を指定するために作成した応答ファイルを毎回使用します。サイレントモードでのインストールの場合、まずウィザードによりインストーラを実行しながら、名前と値のペアのセットを応答ファイルに保存します。サイレントモードインストールの詳細については、第 8 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」を参照してください。

言語の選択

対話式インストーラは、オペレーティングシステムのロケール設定で指定されている言語で実行されます。次の言語を利用できます。

- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- 日本語
- 韓国語
- スペイン語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語

オペレーティングシステムの言語がこのリストに含まれていない場合、インストーラは英語で実行されます。インストーラにより、英語版の Java ES のコンポーネントがすべて自動的にインストールされます。さらに、コンポーネントパッケージを、上のリスト内のいずれかの言語でインストールできます。オペレーティングシステムの言語がリスト内の言語と一致する場合、コンポーネントのインストールに、その言語が自動的に選択されます。

ただし、別の言語を選択することも可能です。インストールセッションでは、インストールするすべてのコンポーネントに選択した言語が適用されます。

依存性の確認

コンポーネントの多くは、主要な機能を提供するために、ほかのコンポーネントの存在に依存しています。ユーザーが選択したコンポーネントが、相互依存関係に基づいて正常に機能するように、インストーラはコンポーネント間のチェックを広範囲に行います。このため、インストーラは、ユーザーが選択するコンポーネントに応じて、特定のコンポーネントをインストールに含めるよう求めます。表示されるプロンプトメッセージは、選択した設定の種類に基づいています。Sun Java Enterprise System は、「クイック設定」および「あとで設定」オプションをサポートします。

通常、Sun Java Enterprise System インストーラは、次の規則を使用してコンポーネント間の依存性を処理します。

- ユーザーがコンポーネントを選択すると、選択されたコンポーネントが依存するサブコンポーネントが自動的に選択されます。

  たとえば、Application Server を選択すると、インストーラは Message Queue を自動的に選択します。

- Web コンテナを必要とするコンポーネントを選択したのに、Application Server も Web Server も選択しない場合は、いずれかを Web コンテナとして選択するように要求するメッセージが表示されます。
- 「クイック設定」モードで選択した別のコンポーネントにとってローカルまたはリモートで必要なコンポーネントを選択解除すると、さまざまな警告が表示されます。警告メッセージは、必要なコンポーネントを選択するように指示します。「あとで設定」モードでは、ユーザーはリモートで必要な製品を選択解除してインストール手順を進めることができますが、設定時に必要な製品の情報を提供できるようにしておく必要があります。
- サブコンポーネントを選択すると、インストーラはサブコンポーネントが属すコンポーネントを自動的に選択します。また、選択したサブコンポーネントがほかのコンポーネントまたはサブコンポーネントに依存する場合は、それらは自動的に選択されます。
- コンポーネントの選択を解除すると、インストーラはすべてのサブコンポーネントの選択を自動的に解除します。
- 依存性の確認は、「クイック設定」モードでは別の方法で行われます。依存性はすべてローカルであるとみなされます。単一システムインストールでは、リモートの依存性は許されていないためです。

設定オプションとパラメータの設定

Sun Java Enterprise System インストーラには製品を設定するための 2 つのオプションが用意されています。オプションを選択する前に、インストールタスクを計画することをお勧めします。

- **クイック設定 :** このオプション (インストール中に自動的に設定) は、単一システム上のコンポーネントの評価に使用します。インストール中に、このオプションを使用してコンポーネントを設定できるので、インストール時の設定が可能になります。

  このモードでは、管理者設定ダイアログで、管理者のユーザー ID とパスワードの値を指定します。ポート番号などのその他すべての設定情報は事前に決定されたデフォルト値となり、インストールの最後にユーザーに提示されます。それらのデフォルト値は、コンポーネントの設定に使用されます。

  管理者ユーザー ID とパスワードには特殊文字を使用できません。また、パスワードは 8 文字以上にする必要があります。

- **あとで設定 :** インストール中に、このオプション (インストール後に手動で設定) を使用すると、ソフトウェアコンポーネントをそれぞれのディレクトリに配置するために必要な最小限の値を入力すれば、インストールが完了します。設定は、インストール後に実行されます。

このオプションの場合は、管理者設定ダイアログは表示されません。インストール時にはファイルのコピーのみが行われます。プロパティファイルにバッチファイルにより起動された GUI から正しい値を取り込み、手動で設定プログラムを呼び出して設定を完了する必要があります。プロパティファイルへの値の取り込みについては、第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」を参照してください。

製品がほかの製品に依存する場合は、依存する製品を先に設定するようにします。

選択する設定オプションによっては、インストール時に次のパラメータ情報が必要になる場合があります。

- **管理者設定：** これらは複数のコンポーネントが使用するパラメータです。たとえば、ほとんどのコンポーネントには管理者ユーザー ID およびパスワードを指定する必要があります。これらの共通の値を設定することにより、すべてのコンポーネントの管理者ユーザー ID とパスワードのデフォルト値を設定することになります。

注 管理サーバー用のユーザー ID と Messaging Server 用のユーザー ID は異なります。

Sun Java Enterprise System のアンインストール手順

Sun Java Enterprise System には、インストーラを使用してシステムにインストールしたコンポーネントを削除するためのアンインストールプログラムが用意されています。

アンインストールウィザードには、次のようにしてアクセスできます。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。
3. 「Sun Java(TM) Enterprise Systems」を選択します。
4. 「変更と削除」をクリックします。

アンインストールプログラム自体は、Sun Java Enterprise System コンポーネントがすべてアンインストールされた後に、自動的に削除されます。

全般的な動作

Sun Java Enterprise System のインストール手順と同様、アンインストール手順もウィザード (GUI モード) とサイレントモードのいずれかで実行できます。

- アンインストールプログラムが削除するのは、Sun Java Enterprise System インストーラがインストールしたコンポーネントのみです。Sun Java Enterprise System インストーラでインストールしていないコンポーネントを削除するには、コンポーネントのマニュアルに記載されているアンインストール手順に従ってください。
- アンインストールプログラムは、Sun Java Enterprise System コンポーネントがインストールされているホストごとに、個別に実行する必要があります。削除するコンポーネントを、ホストごとに 1 つまたは複数選択することができます。
- 一部のコンポーネントのみがアンインストールされる場合は、アンインストールプログラムによって Sun Java Enterprise System の共有コンポーネントが削除されることはありません。
- ただし、設定ファイルとユーザーデータファイルは削除される場合があります。削除される設定ファイルとユーザーデータファイルは、各コンポーネントによって異なります。
- アンインストール後に、さらにファイルやディレクトリを手動で削除する必要がある場合があります。
- アンインストールプログラムは、アンインストールプログラムが実行されているシステムにコンポーネントの依存関係がないかを調べ、依存関係を検知した場合は警告メッセージを表示します。

一部のコンポーネントの削除に影響する依存関係の詳細については、「相互依存関係の処理」を参照してください。

相互依存関係の処理

アンインストールプログラムの動作は、インストールされたコンポーネント、および、それらの相互関係によって決まります。

- アンインストールプログラムは、同一ホストにインストールされている製品間の依存関係を認識します。同一ホスト上で依存関係を持つコンポーネントをアンインストールしようとすると、アンインストールプログラムは警告を出力します。

  たとえば、「クイック設定」オプションを使用して製品をインストールし、Access Manager がまだインストールされている状態で Directory Server をアンインストールしようとすると、アンインストールプログラムが依存関係について警告し、アンインストールを進めることはできません。

- 通常は、他のコンポーネントが依存していないコンポーネントはアンインストールできます。

  たとえば、Portal Server は Access Manager に依存しています。Portal Server は Access Manager がなければ機能しないため、Access Manager をアンインストールしようとすると警告が表示されます。ただし、Portal Server をアンインストールしようとした場合は別です。Access Manager は Portal Server がなくても機能するため、警告は表示されません。

警告 コンポーネント製品をアンインストールするときは、どの製品がそのコンポーネントをサポートするように設定されているかを調べ、必要であれば追加の設定を行います。必要な追加設定を行わない場合、存在しなくなった製品をサポートするように設定されたコンポーネントがシステムに残されることになります。

アンインストールプログラムは、次の相互依存関係を認識しません。

- 「リモートホストからのコンポーネント依存関係」
- 「設定によるコンポーネントの依存関係」

リモートホストからのコンポーネント依存関係

一部のコンポーネントの依存関係は、選択した設定が「あとで設定」である場合にのみ、リモートホストに配備されたコンポーネントで満たすことができます。アンインストールプログラムはこのような依存関係を認識しません。

たとえば、Directory Server をアンインストールしようとした場合に、アンインストールプログラムは Access Manager が Directory Server に依存することを、この両方のコンポーネントが同じホストに配備されている場合でも警告しません。これは、異なるホスト上にある別の Directory Server インスタンスが Access Manager をサポートする「可能性がある」ためです。

設定によるコンポーネントの依存関係

アンインストールプログラムは、インストール後の設定によって生じるコンポーネント間の依存関係を認識しません。

たとえば、同じホストに Portal Server と Calendar Server をインストールし、Portal Server のカレンダーチャネルとして Calendar Server を使用するように Portal Server を設定したとします。この設定により、Portal Server は Calendar Server に依存します。ただし、そのあとで Calendar Server をアンインストールしようとしても、アンインストールプログラムはインストール後の設定を認識していないため、Portal Server が Calendar Server に依存することを警告しません。

インストールの前提条件

次の表は、すべての種類のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、中央の列は実行する操作を説明しています。右の列は、手順の参照先と便利なその他の情報を示しています。すべてのインストールですべてのタスクが必要なわけではありません。

表 3-1　インストール前のチェックリスト

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
1	Sun Java Enterprise System コンポーネントのインストール方法を計画します。	31 ページの第 2 章「インストールシーケンスの作成」
2	システム要件が満たされていることを確認します。	28 ページの「システムの準備状態の確認」 『Java Enterprise System リリースノート』、http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja
3	管理ユーザーの場合、必要なシステムアカウントを作成します。	Directory Server、Directory Proxy Server、または管理サーバーをルート以外のユーザーとして実行する場合は、設定前にシステムアカウントを作成する必要があります。
4	すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存するコンポーネントをインストールする場合は、既存のサーバーおよびサービスが稼働しており、アクセス可能であることを確認します。	たとえば、Portal Server Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Secure Remote Access コアが稼働し、アクセス可能である必要があります。
5	Access Manager または Messaging Server をインストールする場合、Access Manager のインストール先のマシンのドメイン名が設定されていることを確認します。	
6	Calendar Server または Messaging Server をインストールする場合、設定プログラムファイルに単純なホスト名ではなく完全修飾ドメイン名 (FQDN) が記載されていることを確認します。	例 : 192.18.99.999　mycomputer.company.com　loghost
7	Web Server をインストールする場合は、UID 80 および GID 80 が Web Server で使用するために割り当てられていないことを確認します。	80 がすでに Web Server に割り当てられている場合は、エラーが発生し、Web Server のインストールに失敗します。
8	再インストールを行う場合、Web Server のインストールディレクトリが存在「しない」ことを確認します。存在する場合、そのディレクトリを削除するか、名前を変更します。	

表 3-1　インストール前のチェックリスト (続き)

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
9	Directory Proxy Server が、すでにインストールされている設定用 Directory Server を使用する場合は、Directory Proxy Server をインストールする前に、設定用 Directory Server が稼働していることを確認します。	Directory Proxy Server と設定用 Directory Server を同時にインストールするときは、このインストール前のタスクを省略できます。

次の手順

インストールの前提条件、各種インストールモード、およびコンポーネントの依存関係の概念を理解できたので、Sun Java Enterprise System をインストールすることができます。インストールについて説明している、次のいずれかの章に進んでください。

83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

147 ページの第 8 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」

「あとで設定」インストールを実行する場合は、95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」で説明する設定情報を収集します。

第 4 章

インストールのシナリオ

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) の一般的なインストールシナリオでのガイドラインについて説明します。これらは文字どおりの手順を示すものではありませんが、ここに示すインストール例の実装に必要な高度な手順を説明します。

単一セッションのシナリオでは、単一ホストに、単一インストールセッションで 1 つまたは複数の Java ES コンポーネントをインストールする代表的な手順について説明します。これには評価の例が含まれます。

残りのシナリオでは、さまざまなソリューションのために、複数ホストで、複数インストールセッションを実行する状況について説明します。

注 Schema 1 の例は、LDAP Schema 1 に基づく唯一のシナリオを提供します。この章のその他の例は、Schema 2 に基づいています。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 52 ページの「単一セッションインストールの例」
- 74 ページの「Calendar Server と Messaging Server の例」
- 76 ページの「Schema 1 Calendar-Messaging の例」
- 78 ページの「アイデンティティ管理の例」
- 78 ページの「通信サービスと共同作業サービスの例」
- 81 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」

単一セッションインストールの例

次の例は、単一セッションで、単一ホストにインストールする場合に適用されます。

- 52 ページの「評価の例」
- 53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」
- 55 ページの「Access Manager と Directory Server の例」
- 56 ページの「Access Manager と Portal Server の例」
- 58 ページの「Application Server のみをインストールする例」
- 60 ページの「Communications Express と Messaging Server の例」
- 62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」
- 63 ページの「Directory Proxy Server のみをインストールする例」
- 65 ページの「Instant Messaging のみをインストールする例」
- 67 ページの「Message Queue のみをインストールする例」
- 68 ページの「Portal Server のみをインストールする例」
- 70 ページの「Portal Server Secure Remote Access のみをインストールする例」
- 72 ページの「Web Server のみをインストールする例」

評価の例

評価インストールでは、通常、インストールがどのように行われるかを確認するために、トライアル配備、クイックインストールが検討されます。Java ES コンポーネントは、単一インストールセッションで単一ホストにインストールされます。この例では、グラフィカルインタフェースと「クイック設定」オプションを使用します。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES グラフィカルインストーラを起動します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択時に、「Sun Java Enterprise System」を選択します。

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

3. インストールディレクトリを確認します

4. 適切な設定オプションを選択します。

5. デフォルト設定がある場合は、それを受け入れます

   非デフォルトの設定情報を使用するには、95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」の該当する設定の表を確認します。

6. インストールサマリーとログを表示します

7. インストール後の設定を完了します

   131 ページの第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」

8. コンポーネントを起動します

   起動手順を確認するには、155 ページの第 9 章「コンポーネントの起動と停止」を参照してください。

初期ユーザーの確立やシングルサインオンの設定を含む、このタイプの配備を実行する詳細な例は、『Java Enterprise System Deployment Example Series: Evaluation Scenario』(`http://docs.sun.com/doc/819-0059`) を参照してください。

Access Manager のみをインストールする例

Access Manager には Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager には、Web コンテナ (Application Server または Web Server) も必要です。Delegated Administrator は、Access Manager とともに自動的にインストールされます。

この例では、Access Manager は Web Server を Web コンテナとして使用しています。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Access Manager と Web Server を選択します。

   Directory Server は自動的に選択されます。

   (オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します
5. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

   - 140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」
   - 133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
   - 144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

9. 次の順序で、コンポーネントを起動します
   a. 161 ページの「Directory Server の起動」
   b. 171 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager を自動的に起動)
10. デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

    `http://`*`webserver-host`*`:`*`port`*`/amconsole`

次の表には、Access Manager の追加情報が含まれています。

表 4-1　Access Manager のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」 133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
起動 / 停止	156 ページの「Access Manager の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	195 ページの「Access Manager のトラブルシューティングツール」
アップグレード	『Java Enterprise System アップグレードと移行』 http://docs.sun.com/doc/819-2235?l=ja

Access Manager と Directory Server の例

Access Manager は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager は、Web コンテナが必要です (この例では Web Server)。Delegated Administrator は、Access Manager とともに自動的にインストールされます。

このインストールの例の一般的な手順には、次の手順が含まれます。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Access Manager と Web Server を選択します。

   Directory Server は自動的に選択されます。

   (オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注　その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

5. インストールを実行します
6. インストールサマリーとログを表示します
7. インストール後の設定を完了します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。
      - 83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。
      - 140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」
      - 133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
      - 144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

8. コンポーネントを起動します
   a. 161 ページの「Directory Server の起動」
   b. 171 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager を自動的に起動)
9. デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

   `http://`*`webserver-host`*`:`*`port`*`/amconsole`

Access Manager と Portal Server の例

この例では、同じホスト上に Access Manager と Portal Server の両方をインストールします。Access Manager には Directory Server が必要ですが、ローカルコピーである必要はありません。Access Manager には Web コンテナ (この例では Application Server) も必要です。Delegated Administrator は、Access Manager とともに自動的にインストールされます。

このインストールの例の一般的な手順には、次の手順が含まれます。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Portal Server と Application Server を選択します。

   Access Manager、Directory Server、および Message Queue は自動的に選択されます。

   (オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

5. インストールを実行します

6. インストールサマリーとログを表示します

7. インストール後の設定を完了します

   「クイック設定」については、次を参照してください。

   - 83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   「あとで設定」については、次を参照してください。

   - 140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

- 133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
- 135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定」
- 143 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」

8. コンポーネントを起動します

   158 ページの「Application Server の起動と停止」(Access Manager、Portal Server、および Message Queue が自動的に起動する)

9. デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

   `http://`*hostname*`:`*port*`/amconsole`

Application Server のみをインストールする例

Application Server は、Message Queue のローカルコピーが必要です。負荷分散を使用する場合は、Web Server も必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Application Server を選択します

   Message Queue は自動的に選択されます。ロードバランスプラグインサブコンポーネントは、選択されません。

   (オプション) 負荷分散を実装する場合は、Application Server を展開し、ロードバランスプラグインサブコンポーネントを選択します。Web Server は自動的に選択されますが、Application Server と同じホストにインストールする必要があります。

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します

5. 適切な設定オプションを選択します

a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します
   - 135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定」
   - (オプション) 144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」
   - (オプション) 141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Message Queue の設定」(自動起動の場合)
9. Application Server を起動します (Message Queue が自動的に起動する)。

   158 ページの「Application Server の起動と停止」
   (オプション) 171 ページの「Web Server の起動と停止」

次の表には、Application Server の追加情報が含まれています。

表 4-2 Application Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定」
起動 / 停止	158 ページの「Application Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	196 ページの「Application Server のトラブルシューティングツール」

Communications Express と Messaging Server の例

Communications Express には、Access Manager または Access Manager SDK のどちらかのローカルコピーが必要です。Directory Server は Access Manager に必要ですが、Directory Server はローカルホスト上にある必要はありません。Communications Express にはローカルの Web コンテナが必要であり、Web コンテナには Application Server または Web Server のどちらかを使用できます。

メッセージングサービスを使用する場合は、Communications Express には、Messaging Server のローカルコピーが必要です。これには管理サーバーのローカルコピーが必要です。カレンダーサービスを使用する場合は、Communications Express には Calendar Server が必要です。ただし、Calendar Server はローカルホスト上に配置する必要はありません。

この例では、Messaging Server はローカルホストにインストールされます。Web コンテナとして Web Server が使用されます。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Communications Express、Access Manager、Messaging Server、および Web Server を選択します

   管理サーバーと Directory Server は自動的に選択されます。

   - Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

   - Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

5. 設定ページを確認します

6. インストールを実行します

7. インストールサマリーとログを表示します

8. インストール後の設定を完了します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」

      138 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Communications Express の設定」

      142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定」

9. コンポーネントを起動します

   171 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager は自動的に起動)
   170 ページの「Messaging Server の起動と停止」

10. 次の URL を使用して、デフォルトの Access Manager のログインページにアクセスします。

    `http://`*web-container-host*`:`*web-container-port*`/`*URI-path-CommsExpress*

Directory Server のみをインストールする例

Directory Server はほかの Java ES コンポーネントに依存しないので、Directory Server 単独のインストールは比較的単純です。

シーケンスの問題

- Directory Server に依存するその他のコンポーネントをインストールする前に Directory Server を実行する必要があります。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Directory Server とオプションで管理サーバーを選択します
3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します
5. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

b. 「あとで設定」の場合は、次を参照してください。

140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

(オプション) 135 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の管理サーバーの設定」

9. 次の順序で、コンポーネントを起動します。

a. 161 ページの「Directory Server の起動」

b. (オプション) 157 ページの「管理サーバーの起動と停止」

次の表には、Directory Server の追加情報が含まれています。

表 4-3 Directory Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」 140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」
起動 / 停止	161 ページの「Directory Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	198 ページの「Directory Server のトラブルシューティングツール」

Directory Proxy Server のみをインストールする例

Directory Proxy Server には Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Directory Proxy Server には、管理サーバーのローカルコピーが必要です。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Directory Proxy Server を選択します

Directory Server と管理サーバーは自動的に選択されます。

(オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注	その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します
5. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

      135 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の管理サーバーの設定」

      139 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Proxy Server の設定」

9. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
   a. 161 ページの「Directory Server の起動」
   b. 157 ページの「管理サーバーの起動と停止」
   c. 165 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」

次の表には、Directory Proxy Server の追加情報が含まれています。

表 4-4　Directory Proxy Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	139 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Proxy Server の設定」
起動 / 停止	165 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	198 ページの「Directory Server のトラブルシューティングツール」

Instant Messaging のみをインストールする例

Instant Messaging には Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Instant Messaging には、Web コンテナ (リモートでも可) も必要です。この例では、Web コンテナは Web Server です。

シングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシーを実装する場合は、Access Manager が必要です。Instant Messaging コアサブコンポーネントでは、Access Manager が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Instant Messaging リソースサブコンポーネントの場合、Access Manager SDK が Instant Messaging のローカルになければなりません。

シーケンスの問題

- その他のコンポーネントを配備する場合は、Instant Messaging を設定する前にそれらのコンポーネントを設定します。

  Instant Messaging で一般的に使用される Java ES コンポーネントには、Messaging Server、Calendar Server、および Portal Server (Access Manager で使用) があります。

- Instant Messaging で Access Manager を使用する場合、Access Manager SDK も使用する必要があります。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Instant Messaging、Directory Server、および Web Server を選択します

(オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します
5. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

      144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

      141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定」
      (オプション) リモートコンポーネントの場合 : Instant Messaging 設定時に、Directory Server、Access Manager、および Web Server のリモートの場所を指定します。

9. 次の順序で、コンポーネントを起動します。

a. 161 ページの「Directory Server の起動」

b. 171 ページの「Web Server の起動と停止」

c. 167 ページの「Instant Messaging の起動と停止」

次の表には、Instant Messaging の追加情報が含まれています。

表 4-5 Instant Messaging のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定」
起動 / 停止	167 ページの「Instant Messaging の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	199 ページの「Instant Messaging のトラブルシューティングツール」
実装シナリオ	『Sun Java System Communications Deployment Planning Guide』

Message Queue のみをインストールする例

Message Queue はほかの Java ES コンポーネントに依存しないので、Message Queue 単独のインストールは非常に単純です。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Message Queue を選択します

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します

注 Message Queue は、「クイック設定」オプションでも「あとで設定」オプションでも、自動的に設定されます。

5. インストールを実行します

6. インストールサマリーとログを表示します

7. Message Queue を起動します

   169 ページの「Message Queue の起動と停止」

次の表には、Message Queue の追加情報が含まれています。

表 4-6 Message Queue のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Message Queue の設定」
起動 / 停止	169 ページの「Message Queue の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	200 ページの「Message Queue のトラブルシューティングツール」

Portal Server のみをインストールする例

Portal Server には、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーが必要です。Access Manager はリモートに配置できますが、SDK はローカルに配置する必要があります。Access Manager には Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Portal Server には、ローカル Web コンテナが必要です (この例では Web Server)。Delegated Administrator は、Access Manager とともに自動的にインストールされます。

このインストールの例の一般的な手順には、次の手順が含まれます。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Portal Server と Web Server を選択します

   Access Manager と Directory Server は自動的に選択されます。

   - Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

- Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

5. インストールを実行します

6. インストールサマリーとログを表示します

7. インストール後の設定を完了します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

      133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」

      144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

      143 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」

8. コンポーネントを起動します

   161 ページの「Directory Server の起動」
   171 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager と Portal Server が自動的に起動する)

9. デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

   `http://webserver-host:port/amconsole`

次の表には、Portal Server の追加情報が含まれています。

表 4-7　Portal Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	143 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」
Portal Server の起動と停止	171 ページの「Portal Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	201 ページの「Portal Server のトラブルシューティングツール」

Portal Server Secure Remote Access のみをインストールする例

Portal Server Secure Remote Access には、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーが必要です。Portal Server Secure Remote Access には Portal Server も必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Directory Server が必要ですが、これもローカルコピーである必要はありません。Web Server は Access Manager の Web コンテナ要件を満たすために使用されます。

このインストールの例の一般的な手順には、次の手順が含まれます。

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Portal Server Secure Remote Access と Web Server を選択します。

   Portal Server、Access Manager、および Directory Server は自動的に選択されます。

   - Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」を参照してください。

- Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

注 その他任意のコンポーネントをインストールする前に、Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」を参照してください。

---

3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

4. 適切な設定オプションを選択します。

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」

5. インストールを実行します

6. インストールサマリーとログを表示します

7. インストール後の設定を完了します

   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」

133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」

144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

143 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の Portal Server SRA の設定」

8. コンポーネントを起動します

161 ページの「Directory Server の起動」
171 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager と Portal Server が自動的に起動する)

171 ページの「Portal Server の起動と停止」

9. デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

`http://`*webserver-host*`:`*port*`/amconsole`

次の表には、Portal Server Secure Remote Access の追加情報が含まれています。

表 4-8 Portal Server Secure Remote Access のインストール情報

実行するタスク	関連情報
起動 / 停止	171 ページの「Portal Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	202 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール」

Web Server のみをインストールする例

Web Server はほかのコンポーネントに依存しないので、Web Server 単独のインストールは比較的単純です。Application Server のロードバランサプラグインサブコンポーネントを使用する場合は、Web Server を Application Server と同じホストにインストールする必要があります。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES インストーラを実行します

83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Web Server を選択します
3. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。
4. インストールディレクトリを確認します
5. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」
   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」
6. インストールを実行します
7. インストールサマリーとログを表示します
8. インストール後の設定を完了します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

   144 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後に Web Server を設定する」
9. Web Server を起動します

   171 ページの「Web Server の起動と停止」

次の表には、Web Server の追加情報が含まれています。

表 4-9　Web Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」
Web Server の起動と停止	171 ページの「Web Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	202 ページの「Web Server のトラブルシューティングツール」

Calendar Server と Messaging Server の例

注	この例は、Schema 2 に基づいています。Schema 1 については、76 ページの「Schema 1 Calendar-Messaging の例」を参照してください。

シングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシーを実装する場合は、Access Manager が必要です。この場合は、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーのいずれかが必要です。Access Manager SDK には Access Manager が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。

Calendar Server と Messaging Server はどちらも Directory Server を必要としますが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Messaging Server には管理サーバーのローカルコピーが必要です。

この例では、Directory Server と Access Manager のローカルコピーが使用されます。Web Server は Access Manager の Web コンテナ要件を満たします。

シーケンスの問題

- Access Manager SDK をインストールする前に、リモートの Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」を参照してください。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

ホスト A 上で次のとおり実行します

Directory Server をインストールし、起動します

62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」

ホスト B 上で次のとおり実行します

Web コンテナと Access Manager をインストールし、起動します

53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」

ホスト C で次のとおり実行します

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Calendar Server、Messaging Server、および Access Manager SDK を選択します

   Directory Server と 管理サーバーは自動的に選択されます。

3. Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します
4. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。
5. インストールディレクトリを確認します
6. 適切な設定オプションを選択します
   a. 「クイック設定」については、次を参照してください。

      83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」
   b. 「あとで設定」については、次を参照してください。

      95 ページの第 6 章「「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集」
7. インストールを実行します
8. インストールサマリーとログを表示します
9. リモートコンポーネントの指定を含む、インストール後の設定を完了します

   136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定」

   142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定」
10. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
    a. 157 ページの「管理サーバーの起動と停止」
    b. 170 ページの「Messaging Server の起動と停止」
    c. 160 ページの「Calendar Server の起動と停止」

次の表には、Calendar Server の追加情報が含まれています。

表 4-10 Calendar Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定」
Calendar Server の起動と停止	160 ページの「Calendar Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	196 ページの「Calendar Server のトラブルシューティングツール」

次の表には、Messaging Server の追加情報が含まれています。

表 4-11　Messaging Server のインストール情報

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定」
Messaging Server の起動と停止	170 ページの「Messaging Server の起動と停止」
アンインストール	179 ページの第 10 章「ソフトウェアのアンインストール」
トラブルシューティング	200 ページの「Messaging Server のトラブルシューティングツール」

Schema 1 Calendar-Messaging の例

この例では、Schema 1 環境に通信コンポーネント、Calendar Server、および Messaging Server をインストールします。これらのコンポーネントには Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Messaging Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。

この例では、2 つのインストールセッションを使用します。最初のセッションでは Directory Server をホスト A にインストールし、次のセッションでは残りのコンポーネントをホスト B にインストールします。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

ホスト A 上で次のとおり実行します

Directory Server をインストールし、起動します

62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」

ホスト B 上で次のとおり実行します

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Calendar Server と Messaging Server を選択します。

   Directory Server と管理サーバーは自動的に選択されます。

3. Directory Server の選択を解除します

ローカルまたはリモートの Directory Server の選択が求められた場合は、リモート (すでにホスト A にインストールされ、稼働されている Directory Server) を選択します。

4. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

5. 「クイック設定」オプションを選択します
6. 管理サーバーの設定ページを確認します
7. インストールを実行します
8. インストールサマリーとログを表示します
9. インストール後の設定を完了します。

   136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定」

   142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定」

10. 次の順序で、コンポーネントを起動します。

    a. 157 ページの「管理サーバーの起動と停止」

    b. 170 ページの「Messaging Server の起動と停止」

    c. 160 ページの「Calendar Server の起動と停止」

11. シングルサインオンを設定するには、`commcli` などのコンポーネント専用のユーティリティを使用し、対応する製品の設定を変更 (config ファイル内の SSO パラメータを設定するなど) します。

アイデンティティ管理の例

Java ES は、すべてのコンポーネントが認証用に使用するシングルユーザーエントリだけを使用することにより、統合 ID を実装します。この例では、アイデンティティ管理を実装するために Directory Server および Access Manager をインストールするためのガイドラインを示します。

Access Manager には Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager にはローカルの Web コンテナも必要です。

ホスト A 上で次のとおり実行します

1. Directory Server をインストールし、起動します

   62 ページの「Directory Server のみをインストールする例」

ホスト B 上で次のとおり実行します

2. Access Manager および Web コンテナのインストールと起動

   53 ページの「Access Manager のみをインストールする例」

3. 初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを設定します

   『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』
   (http://docs.sun.com/doc/819-2228?l=ja)

初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを実装する方法の示す完全なシナリオについては、『Java Enterprise System Deployment Example Series: Small Scale Communications Scenario』(http://docs.sun.com/doc/819-0060) を参照してください。

通信サービスと共同作業サービスの例

この例では、通信サービスと共同作業サービスを実装するために、ほとんどの Java ES コンポーネントを使用します。大規模配備の場合、この例とほぼ同じ順序で、別個のサーバーに各コンポーネントを配備することが可能です。小規模配備の場合、コンポーネントは少数のサーバーの個別のインストールセッションでインストールします。

Directory Server は、すべての通信コンポーネントで必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Messaging Server には管理サーバーのローカルコピーが必要です。また、Access Manager または Access Manager SDK が必要ですが、Access Manager はリモートでもかまいません。この例では、Web Server が Web コンテナの役割を果たします。これは、Access Manager に必要です。Calendar Server と

Messaging Server ではローカルの Web コンテナは必要ありませんが、Communications Express では必要になります。Communications Express は Calendar Server のリモートコピーを使用できますが、Messaging Server はローカルでなければなりません。

ほかのコンポーネントがインストールされ稼働し始めると、フロントエンドサーバー (ホスト D) に Instant Messaging および Portal Server Secure Remote Access が追加されます。Instant Messaging には、Access Manager と、ローカルまたはリモートの Web コンテナが必要です。Portal Server Secure Remote Access には、Access Manager と、ローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server Secure Remote Access には Portal Server も必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。

この例では、次のインストールセッションを使用します。

- セッション 1、ホスト A: Access Manager と Directory Server をインストールします
- セッション 2、ホスト B: Portal Server と Web Server をインストールします (リモートの Directory Server とホスト A 上の Access Manager を使用)
- セッション 3、ホスト C: Messaging Server と Calendar Server をインストールします (リモートの Directory Server とホスト A 上の Access Manager を使用)
- セッション 4、ホスト D: Communications Express と Web Server をインストールします (リモートの Directory Server、ホスト A 上の Access Manager、およびホスト C 上のリモート Calendar Server を使用)
- セッション 5、ホスト D: Instant Messaging をインストールします (リモートの Directory Server とホスト A 上の Access Manager を使用)
- セッション 6、ホスト D: Portal Server Secure Remote Access をインストールします (リモートの Directory Server とホスト A 上の Access Manager を使用)

インストールを多数のセッションに分割することで、次のセッションに進む前に、各セッションのコンポーネントを検証することができます。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

ホスト A 上で次のとおり実行します

1. Access Manager と Directory Server をインストールし、起動します

   55 ページの「Access Manager と Directory Server の例」

ホスト B 上で次のとおり実行します

2. ホスト A にインストールしたリモートの Access Manager と Directory Server を指定して、Portal Server と Web Server をインストールし、起動します。

   Web コンテナと Access Manager SDK は、Portal Server のローカルになければなりません。

68 ページの「Portal Server のみをインストールする例」
81 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」

ホスト C で次のとおり実行します

3. ホスト A にインストールしたリモートの Access Manager と Directory Server を指定して、Messaging Server と Calendar Server をインストールし、起動します。

   Access Manager SDK は、Messaging Server と Calendar Server のローカルになければなりません。

   74 ページの「Calendar Server と Messaging Server の例」

ホスト D 上で次のとおり実行します

4. ホスト A にインストールしたリモートの Access Manager と Directory Server、およびホスト C にインストールしたリモートの Calendar Server を指定して、Communications Express、Messaging Server、および Web Server をインストールし、起動します。

   Access Manager SDK は、Messaging Server と Communications Express のローカルになければなりません。Web コンテナは、Communications Express のローカルになければなりません。

   60 ページの「Communications Express と Messaging Server の例」

ホスト D 上で次のとおり実行します

5. ホスト A にインストールしたリモートの Access Manager と Directory Server を指定して、Instant Messaging をインストールし、起動します。

   Access Manager SDK は、Instant Messaging のローカルになければなりません。

   65 ページの「Instant Messaging のみをインストールする例」

ホスト D 上で次のとおり実行します

6. ホスト A にインストールしたリモートの Access Manager と Directory Server を指定して、Portal Server Secure Remote Access をインストールし、起動します。

   Web コンテナと Access Manager SDK は、Portal Server Secure Remote Access のローカルになければなりません。

   70 ページの「Portal Server Secure Remote Access のみをインストールする例」

7. 初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを設定します

   『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』
   (`http://docs.sun.com/doc/819-2228?l=ja`)

初期ユーザーの確立やシングルサインオンの設定を含む、このタイプの配備を実行する完全なシナリオは、『Java Enterprise System Deployment Example Series: Small Scale Communications Scenario』(http://docs.sun.com/doc/819-0060) を参照してください。

リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例

Portal Server には、Access Manager が必要です。Access Manager には、Directory Server のローカルまたはリモートコピー、およびローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server は、Access Manager とは別のホストで実行することができます。この場合、Portal Server には Access Manager SDK のローカルコピーとローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server と Access Manager SDK をインストールする場合、Access Manager の不要なサブコンポーネントの選択を解除する必要があります。(Portal Server を選択すると、Access Manager のサブコンポーネントがすべて自動的に選択される)。

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

ホスト A 上で次のとおり実行します

Access Manager と Directory Server がインストールされ、稼働されていることを確認します

55 ページの「Access Manager と Directory Server の例」

ホスト B 上で次のとおり実行します

1. Java ES インストーラを実行します

   83 ページの第 5 章「インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール」

2. コンポーネントの選択で、Portal Server を選択します

   Access Manager のすべてのコンポーネントとともに、Directory Server と Directory Preparation Tool が自動的に選択されます。

   Web コンテナは選択されません。Web Container Selection ページが表示され、Web コンテナの選択が求められます。

3. Directory Server と Access Manager SDK を除く Access Manager のすべてのサブコンポーネントの選択を解除します

   依存性に関するメッセージに従って、次のとおり実行します。

a. Application Server、Web Server、または以前にインストールしたローカルの Web コンテナを選択します。

b. Access Manager のリモートインスタンスを選択します。

4. 非互換性の問題を解決します

   インストーラは、システム上のソフトウェアを検証し、非互換性が検知された場合はガイダンスを示します。

5. 「あとで設定」オプションを選択します

   131 ページの第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」を参照してください。

6. Access Manager SDK を実行する Web コンテナのホスト名を指定します (Portal Server と同じ)

7. Portal Server 内で実行する Web コンテナ (および設定パラメータ) を指定します

8. インストールを実行します

9. インストールサマリーとログを表示します

10. 必要なインストール後の設定を完了します。

    143 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」

第 5 章

インストールウィザードによる Sun Java Enterprise System のインストール

この章では、インストールウィザードとも呼ばれる、対話方式のグラフィカルインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System ソフトウェアをインストールする手順について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 83 ページの「前提条件」
- 84 ページの「インストールウィザードの実行」
- 93 ページの「インストールの取り消し」
- 93 ページの「次の手順」

前提条件

インストール前に、インストール計画を作成する必要があります。インストール計画が準備できていない場合は、31 ページの第 2 章「インストールシーケンスの作成」を参照してください。

インストーラを実行する前に、システムに非互換性がないかについて調査する必要もあります。詳細については、27 ページの「インストールされるコンポーネント」を参照してください。

インストールウィザードの実行

この項で説明する内容は、次のとおりです。

- 84 ページの「インストールを開始するには」
- 88 ページの「「クイック設定」インストールを開始する」
- 91 ページの「「あとで設定」インストールを開始する」

➤ インストールを開始するには

インストールの前提条件を満たしていることを確認します。インストール時に行う必要がある特定のタスクの一覧については、48 ページの「インストールの前提条件」を参照してください。デフォルトでは、英語版のウィザードが常にインストールされます。

1. `Sun Java Enterprise System` がマウントされた CD ドライブにアクセスします。
2. セットアップ起動プログラムをクリックして、ウィザードを起動します。

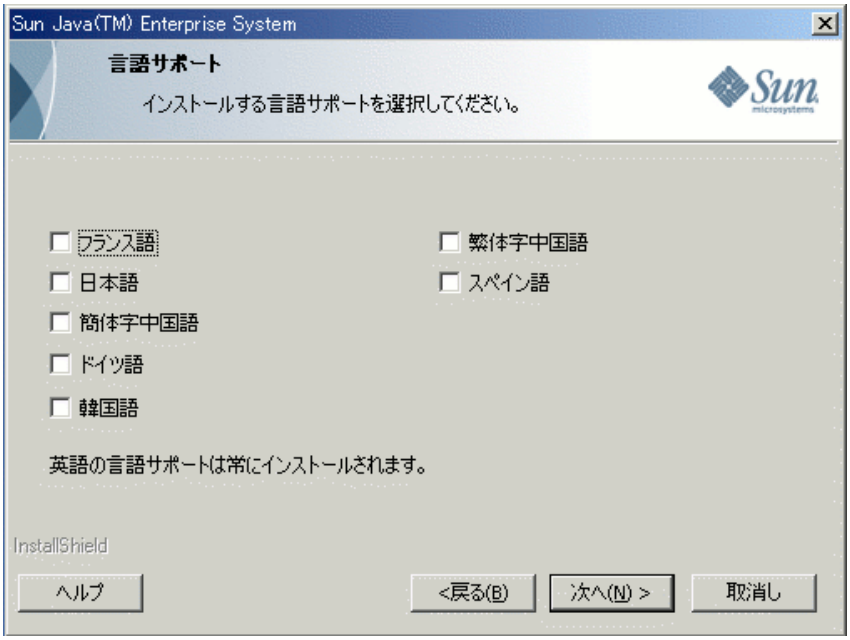
- **ダウンロードの場合 :** ファイルを展開し、ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリに移動し、セットアップ起動プログラム (setup.exe) をクリックします。
- **CD の場合 :** CD をマウントした CD ドライブに移動し、セットアップ起動プログラムをクリックします。

3. 「ようこそ」画面が表示されます。
4. 「次へ」をクリックして処理を継続します。

   「ソフトウェアライセンス契約」画面が表示されます。
5. 「ライセンス使用許諾契約を承諾します」を選択し、「次へ」をクリックして続行します。

   「言語サポート」画面が表示されます。

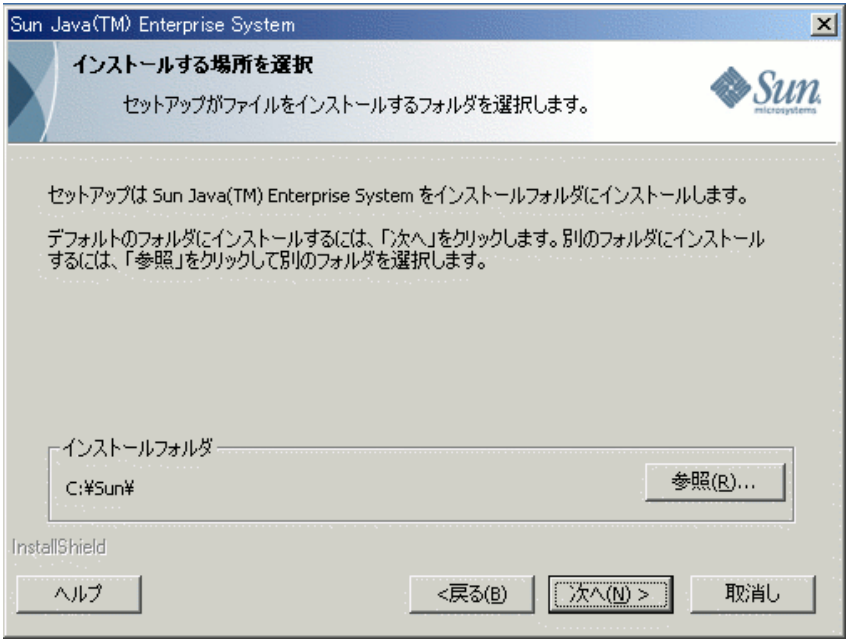
図 5-1　　インストールウィザードの「言語サポート」画面



6. 製品に必要なその他の言語サポートを選択します。

   「インストールする場所を選択」画面が表示されます。

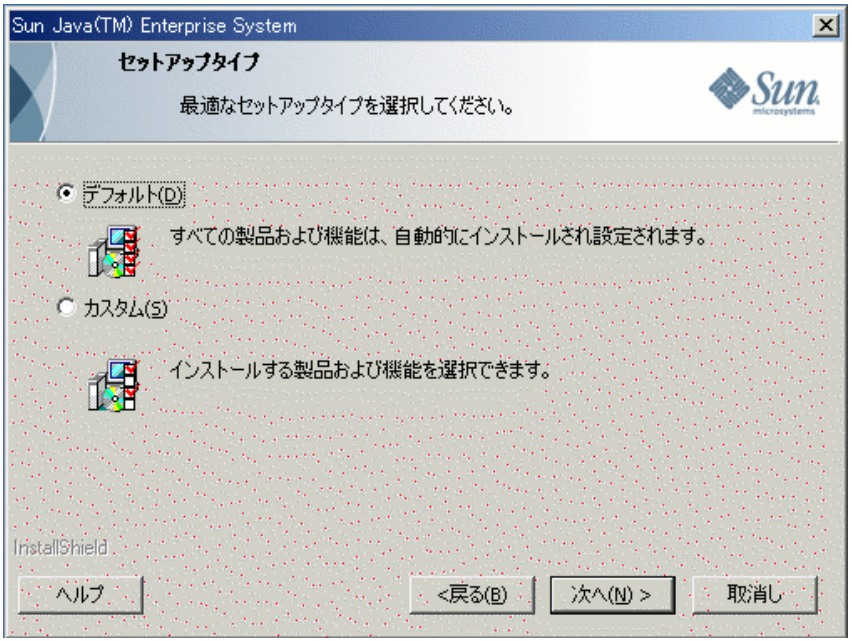
図 5-2　インストールウィザードの「インストールする場所を選択」画面



7. 製品をインストールするフォルダを参照します。デフォルトの場所のままにする場合は、何も変更しません。「次へ」をクリックします。

   「セットアップタイプ」画面が表示されます。

図 5-3　インストールウィザードの「セットアップタイプ」画面



8. 次の 2 つのインストールのタイプのうち、いずれかを選択します。
   - デフォルト

     一度にすべての製品と機能を自動的にインストールして設定する場合は、「デフォルト」タイプのインストールを選択します。
   - カスタム

     インストールする製品と機能、および設定の種類を選択する場合は、「カスタム」タイプのインストールを選択します。

➤ **「デフォルト」セットアップタイプでインストールするには、次の手順に従います。**

1. 「セットアップタイプ」画面から「デフォルト」セットアップを選択し、「次へ」をクリックします。

   デフォルトですべてのコンポーネントがインストールされ設定されてから、「管理者設定」画面が表示されます
2. 「「クイック設定」インストールを開始する」の手順 4 以降の手順に従います

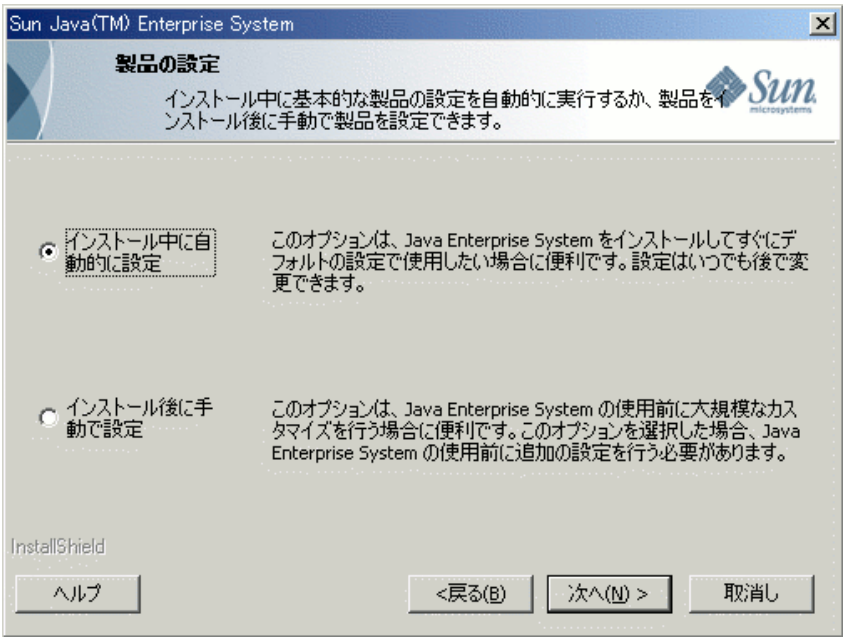
➤ **「カスタム」セットアップタイプでインストールするには、次の手順に従います。**

1. 「セットアップタイプ」画面から「カスタム」セットアップタイプを選択します。「次へ」をクリックします

「設定タイプ」画面が表示されます

2. 次の 2 つの設定タイプのうち、いずれかを選択します。
   - 88 ページの「「クイック設定」インストールを開始する」
   - 91 ページの「「あとで設定」インストールを開始する」

図 5-4　インストールウィザードの「製品の設定」画面



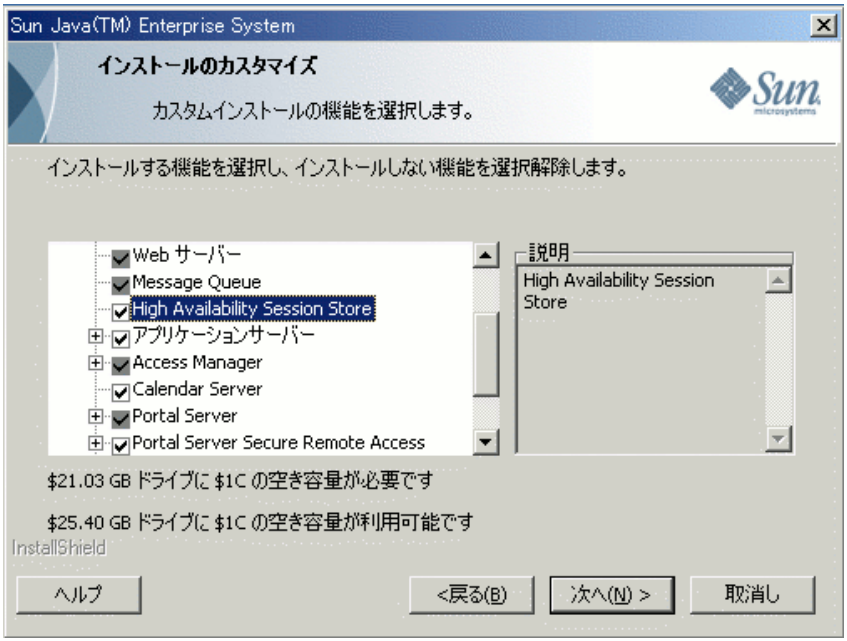
➤ 「クイック設定」インストールを開始する

「クイック設定」オプション (インストール中に自動的に設定) では、ユーザーが選択したコンポーネントがインストールされ、デフォルトの設定値に従って設定されます。Sun Java Enterprise システムを使用するのが初めてであり、必要を満たす最適な設定が決まっていない場合は、このオプションをお勧めします。

1. 「クイック設定」ラジオボタンを選択します。「次へ」をクリックします。

   「インストールのカスタマイズ」画面が表示されます。

図 5-5　インストールウィザードの「インストールのカスタマイズ」画面



2. チェックボックスを選択または選択解除して、自動的にインストールおよび設定するコンポーネントを選択します。コンポーネントは、すべてを選択することも、いくつかを選択することもできます。

   a. **すべてのコンポーネントを選択する**：デフォルトでは、「製品の選択」パネルですべての製品が選択されています。

   b. **いくつかのコンポーネントを選択する**：まず「Sun Java Enterprise System」の横にあるチェックボックスの選択を解除してから、インストールするコンポーネントの横にあるチェックボックスを選択します。コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存するほかのコンポーネントが自動的に選択されます。

      選択するごとにインストールするファイルが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。画面には、マシンで使用可能なディスク容量、および選択したコンポーネントに必要なディスク容量が表示されます。

3. Web アプリケーション (IM、UWC、AM、PS、DA) が選択され、Web コンテナが選択されていない場合、Web コンテナの選択画面が表示されます。

   いずれかの Web コンテナを選択します

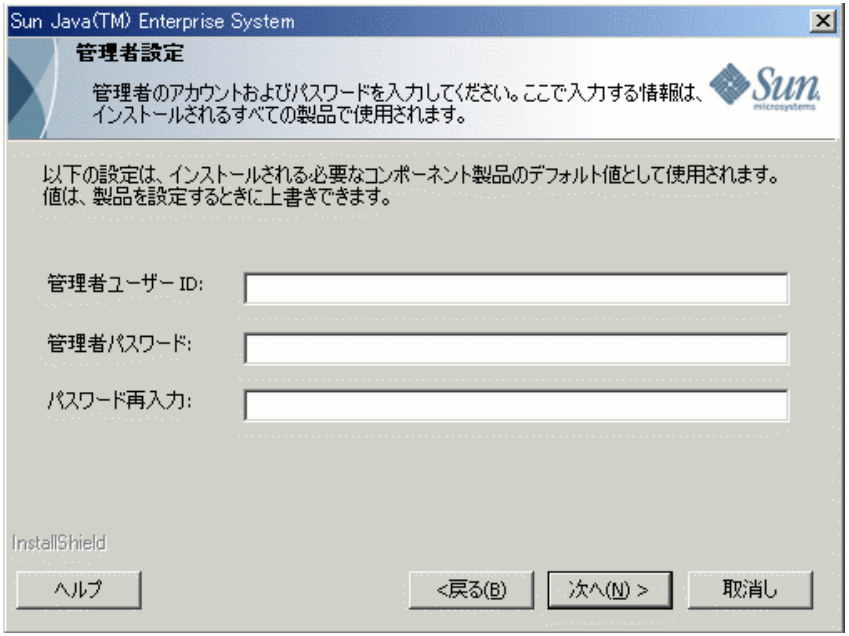
図 5-6　インストールウィザードの「Web コンテナの選択」画面

「了解」をクリックして、「製品の選択」パネルに戻ります。

4. 「次へ」をクリックして処理を継続します。

   「管理者設定」画面が表示されます。

図 5-7　インストールウィザードの「管理者設定」画面



5. 対応する各フィールドに管理ユーザー ID、管理ユーザーパスワードを入力し、パスワードを再入力します。「次へ」をクリックします。

注 この画面に入力された値はデフォルト値として設定されますが、これらのデフォルト設定はインストール後に変更できます。

「ファイルのコピーを開始」画面が表示されます。この画面でも、このインストールセッションでのコンポーネントの選択内容が確認されます。

6. 選択された製品の一覧に、インストールおよび設定するすべてのコンポーネントが表示されていれば、「次へ」をクリックします。コンポーネントの選択を変更するには、「戻る」をクリックして必要な変更を行います。
7. 「セットアップステータス」画面、またその後にインストールが進行中の画面が表示されます。続いて、設定が進行中の画面が表示されます。サーバーの設定によっては、しばらく時間がかかる場合があります。
8. コンポーネントのインストールと設定が完了すると、情報画面が表示されます。「次へ」をクリックして処理を継続します。
9. 「インストールが完了しました」画面が表示されます。「完了」をクリックして、セットアップを終了します。

➤ 「あとで設定」インストールを開始する

「あとで設定」オプション (インストール後に手動で設定) では、選択したコンポーネントのインストールのみが行われ、設定は行われません。ユーザーがあとでコンポーネントを設定する必要があります。正常にインストールが完了した後のコンポーネントの設定へ進むには、131 ページの「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」に関する章を参照してください。

1. 「あとで設定」ラジオボタンを選択します。「次へ」をクリックします。

   「インストールのカスタマイズ」画面が表示されます。

2. チェックボックスを選択または選択解除して、インストールするコンポーネントを選択する必要があります。コンポーネントは、すべてを選択することも、いくつかを選択することもできます。

   a. **すべてのコンポーネントを選択する**：「Sun Java Enterprise System」の横にあるチェックボックスを選択します。

b. **いくつかのコンポーネントを選択する** : インストールするコンポーネントの横にあるチェックボックスを選択します。コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存するほかのコンポーネントが自動的に選択されます。

注 リモートシステムにインストールされたコンポーネントを使用する予定の場合、インストーラが選択したコンポーネントを選択解除することもできます。

選択するごとにインストールするファイルが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。画面には、マシンで使用可能なディスク容量、および選択したコンポーネントに必要なディスク容量が表示されます。

3. 「次へ」をクリックして処理を継続します。

   「ファイルのコピーを開始」画面が表示されます。この画面で、インストールの選択内容が確認されます。

4. 「選択された製品」画面には、インストールするコンポーネントがすべて一覧表示されます。「次へ」をクリックします。コンポーネントの選択を変更するには、「戻る」をクリックして必要な変更を行います。

5. 「セットアップステータス」画面、またその後にインストールが進行中の画面が表示されます。サーバーの設定によっては、しばらく時間がかかる場合があります。

6. インストールが完了すると、情報画面が表示されます。「次へ」をクリックして処理を継続します。

注 Message Queue は、選択すると自動的に設定されます。個別に設定する必要はありません。

---

7. 「インストールが完了しました」画面が表示されます。「完了」をクリックして、セットアップを終了します。

インストールセッション後、インストールされた製品のリストが含まれるサマリーファイルを表示するには、インストールウィザードの「サマリーの表示」ボタンをクリックするか、またはこのファイルが格納されたインストールディレクトリの `[INSTALLDIR]` にアクセスします。

インストールの取り消し

画面で「キャンセル」が有効になっている場合は、「キャンセル」をクリックするとインストールを取り消すことができます。インストールを取り消すと、アンインストールプロセスが起動し、すでにインストールされている Java Enterprise System ソフトウェアが消去されます。

「クイック設定」オプションを選択した場合、インストールのためのファイルのコピーが完了し設定が進行中のときは、インストールを取り消さないでください。

次の手順

「クイック設定」オプションによるコンポーネントのインストールと設定が完了した場合、155 ページの第 9 章「コンポーネントの起動と停止」に進み、コンポーネントの起動と停止の方法を学んでください。

「あとで設定」オプションによるインストールが完了した場合は、131 ページの「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」に進み、コンポーネントの設定方法を参照してください。

第 6 章

「あとで設定」オプションに必要な設定情報の収集

この章では、「あとで設定」オプションでのインストール後にコンポーネントを設定するために必要な情報について説明します。「あとで設定」設定オプションによるインストール中に必要なのは、管理設定と、ポート設定がどのように機能するかを認識することのみです。この章では、コンポーネントの設定について詳しく説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 96 ページの「この章の利用方法」
- 96 ページの「Administration Server の設定」
- 97 ページの「Access Manager の設定情報」
- 105 ページの「Application Server の設定情報」
- 110 ページの「Delegated Administrator の設定情報」
- 111 ページの「High Availability Session Store の設定情報」
- 113 ページの「Web Server の設定情報」
- 115 ページの「Instant Messaging の設定情報」
- 117 ページの「Portal Server の設定情報」
- 121 ページの「Portal Server Secure Remote Access の設定情報」
- 127 ページの「Messaging Server の設定情報」
- 128 ページの「Communications Express の設定情報」
- 130 ページの「アンインストール」

この章の利用方法

「あとで設定」オプションを使用した後の設定には、選択したコンポーネントのプロパティファイルの入力が必要です。

注 Delegated Administrator および Portal SRA は、Sun Java Enterprise System インストーラで設定できません。

設定情報の表には 2 つの列があります。「プロパティファイルのパラメータ」と「説明」です。「プロパティファイルのパラメータ」列にはプロパティファイルに含まれるキーを示し、「説明」列にはキーの意味、およびデフォルト値がある場合はその値を示してあります。

情報の参照方法

「あとで設定」オプションで製品を設定するための情報を探している場合は、次の手順に従います。

1. そのコンポーネントについて説明している項目を特定します。
2. プロパティファイルの説明がある表を見つけ、要件に応じてプロパティファイルを完成します。

Administration Server の設定

「クイック設定」オプションを使用してコンポーネントをインストールする際、インストーラは管理者ユーザーと管理者パスワードにデフォルト値を使用します。次の表は、インストールされたコンポーネントのプロパティファイルにインストーラが取り込むデフォルト値を示しています。

表 6-1 Administration Server の設定

ラベル	説明	デフォルト値
管理者ユーザー	管理者のデフォルトのユーザー ID。	`admin`
管理者パスワード	管理者のデフォルトのパスワード。	`adminuser`

Access Manager の設定情報

Sun Java Enterprise System インストーラは、Access Manager の設定に必要な、依存関係のあるコンポーネントをインストールします。次のコンポーネントは、Access Manager より先に設定する必要があります。

- Web コンテナ (次のいずれか)
  - Web Server
  - Application Server
- Directory Server

注 Access Manager SDK は、アイデンティティ管理およびポリシーサービスコアの一部として自動的にインストールされます。

Access Manager: パラメータ情報

Access Manager 設定プログラムは、Access Manager を設定するために `AMConfigurator.properties` ファイルの次の情報を必要とします。

表 6-2 Access Manager のパラメータ情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
管理者パスワード `ADMIN_PASSWD`	`amadmin` ユーザーのパスワード。パスワードは 8 文字以上で指定する必要があります。 デフォルト値は、管理者パスワードの `adminuser` です。
LDAP パスワード `AMLDAPUSERPASSWD`	`amldapuser` ユーザーのパスワード。このパスワードを `amadmin` ユーザーのパスワードと同じにすることはできません。有効な任意のディレクトリサービスのパスワードを指定できます。 デフォルト値は、`ldapuser` です。

表 6-2　Access Manager のパラメータ情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
パスワードの暗号鍵 AM_ENC_PWD	Access Manager がユーザーパスワードの暗号化に使用する文字列。 Access Manager のどのサブコンポーネントでも、すべて同じ暗号化鍵を使用する必要があります。複数のシステムに Access Manager サブコンポーネントを分散する場合は、どのシステムでも同じ値を使用します。 デフォルトの鍵は abcdefghijklmnopqrstuvwxyz です
ロケール PLATFORM_LOCALE	デフォルトでは、このバージョンの言語設定はアメリカ英語です。 デフォルト値は、en_US です
ベースディレクトリ BASE_DIR	Access Manager のインストールディレクトリが存在するベースディレクトリ。 デフォルト値は、[INSTALLDIR] です
Sun Java Enterprise System Access Manager インストールディレクトリ INSTALL_DIR	Access Manager のインストール先のディレクトリ。 デフォルト値は、AccessManager です
Web コンテナホスト SERVER_HOST	Web コンテナが稼働するホスト。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
クッキードメイン COOKIE_DOMAIN	Access Manager 用のクッキードメイン。 デフォルト値は、.iplanet.com です
新しい Web コンテナインスタンスのフラグ NEW_INSTANCE	NEW_INSTANCE は、Access Manager をユーザーが作成した新しい Web コンテナインスタンスに配備する場合は、true に設定する必要があります。 デフォルト値は false です。
Web コンテナポート SERVER_PORT	Access Manager の Web コンテナポート。 デフォルト値は 80 です
Web コンテナプロトコル SERVER_PROTOCOL	Access Manager 用の Web コンテナプロトコル。 デフォルト値は http です
コンソールポート CONSOLE_PORT	Access Manager のコンソールポート。 デフォルト値は 80 です

表 6-2　Access Manager のパラメータ情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
コンソールホスト CONSOLE_HOST	Access Manager 用のコンソールホスト。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
コンソールプロトコル CONSOLE_PROTOCOL	Access Manager 用のコンソールプロトコル。 デフォルト値は http です
リモートコンソールのフラグ CONSOLE_REMOTE	コンソールが Access Manager 用のリモートコンソールであるかどうかを指定します。 デフォルト値は false です
console.war の配備先の URI CONSOLE_DEPLOY_URI	Access Manager Console の配備先の URI。 デフォルト値は ¥amconsole です
amcommon の配備先の URI COMMON_DEPLOY_URI	Access Manager Common の配備先の URI。 デフォルト値は 80 です
サーバー配備 URI SERVER_DEPLOY_URI	Access Manager Server の配備先の URI。 デフォルト値は ¥amserver です
一時ディレクトリのプレフィックス TEMP_DIR_PREFIX	一時ディレクトリを指定します。
デバッグディレクトリのプレフィックス DEBUG_DIR_PREFIX	デバッグディレクトリを指定します。
XML エンコーディング XML_ENCODING	XML エンコーディング規格が指定されます。 デフォルト値は ISO-8859-1 です
Web コンテナタイプ WEB_CONTAINER	Web コンテナの種類を指定します。 デフォルト値は WS6 です
パスワードの配備先の URI PASSWORD_DEPLOY_URI	パスワードの配備先の URI。 デフォルト値は ¥ampassword です
Access Manager の配備の種類 DEPLOY_LEVEL	Access Manager の配備の種類。 デフォルト値は 1 です

表 6-2 Access Manager のパラメータ情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
	Access Manager の配備の値を次に示します。 1 = フルインストール (Web コンテナ、ディレクトリサーバーを設定し、サービスをインストールする) 2 = コンソールのみのインストール (ASMSDK をインストールし、Web サーバーを設定する) 3 = SDK のみ (SDK のみをインストールする) 4 = コンテナ設定付きの SDK (SDK をインストールし、Web コンテナを設定する) 上のどの選択肢でもサンプルが設定されます。 5 = 連携のみ (Web サーバーのみを設定する) 6 = サーバーのみ (Web サーバー、ディレクトリサーバーを設定し、サービスをインストールする) 11 = フルアンインストール 12 = コンソールのみのアンインストール 13 = SDK のアンインストール 14 = コンテナの設定を解除して SDK のみをアンインストール 15 = 連携のみアンインストール 16 = サーバーのみアンインストール 21 = フル再インストール 26 = サーバーの再インストール 31 = SDK の再インストール 32 = コンソールの再インストール 33 = コンソールと SDK の再インストール 35 = Liberty の再インストール

Access Manager: Directory Server 情報

Access Manager には、自身を Directory Server に設定するために次の情報が必要です。次の表は、インストーラが Access Manager を Directory Server と関連付けるために必要な情報を示しています。

表 6-3　Access Manager のインストール時に必要となる Directory Server に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Directory Server 名 DS_HOST	Directory Server のホスト名 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
Directory Server ポート DS_PORT	Directory Server のポート番号。 デフォルト値は 389 です
Directory Server のルート DN DS_DIRMGRDN	Directory Server のルート DN。 デフォルト値は、cn=Directory Manager です
ルート DN のパスワード DS_DIRMGRPWD	ルート DN にアクセスするためのパスワード。 デフォルト値は admin123 です。
ルートサフィックス ROOT_SUFFIX	ルートサフィックス。 具体的には、次のいずれかです。 dc=red dc=iplanet dc=com
ルートサフィックスのデフォルトの組織 DEFAULT_ORGANIZATION	ROOT_SUFFIX に追加するデフォルトの組織。 このエントリには何も入力しません。このエントリを変更すると、Access Manager の設定に失敗します。
LDAP ディレクトリの変更 DIRECTORY_MODE	LDAP ディレクトリへの変更方法を指定します。 デフォルト値は 1 です
LDAP ユーザー定義 USER_NAMING_ATTR	ユーザーを定義するための LDAP 属性。 デフォルト値は uid です。
LDAP 組織の定義 ORG_NAMING_ATTR	組織を定義する LDAP 属性。 デフォルト値は o です。
LDAP 組織のオブジェクトクラス ORG_OBJECT_CLASS	LDAP 組織のオブジェクトクラス。 デフォルト値は、sunmanagedorganization です。

表 6-3　Access Manager のインストール時に必要となる Directory Server に関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
LDAP ユーザーのオブジェクトクラス USER_OBJECT_CLASS	LDAP ユーザーのオブジェクトクラス。 デフォルト値は、inetorgperson です。
DIT 準拠フラグ DIT_COMPLIANCE	LDAP 組織のオブジェクトクラス。 デフォルト値は true です。

Access Manager: Web コンテナ情報

Access Manager のサブコンポーネントであるアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアは、Web Server または Application Server で稼働します。インストーラが要求する情報は、前述の各 Web コンテナの種類により異なります。

- Web Server の場合は、102 ページの「Web コンテナ情報 : Access Manager と Web Server」を参照してください。
- Application Server の場合は、103 ページの「Web コンテナ情報 : Access Manager と Application Server」を参照してください。

Web コンテナ情報 : Access Manager と Web Server

次の表は、Access Manager のサブコンポーネントであるアイデンティティ管理およびポリシーサービスコアの Web コンテナとして Web Server を設定するための情報を示しています。

表 6-4　Access Manager と Web Server を連動させる場合の Web コンテナの設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
インストールディレクトリ WS61_HOME	Web Server のインストールディレクトリ。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥WebServer です
Web Server プロトコル WS61_PROTOCOL	Web Server が使用するプロトコル。 デフォルト値は http です。
ホスト名 WS61_HOST	Web Server ホストの完全修飾ドメイン名。 デフォルト値は、現在のホストの完全修飾ドメイン名です。
Web サーバーポート WS61_PORT	Web Server が HTTP 接続に対して待機するポート。 デフォルト値は 80 です。

表 6-4　Access Manager と Web Server を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
Web Server の管理ポート WS61_ADMINPORT	Web Server が管理サーバーのトリガを待機するポート。 デフォルト値は 8888 です。
Web Server の管理ユーザー WS61_ADMIN	Web Server の管理者ユーザー名。 デフォルト値は admin です。
Web サーバーインスタンスディレクトリ WS61_INSTANCE	Access Manager war の配備先の Web Server インスタンスの名前。 デフォルト値は、https-[HOSTNAME] です
セキュアサーバーインスタンスポート WS61_IS_SECURE	Web Server のインスタンスのポートがセキュリティ保護されたポートであるかどうかを指定します。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用されます。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用されます。 コンテナが SSL 対応であり、インストーラがユーザーの介入なしに SSL_PASSWORD を使用してサーバーを起動する場合は、値は true です。 デフォルト値は false です

Web コンテナ情報 : Access Manager と Application Server

Web コンテナには Application Server 8.*x* のみが含まれています。*x* はバージョン番号です。

次の表は、Application Server 8.*x* (*x* はバージョン番号) が Access Manager のサブコンポーネントであるアイデンティティ管理およびポリシーサービスコア用の Web コンテナとなる場合に設定プログラムが要求する情報を示しています。

表 6-5　Access Manager と Application Server 8.*x* を連動させる場合の Web コンテナの設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Application Server ホーム AS81_HOME	Application Server のインストール先ディレクトリへのパス。 Application Server をインストールする場合、この値のデフォルト値は Application Server のインストールディレクトリに指定した値となります。
Application Server のプロトコル AS81_PROTOCOL	Application Server が使用するプロトコル。

表 6-5　Access Manager と Application Server 8.*x* を連動させる場合の Web コンテナの設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
Application Server ホスト AS81_HOST	Application Server ホストの完全修飾ドメイン名。
Application Server ポート AS81_PORT	Application Server がインスタンスへの接続を待機するポート。
Application Server 管理ポート AS81_ADMINPORT	Application Server が管理サーバーのトリガを待機するポート。
Application Server の管理ユーザー AS81_ADMIN	Application Server 管理者のユーザー ID デフォルト値は、管理サーバー設定の「管理者ユーザー ID」の値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
Appliaction Server 管理者のパスワード AS81_ADMINPASSWD	Application Server 管理者のパスワード。 デフォルト値は、管理サーバー設定の「管理者ユーザーパスワード」の値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
セキュアサーバーインスタンスポート AS81_INSTANCE	「インスタンスポート」の値がセキュリティ保護されているポートを参照するかどうかを指定します。セキュリティ保護されたポートでは、HTTPS プロトコルが使用されます。セキュリティ保護されていないポートでは、HTTP が使用されます。 セキュリティ保護されたポートには `https`、セキュリティ保護されていないポートには `http` を指定します。デフォルト値は `http` です。
Application Server ドメイン AS81_DOMAIN	Application Server ドメインを指定します。
Application Server インスタンスディレクトリ AS81_INSTANCE_DIR	Application Server インスタンスディレクトリを指定します。
Application Server ドキュメントルート AS81_DOCS_DIR	Access Manager の設定または配備、あるいはその両方が行われる、Application Server インスタンスのドキュメントルート
AS81_IS_SECURE	Application Server インスタンスが SSL を使用するかどうかを指定します。
Application Server 管理インスタンス AS81_ADMIN_IS_SECURE	Application Server 管理インスタンスが SSL を使用するかどうかを指定します。デフォルトでは、これは true に設定されています。

Application Server の設定情報

Application Server の設定プログラムには、ASConfigurator.properties ファイルの次の情報が必要です。

表 6-6　Application Server の管理に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
管理ユーザー名 AS_ADMIN	Application Server 管理者のユーザー ID デフォルト値は admin です。これは、管理サーバー設定の「管理者ユーザー ID」の値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
管理パスワード AS_ADMINPASSWD	Application Server の管理者のパスワード。 デフォルト値は adminuser です。これは、管理サーバー設定の「管理者パスワード」の値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
管理ポート AS_ADMINPORT	Application Server の管理サーバーが接続を待機するポート。管理ツールにアクセスするために必要です。 デフォルト値は 4850 です。
JMS ポート ASJMSPort	Application Server が JMS 接続を待機するポート。 デフォルト値は 7679 です。
HTTP サーバーポート AS_HTTPPORT	Application Server が HTTP 接続を待機するポート。 デフォルト値は 8082 です。 デフォルトポートが使用中の場合、インストーラにより別の値が表示されます。
HTTPS ポート AS_HTTPSPORT	Application Server が HTTPS 接続を待機するポート。 デフォルト値は 8184 です。
管理プロトコル AS_ADMINPROTOCOL	管理プロトコルを指定します。 デフォルト値は https です
管理ホスト AS_ADMINHOST	管理ホストを指定します。 デフォルト値は localhost です
JMX ポート ASJMX_ADMINPort	Application Server が JMX 接続を待機するポート。 デフォルト値は 3353 です。

表 6-6 Application Server の管理に関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
ORB ポート AS_ORB_PORT	Application Server が ORB 接続を待機するポート。 デフォルト値は 3360 です
SSL ポート ASIIOP_SSLPort	Application Server が SSL 接続を待機するポート。 デフォルト値は 3350 です
相互承認ポート ASIIOP_MUTUALAUTHPort	Application Server が相互承認接続を待機するポート。 デフォルト値は 3347 です
ドメイン名 AS_DOMAIN_NAME	ドメイン名を指定します。 デフォルト値は domain1 です。
ノードエージェント AS_NODE_AGENT	ノードエージェントを指定します。 デフォルト値は、full computer name です。
インスタンスディレクトリ AS_NODEAGENT_DIR	インスタンスパスを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥nodeagents です。
PointBase ディレクトリ AS_POINTBASE	PointBase ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥pointbase です
PointBase サンプルディレクトリ AS_POINTBASE_SAMPLESDB	PointBase サンプルディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥pointbase¥¥database です
Web サービスライブラリディレクトリ AS_WEBSERVICES_LIB	Web サービスライブラリディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥lib です
Application Server 設定ディレクトリ AS_CONFIG	Application Server 設定ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥config です
Application Server インストールディレクトリ AS_INSTALL	Application Server インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer です

表 6-6　Application Server の管理に関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
JDK の場所 AS_JAVA	JDK の場所を指定します。 デフォルト値は、[JDKINSTALLDIR] です
Application Server の配備先 AS_DEPLOY_LOCATION	Application Server の配備先を指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥domains¥¥domain1¥¥autodeploy です
Application Server の設定モデル AS_CONFIG_MODEL	使用された Application Server 設定モデルを指定します。 デフォルト値は、TestASConfig です
JMS 管理者 ID AS_JMS_ADMIN	JMS 管理者 ID を指定します。 デフォルト値は、JMSAdmin です
JMS 管理者パスワード AS_JMS_PASSWORD	JMS 管理者パスワードを指定します。 デフォルト値は、JMSPassword です
Sun Accounts ディレクトリ AS_ACC_CONFIG	Sun Accounts ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥domains¥¥domain1¥¥config¥¥sun-acc.xml です
Java Help ディレクトリ AS_JHELP	Java Help ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥shared¥¥lib です
ドメインディレクトリのパス AS_DEF_DOMAINS_PATH	ドメインディレクトリのパスを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥AppServer¥¥domains です
JDMK パス AS_JDMK_HOME	JDMK パスを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥AppServer¥¥lib¥¥SUNWjdmk¥¥5.1 です
ネイティブランチャー AS_NATIVE_LAUNCHER	ネイティブランチャーを起動するかどうかを指定します。 デフォルト値は true です
ネイティブランチャーライブラリ AS_NATIVE_LAUNCHER_LIB_PREFIX	ネイティブランチャーライブラリのパスを指定します。 デフォルト値は、¥¥jre¥¥bin¥¥client です

表 6-6 Application Server の管理に関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
Web コンソールライブラリ AS_WEBCONSOLE_LIB	Web コンソールライブラリを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥AppServer¥¥lib です
HADB ディレクトリ AS_HADB	HADB ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥AppServer¥¥hadb¥¥4.4-0.8 です
Application Server インスタンスディレクトリ AS_INSTANCE_DIR	Application Server インスタンスディレクトリを指定します。 デフォルト値は、C:¥¥Sun¥¥JavaES¥¥AppServer です
Application Server インスタンス名 AS_INSTANCE_NAME	インスタンス名を指定します。 デフォルト値は instance1 です

Application Server: 共有コンポーネント情報

インストール時に、Application Server について次の共有コンポーネント情報を指定する必要があります。

表 6-7 Application Server のインストール時に必要となる共有コンポーネントに関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Ant ディレクトリ AS_ANT	Ant ディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥lib¥¥ant です
Ant ライブラリディレクトリ AS_ANT_LIB	Ant ライブラリディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥lib¥¥ant¥¥lib です。
Perl ディレクトリ AS_PERL	Perl ディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥lib¥¥perl です。
NSS ディレクトリ AS_NSS	NSS ディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥AppServer¥¥lib です。

表 6-7　Application Server のインストール時に必要となる共有コンポーネントに関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
NSS Bin AS_NSS_BIN	NSS bin へのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥shared¥¥bin です。
ICU ディレクトリ AS_ICU_LIB	ICU ディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥shared¥¥lib です。
JATO ディレクトリ AS_JATO_LIB	JATO ディレクトリへのパス。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥shared¥¥lib です

Application Server: Web Server 情報

Application Server の設定プログラムには、Web Server を設定するために次の情報が必要です。

表 6-8　Application Server のインストール時に必要となる Web Server に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Web Server インストールディレクトリ AS_WSINSTALLDIR	Web Server インストールディレクトリ。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥WebServer です。
Web Server インスタンスディレクトリ AS_WSINSTANCEDIR	Web Server インスタンスディレクトリ。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥¥WebServer¥¥https-[HOSTNAME] です
Web Server インスタンス名 AS_WSINSTANCENAME	デフォルト値は、https-[HOSTNAME] です。
Web Server のロードバランサ AS_LB_PLUGIN_TYPE	Web Server のロードバランサ。 デフォルト値は、Sun One Web Server です

Delegated Administrator の設定情報

Delegated Administrator は Access Manager の一部としてインストールされるので、「製品の選択」パネルには表示されません。Delegated Administrator には、`IscliCfgDefaults.properties` および `installer.properties` の次の情報が必要です。

Delegated Administrator: 管理情報

表 6-9　Delegated Administrator Server の管理に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
DA データパス `msg.DataPath`	設定データが存在するディレクトリです。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥`DelegatedAdmin` です。
Access Manager パス `msg.IsPath`	Access Manager のインストール先ディレクトリです デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥AccessManager です。
Web Server パス `msg.ESPath`	Web Server インスタンスディレクトリがあるディレクトリです。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥WebServer です。
SSL ポート `DefSSLPort.TextField`	SSL ポートです。 デフォルト値は 443 です。
Access Manager 管理ユーザー `IsAmadmin.User`	Access Manager 管理ユーザー名です。 デフォルト値は `amadmin` です。
Access Manager 管理パスワード `IsAmadmin.Password`	Access Manager 管理ユーザーパスワードです。 デフォルト値はユーザーが指定します。
ホスト名 `IS.HostName`	Access Manager のインストールと設定が行われるホストの名前。 デフォルト値はユーザーが指定します。
Delegated Administrator の管理ユーザー `TLAUserPassword.User`	Delegated Administrator の管理ユーザー名です。 デフォルト値は `amadmin` です。

表 6-9　Delegated Administrator Server の管理に関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
Delegated Administrator の管理パスワード TLAUserPassword.Password	Delegated Administrator の管理ユーザーパスワードです。 デフォルト値はユーザーが指定します。
ホスト名のポート番号 IS.HostNamePortNumber	Access Manager が配備された http ポート デフォルト値は 80 です
最低必要な dssetup のバージョン MIN_DSSETUP_VERSION	最低必要な dssetup のバージョン デフォルト値は 6.0 です
最低必要な dssetup の改訂版 MIN_DSSETUP_REVISION	最低必要な dssetup の改訂版 デフォルト値は 0.004 です
電子メールドメイン EmailDomain.TextField	DA を設定するドメイン デフォルト値はユーザーが指定します
Web コンテナ IS.webcontainer	Access Manager を配備する Web コンテナ デフォルト値は、ユーザーのセクション (APP_SERVER、WEB_SERVER) に基づきます
Web 配備パス WS.webDeployPath	インスタンスディレクトリ下の webdeploy.bat のパス デフォルト値は、Web Server インスタンスを設定する場所へのパスです。

High Availability Session Store の設定情報

Application Server 設定プログラムには、mgt.cfg ファイルと HADB.properties ファイルの次の High Availability Session Store (HADB) 情報が必要です。

High Availability Session Store: 管理情報

表 6-10　High Availability Session Store の管理に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
管理エージェントサーバーのポート ma.server.jmxmp.port	MA (管理エージェント) サーバーの通信に使用するポートです。 デフォルト値は 1862 です。
DBConfig パス ma.server.dbconfigpath	ノードの設定ファイルを格納する場所です。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥hadb¥4.4.1-2¥dbdef です。
リポジトリパス repository.dr.path	サーバーのリポジトリへのパスです。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥hadb¥4.4.1-2¥repository です。
ログレベルの入力 logfile.loglevel	有効なログレベルは次のとおりです。 ALL、SEVERE、WARNING、INFO、FINE[R|ST]、OFF。
ログファイル名 logfile.name	ファイルにログ記録するための < ファイルパス >¥name です。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥hadb¥4.4.1-2¥ma¥ma.log です。
DB デバイスパス ma.server.dbdevicepath	データベースデバイスのデフォルトのパスです。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥hadb¥4.4.1-2 です。
DB 履歴パス ma.server.dbhistorypath	データベース履歴ファイルのデフォルトのパスです。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ >¥hadb¥4.4.1-2 です。
HADB インストールディレクトリパス INSTALLDIR	HADB のインストール先ディレクトリの場所です。 デフォルト値は、< インストールディレクトリ > です。

Web Server の設定情報

Web Server 設定プログラムには、Web Server を設定するために `WsProp.properties` ファイルの次の情報が必要です。

- 管理情報
- デフォルトの Web Server インスタンス情報

Web Server: 管理情報

表 6-11　Web Server のインストール時に必要となる管理に関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
管理者ユーザー ID `Pro.AdminName`	Web Server 管理者のユーザー ID。 デフォルト値は `admin` です。 これは、管理サーバー設定の「管理者ユーザー ID」に指定した値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
管理者パスワード `Pro.AdminPassword`	Web Server 管理者のパスワード。 デフォルト値は `adminuser` です これは、管理サーバー設定の「管理者パスワード」に指定した値です。96 ページの表 6-1 を参照してください。
管理ポート `Pro.AdminPort`	Web Server の管理サーバーが接続を待機するポート。 デフォルト値は `8888` です。

Web Server: デフォルトの Web Server インスタンス情報

表 6-12　Web Server のインストール時に必要となるデフォルト Web Server インスタンスに関する設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
HTTP ポート `Pro.HttpPort`	Web Server が HTTP 接続に対して待機するポート。 デフォルト値は `80` です。

表 6-12　Web Server のインストール時に必要となるデフォルト Web Server インスタンスに関する設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
ドキュメントルートディレクトリ Pro.HttpDocRoot	Web Server がコンテンツドキュメントを格納する場所。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥WebServer¥docs です
LDAP 設定 Pro.UgLdapUse	これは Web サーバーで LDAP を使用できるように設定する必要がある場合に使用します。 デフォルト値は FALSE です。
JDK パス Pro.JDK_DIR	bin ディレクトリが存在する JDK ディレクトリのフルパス。JDK ディレクトリのパスには空白文字を含めないでください。 デフォルト値は、[JAVAINSTALLDIR] です
JDK ライブラリ Pro.JDK_LIBPATH	JDK ライブラリのフルパス。 デフォルト値は、[JAVAINSTALLDIR]¥lib です
管理ポート Pro.JDK_CLASSPATH	外部 jar のフルパス。パスはすべて「;」で区切る必要があります
Web Server インストールディレクトリ Gen.ServerRoot	サーバーのインストール場所。 **注 :** ディレクトリ名には空白文字を含めないでください。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥WebServer です。
Web Server コンポーネント Gen.Components	インストールする必要のあるコンポーネントの名前。この値は変更しないでください。 デフォルト値は WebCore です。

Instant Messaging の設定情報

Instant Messaging 設定プログラムには、Sun Java System Instant Messaging Server、Sun Java System Instant Messenger Resources、および Sun Java System Access Manager Instant Messaging サービスを設定するために、im.properties ファイルの次の情報が必要です。

表 6-13　Instant Messaging の設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
クライアントコンポーネントの設定 selectServer	サーバーコンポーネントを設定するには、この値を true に設定します。 デフォルト値は false です
サーバーコンポーネントの設定 selectClient	クライアントコンポーネントを設定するには、この値を true に設定します。 デフォルト値は false です
アイデンティティ統合の設定 selectIdentity	アイデンティティ統合コンポーネントを設定するには、この値を true に設定します。 デフォルト値は false です
サーバードメイン domainName	サーバーのドメイン名。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
ホストサーバー hostName	サーバーのホスト名。 **注** : Instant Messaging サーバーが存在するマシン以外のマシンにクライアントをインストールする場合は、この値は Instant Messaging サーバーをインストールするホスト名を指す必要があります。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
メールサーバーホスト mailHost	メールサーバーホスト名。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
LDAP ホスト ldapHost	LDAP サーバーホスト名。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
LDAP サーバーポート ldapPort	LDAP サーバーポート番号。 デフォルト値は 389 です
LDAP ユーザー ID bindDN	ディレクトリサーバーへのバインドに使用する LDAP ユーザー ID。 デフォルト値は、cn=Directory Manager です

表 6-13　Instant Messaging の設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
LDAP 検索 baseDN	この LDAP サーバーでの検索で、ベースとして使用する文字列。 デフォルト値は、dc=[HOSTNAME],dc=com です
LDAP パスワード passWD	ディレクトリサーバーへバインドするための LDAP パスワード。 デフォルト値は adminuser です
Web Server の HTTP ポート httpPort	Web サーバーの http ポート。 デフォルト値は 80 です
URI 名 uri	Instant Messaging リソースを配備する必要がある URI の名前。 デフォルト値は ¥im です
SSO の有効化 useSSO	SSO を有効にするには、これを true に設定します。 デフォルト値は true です
Access Manager ポリシーの使用 useAmPolicy	ポリシーを使用するには、これを true に設定します。 デフォルト値は false です
サービスの割り当て assignIMServiceToExistingUsers	既存ユーザーへサービスを割り当てるには、この値を true に設定します。 デフォルト値は true です
IM の配備 deployToApplicationServer	IM を Application Server に配備するには、この値を true に設定します
Application Server の HTTP ポート appServerHttpPort	im を配備する必要がある Application Server のポートの番号。

Portal Server の設定情報

Portal Server 設定プログラムには、Portal Server を設定するために PSConfig.properties ファイルの次の情報が必要です。

注 このリリースでは、Application Server は Portal Server の Web コンテナとしてサポートされていません。

表 6-14 PSConfig.properties パラメータ

パラメータ名	説明
Web Server または Application Server のインスタンス名 DEPLOY_INSTANCE	Web Server または Application Server のインスタンス名を指定します。
Directory Server のポート番号 DS_PORT	Directory Server のポート番号を指定します。 デフォルト値は 389 です
Application Server インスタンスディレクトリ DEPLOY_INSTANCE_DIR	Application Server インスタンスディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥ApplicationServer です。
Access Manager の URI の名前 IDSAME_AMSERVER	Access Manager の URI の名前を指定します。
ディレクトリマネージャ DN の名前 DS_DIRMGR_DN	ディレクトリマネージャ DN の名前を指定します。 デフォルト値は、cn=Directory Manager です。
Directory Server のホスト名 DS_HOST	Directory Server のホスト名を指定します デフォルト値は、[HOSTNAME] です。
Java インストールディレクトリ JDK_DIR	Java インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[JDKINSTALLDIR] です。
Web Server または Application Server の JDK ディレクトリ DEPLOY_JDK_DIR	Web Server または Application Server の JDK ディレクトリを指定します (システム JDK とは異なる jdk ホームがある場合)。 デフォルト値は、[JDKINSTALLDIR] です。
Java ホームディレクトリ JDK_PATH	Java ホームディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[JDKINSTALLDIR] です。

表 6-14　PSConfig.properties パラメータ (続き)

パラメータ名	説明
Portal Server ベースディレクトリ BASEDIR	Portal Server ベースディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥Portal Server です。
Java Enterprise System ベースディレクトリ JES_DIR	Java インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR] です。
Access Manager インストールディレクトリ IDSAME_BASEDIR	Java インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥Access Manager です。
PS およびサンプルポータルの配備 DEPLOY_NOW	配備された Portal Server とサンプルポータルを指定します。 値は (y/n) です。
Web Server または Application Server の管理プロトコル DEPLOY_ADMIN_PROTOCOL	Web Server または Application Server の管理プロトコルを指定します。
Application Server の管理ポート DEPLOY_ADMIN_PORT	Application Server の管理ポートを指定します。
Application Server 製品ディレクトリ DEPLOY_PRODUCT_DIR	Application Server 製品ディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥ApplicationServer です。
Web Server または Application Server のプロトコル SERVER_PROTOCOL	Web Server または Application Server のプロトコルを指定します。
Application Server 配備ノード DEPLOY_NODE	Application Server 配備ノードを指定します。
Application Server ディレクトリ DEPLOY_PROJECT_DIR	Application Server インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥ApplicationServer です。
仮想ホスト DEPLOY_VIRTUAL_HOST	デフォルトのホスト以外の仮想ホストに配備されている場合は、その仮想ホスト名を指定します。
Web Server の管理ホスト名 DEPLOY_ADMIN_HOST	Web Server の管理ホスト名を指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です。

表 6-14　PSConfig.properties パラメータ (続き)

パラメータ名	説明
Portal Server 配備 URI DEPLOY_URI	Portal Server 配備 URI を指定します。 デフォルト値は ¥Portal です。
Web Server または Application Server の管理ユーザー名 DEPLOY_ADMIN	Web Server または Application Server の管理ユーザー名を指定します。 デフォルト値は admin です。
Web Server または Application Server のポート SERVER_PORT	インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は 80 です。
LB を設定する場合は LB URI LOAD_BALANCER_URL	LB 設定プログラムの URI を指定します。
Application Server ドメイン名 DEPLOY_DOMAIN	Application Server ドメイン名を指定します。
Access Manager コンソール URI 名 IDSAME_AMCONSOLE	Access Manager コンソールの URI の名前を指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME]¥amconsole です。
Web Server docroot ディレクトリ DEPLOY_DOCROOT	Java インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME]¥docs です。
Portal Server のポート番号 PS_PORT	Portal Server のポート番号 を指定します。 デフォルト値は 80 です
Portal Server 配備ホスト名 SERVER_HOST	Portal Server 配備ホスト名を指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です。
WebSphere セルの名前 DEPLOY_CELL	Web Sphere セル名を指定します。
Web Server または Application Server のディレクトリ DEPLOY_DIR	Web Server または Application Server のディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥WebServer です。
Portal Server ホスト名 PS_HOST	Portal Server ホスト名を指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です。
Application Server または Web Server の配備の種類 DEPLOY_TYPE	Application Server または Web Server の配備の種類を指定します。

表 6-14　PSConfig.properties パラメータ (続き)

パラメータ名	説明
Portal Server プロトコル PS_PROTOCOL	Portal Server プロトコルを指定します。 デフォルト値は http です
Access Manager インストールディレクトリ IS_BASEDIR	Access Manager インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です。
Portal Server インストールディレクトリ PS_BASEDIR	Portal Server インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥PortalServer です。
デフォルト DN DEFAULT_ORG_DN	デフォルトの DN を指定します。 デフォルト値は、cn=Directory Manager です。
ルートサフィックス ROOT_SUFFIX_DN	ルートサフィックスを指定します。 具体的には、次のいずれかです。 dc=red dc=iplanet dc=com
ディレクトリマネージャパスワード DS_DIRMGR_PASSWORD	ディレクトリマネージャパスワードを指定します。 デフォルト値は adminuser です。
Access Manger の LDAP ユーザーパスワード IDSAME_LDAPUSER_PASSWORD	Access Manger の LDAP ユーザーパスワードを指定します。 デフォルト値は、ldapuser です。
Access Manager 管理者パスワード IDSAME_ADMIN_PASSWORD	Access Manager 管理者パスワードを指定します。 デフォルト値は adminuser です。
Web Server 管理パスワード DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	Web Server 管理パスワードを指定します。 デフォルト値は amdinuser です。

Portal Server Secure Remote Access の設定情報

Portal Server Secure Remote Access 設定プログラムには、Portal SRA を設定するために次の情報が必要です。

- SRAConfig.properties
- RWPConfig.properties ファイルと RWPConfig-default.properties ファイル
- GWConfig.properties ファイルと GWConfig-default.properties ファイル
- NLPConfig.properties ファイルと NLPConfig-default-properties ファイル

表 6-15 SRAConfig.properties ファイルの説明

パラメータ名	説明
ゲートウェイプロファイル名 SRA_GATEWAY_PROFILE	ゲートウェイプロファイル名を指定します。 デフォルト値は default です
今すぐ配備する必要があるかどうか DEPLOY_NOW	今すぐ配備する必要があるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
Web Proxy を使用するかどうか USE_WEBPROXY	Web Proxy を使用するかどうかを指定します。 値は (y/n) です
サーバードメイン SERVER_DOMAIN	サーバードメインを指定します
SRA ユーザーログインパスワード SRA_LOG_USER_PASSWORD	SRA ユーザーログインパスワードを指定します デフォルト値は adminuser です
ロードバランサ URI LOAD_BALANCER_URL	ロードバランサ URI を指定します。
ゲートウェイドメイン GW_DOMAIN	ゲートウェイドメインを指定します
AMConsole でのサービスの割り当て ASSIGN_SERVICE	AMConsole でサービスを割り当てるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
GW サーバーポート GW_PORT	GW サーバーポートを指定します。 デフォルト値は 443 です
ゲートウェイプロトコル GW_PROTOCOL	ゲートウェイプロトコルを指定します。 デフォルト値は https です

表 6-16 RWPConfig.properties ファイルと RWPConfig-default.properties ファイルの説明

パラメータ名	説明
インスタンスを作成する必要があるかどうか CREATE_IS_INSTANCE	インスタンスを作成する必要があるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
Access Manager サーバーの URI の名前 IDSAME_AMSERVER	Access Manager サーバーの URI の名前を指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です
組織 DN IDSAME_ORG_DN	組織 DN を指定します。
Rewriter プロキシ IP RWP_IP	Rewriter プロキシ IP を指定します。
Access Manager インストールディレクトリ IDSAME_BASEDIR	Access Manager インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です。
インストール後にプロキシを起動 START_REWRITERPROXY	インストール後にプロキシを起動する必要があるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
ポート番号 RWP_PORT	ポート番号を指定します。 デフォルト値は 10443 です
サーバープロトコル SERVER_PROTOCOL	サーバープロトコルを指定します デフォルト値は https です
証明書が自己署名付きであるかどうか SELF_SIGNED_CERT	証明書が自己署名付きであるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
ゲートウェイプロファイル名 RWP_GATEWAY_PROFILE	ゲートウェイプロファイル名を指定します。 値は default です
ホスト名 RWP_HOST	ホスト名を指定します。

表 6-16　RWPConfig.properties ファイルと RWPConfig-default.properties ファイルの説明 (続き)

パラメータ名	説明
Access Manager パスワードの暗号化鍵 IDSAME_PASSWORD_KEY	Access Manager パスワードの暗号化鍵を指定します。 デフォルト値は、abcdefghijklmnopqrstuvwxyz です
配備 URI DEPLOY_URI	配備 URI を指定します。 デフォルト値は ¥Portal です
ロードバランサ URI LOAD_BALANCER_URL	ロードバランサ URI を指定します。
サーバーのポート番号 SERVER_PORT	サーバーのポート番号を指定します。
プロキシプロトコル RWP_PROTOCOL	プロキシプロトコルを指定します。 デフォルト値は https です
Portal Server ベースディレクトリ RWP_BASEDIR	Portal Server ベースディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥PortalServer です
サーバーホスト SERVER_HOST	サーバーホストを指定します。
証明書情報 CERT_INFO	証明書情報を指定します。

表 6-17　GWConfig.properties ファイルと GWConfig-default.properties ファイルの説明

パラメータ名	説明
ゲートウェイプロファイル名 GW_GATEWAY_PROFILE	ゲートウェイプロファイル名を指定します。 デフォルト値は default です
ゲートウェイインストールディレクトリ GW_BASEDIR	ゲートウェイインストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥PortalServer です
インスタンスを作成する必要があるかどうか CREATE_IS_INSTANCE	インスタンスを作成する必要があるかどうかを指定します。 値は (y/n) です

表 6-17　GWConfig.properties ファイルと GWConfig-default.properties ファイルの説明 (続き)

パラメータ名	説明
Access Manager サーバーの URI の名前 IDSAME_AMSERVER	Access Manager サーバーの URI の名前を指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です
ゲートウェイを起動するかどうか START_GATEWAY	ゲートウェイを起動するかどうかを指定します。 値は (y/n) です
組織 DN IDSAME_ORG_DN	組織 DN を指定します。 例 : dc=red、dc=iplanet、dc=com
Access Manager インストールディレクトリ IDSAME_BASEDIR	Access Manager インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です。
サーバープロトコル SERVER_PROTOCOL	サーバープロトコルを指定します デフォルト値は http です
ゲートウェイホスト IP GW_IP	ゲートウェイホスト IP を指定します 値は (y/n) です
証明書が自己署名付きであるかどうか SELF_SIGNED_CERT	証明書が自己署名付きであるかどうかを指定します。 デフォルト値は (y/n) です
Access Manager パスワードの暗号化鍵 IDSAME_PASSWORD_KEY	Access Manager パスワードの暗号化鍵を指定します。 デフォルト値は、abcdefghijklmnopqrstuvwxyz です。
配備 URI DEPLOY_URI	配備 URI を指定します。 デフォルト値は ¥Portal です
ロードバランサ URI LOAD_BALANCER_URL	ロードバランサ URI を指定します。
サーバーのポート番号 SERVER_PORT	サーバーのポート番号を指定します。
サーバーホスト SERVER_HOST	サーバーホストを指定します。

表 6-17　GWConfig.properties ファイルと GWConfig-default.properties ファイルの説明 (続き)

パラメータ名	説明
GW サーバーポート GW_PORT	GW サーバーポートを指定します。 デフォルト値は 443 です
証明書情報 CERT_INFO	証明書情報を指定します。
ゲートウェイプロトコル GW_PROTOCOL	ゲートウェイプロトコルを指定します。 デフォルト値は https です
ゲートウェイホスト名 GW_HOST	ゲートウェイホスト名を指定します。
証明書データベースパスワード CERT_DB_PASSWORD	証明書データベースパスワードを指定します デフォルト値はユーザーが指定します。

表 6-18　NLPConfig.properties ファイルと NLPConfig-default-properties ファイルの説明

パラメータ名	説明
Netlet のポート番号 NLP_PORT	Netlet のポート番号を指定します。
インスタンスを作成する必要があるかどうか CREATE_IS_INSTANCE	インスタンスを作成する必要があるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
Access Manager サーバーの URI の名前 IDSAME_AMSERVER	Access Manager サーバーの URI の名前を指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です
組織 DN IDSAME_ORG_DN	組織 DN を指定します。
Netlet プロキシサービスを起動するかどうか START_NETLETPROXY	Netlet プロキシサービスを起動するかどうかを指定します。 値は (y/n) です。
Netlet プロキシホスト名 NLP_HOST	Netlet プロキシホスト名を指定します。

表 6-18 NLPConfig.properties ファイルと NLPConfig-default-properties ファイルの説明 (続き)

パラメータ名	説明
Access Manager インストールディレクトリ IDSAME_BASEDIR	Access Manager インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥AccessManager です。
サーバープロトコル SERVER_PROTOCOL	サーバープロトコルを指定します。 デフォルト値は http です
証明書が自己署名付きであるかどうか SELF_SIGNED_CERT	証明書が自己署名付きであるかどうかを指定します。 値は (y/n) です
Netlet インストールディレクトリ NLP_BASEDIR	Netlet インストールディレクトリを指定します。
Netlet ゲートウェイプロファイル NLP_GATEWAY_PROFILE	Netlet ゲートウェイプロファイルを指定します。
Access Manager パスワードの暗号化鍵 IDSAME_PASSWORD_KEY	Access Manager パスワードの暗号化鍵を指定します。 デフォルト値は、abcdefghijklmnopqrstuvwxyz です
配備 URI DEPLOY_URI	配備 URI を指定します。
ロードバランサ URI LOAD_BALANCER_URL	ロードバランサ URI を指定します。
サーバーのポート番号 SERVER_PORT	サーバーのポート番号を指定します。 デフォルト値は 80 です
サーバーホスト SERVER_HOST	サーバーホストを指定します。
証明書情報 CERT_INFO	証明書情報を指定します。
Netlet プロトコル NLP_PROTOCOL	Netlet プロトコルを指定します。
Netlet ホスト IP NLP_IP	Netlet ホスト IP を指定します。

Messaging Server の設定情報

Messaging Server 設定プログラムには、Messaging Server を設定するために、DevsetupDefaults.properties ファイルの次の情報が必要です。

表 6-19　Instant Messenger の設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Messaging Server ユーザー ID iMS.UserId	Messaging Server ユーザー ID を指定します。 デフォルト値は mailsrv です
Messaging Server グループ ID iMS.GroupId	Messaging Server グループ ID を指定します。 デフォルト値は mail です
Messaging Server データパス msg.DataPath	設定データが存在するディレクトリです。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥Server-Root¥data です
Messaging Server の Postmaster Postmaster.TextField	Messaging Server の Postmaster を指定します。 デフォルト値は、system.administrator@mycompany.com です
Messaging Server ドメイン EmailDomain.TextField	Messaging Server ドメイン を指定します。 デフォルト値は、mycompany.com です
管理サーバーのサーバールートの場所 ADMINSERVER_SERVERROOT	管理サーバーのサーバールートの場所を指定します。これを定義する場合、管理サーバーのサーバールートの検索には ADMINSERVER_SERVERROOT_CONF は使用されません。 デフォルト値は、[INSTALLROOT]¥server-root です
デフォルトのパスワード imsPassword.Password	Messaging Server のデフォルトのパスワード。 デフォルト値は password です
設定の種類 EVALCONFIG	設定の種類を指定します。 • TRUE に設定すると、設定の種類は「クイック設定」になります • FALSE に設定すると、設定の種類は「あとで設定」になります

Communications Express の設定情報

Communications Express の設定プログラムには、UwcCfgDefaults.properties ファイルの次の情報が必要です。

注 Communications Express 設定プログラムを GUI モードで実行する場合は、これらのプロパティファイル内の値は使用されません。

表 6-20 UwcCfgDefaults.properties ファイルの設定情報

プロパティファイルのパラメータ	説明
Directory Server URL: ポート番号 UGDIR_URL	Directory Server URL のポート番号を指定します デフォルト値は、[HOSTNAME]:389 です
Directory Server のバインド名 UGDIR_BINDDN	Directory Server のバインド名を指定します。 デフォルト値は admin です。
Directory Server のバインドパスワード UGDIR_BINDPW	Directory Server のバインドパスワード。 デフォルト値は adminuser です
Calendar Server 管理ユーザー ID ce.calAdminUserID	Calendar Server 管理ユーザー ID を指定します。 デフォルト値は calmaster です
Calendar Server 管理ユーザーパスワード ce.calAdminPassword	Calendar Server 管理ユーザーパスワードを指定します。 デフォルト値は admin123 です
Web Server インストールディレクトリ wsInstallDirectory	Web Server インストールディレクトリを指定します。 デフォルト値は、[INSTALLDIR]¥WebServer です
Web Server インスタンス ID wsInstanceId	Web Server インスタンス ID を指定します。
仮想サーバー ID wsVirtualServerId	仮想サーバー ID を指定します。
Web Server の http ポート番号 httpPortNumber	Web Server の http ポート番号を指定します。 デフォルト値は 80 です
Calendar Server ホスト名 ECalHostPortPanel.HostName	Calendar Server ホスト名を指定します。 デフォルト値は、[HOSTNAME] です
Calendar Server のポート番号 CECalHostPortPanel.PortNumber	Calendar Server ポート番号を指定します。

表 6-20　UwcCfgDefaults.properties ファイルの設定情報 (続き)

プロパティファイルのパラメータ	説明
メールサーバーポート番号 `CEWebMailPortPanel.PortNumber`	メールサーバーのポート番号を指定します。
AMLoginUrl	Access Manager のログイン URL を指定します
AMAdminDN	Access Manager に対する Directory Server バインド名を指定します。 デフォルト値は cn=Directory Manager です
AMAdminPassword	Access Manager に対する Directory Server バインドパスワードを指定します
AppServer.HostName	Application Server のホスト名を指定します
AppServer.DefaultAdministrator Password	Application Server の管理パスワードを指定します
AppServer.InstanceDirectory	Application Server の配備インスタンスディレクトリを指定します
AppServer.DomainDirectory	Application Server の配備ドメインディレクトリを指定します
AppServer.DocumentRoot	Application Server のドキュメントルートディレクトリを指定します
AppServer.InstanceName	Application Server の配備インスタンスを指定します
AppServer.virtualServerID	Application Server の仮想サーバー ID を指定します
AppServer.SecureInstance	Application Server インスタンスをセキュリティ保護するかどうかを指定します。 デフォルト値は False です
AppServer.moduleName	配備のモジュール名を指定します。 デフォルト値は Communications_Express です
AppServer.httpPortNumber	Application Server の http ポート番号を指定します
AppServer.httpsPortNumber	Application Server の https ポート番号を指定します

アンインストール

すべての製品の設定は、製品がアンインストールされる前に削除されます。設定を削除するために使用されるスクリプトは、アンインストールプログラムに組み込まれています。アンインストーラは、「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「プログラムの追加と削除」から呼び出すことができます。この呼び出し方は、ウィザード (GUI) およびサイレントモードの設定の場合に有効です。

第 7 章

「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定

「あとで設定」モードのインストールを完了した場合は、Sun Java Enterprise System 環境を運用する前に、すべてのコンポーネント (Message Queue を除く) に対して追加の設定作業を実行する必要があります。また、「クイック設定」オプションでインストールした場合も、たとえば Portal Server で Instant Messenger チャネルを設定する場合など、何らかの設定が必要になることがあります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 131 ページの「インストールされたコンポーネント」
- 145 ページの「次の手順」

注 この章で説明する手順を通読した後、コンポーネントに対して追加の設定を実行する必要がないと判断した場合は、第 9 章「コンポーネントの起動と停止」に進み、コンポーネントが動作することを確認します。

インストールされたコンポーネント

インストール中に「あとで設定」オプションを選択する場合、Sun Java Enterprise System インストーラによって、コンポーネントの実行ファイルと各種ファイルがそれぞれのディレクトリに配置されます。パラメータの設定は行われず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネントはそのままではまだ機能しません。

設定プログラムは設定中に、Directory Server と管理サーバーのサーバールート内に、Directry Server には `slapd-` (インスタンス名)、管理サーバーには `adm-serv` という名前のフォルダを作成します。

レジストリエントリが、次の場所に作成されます。

```
HKLM¥SOFTWARE¥Sun Microsystems¥Java ES¥<Productname>¥<Version>
```

および

```
HKLM¥SOFTWARE¥Sun Microsystems¥Java ES¥Installer
```

このパスは、ファイルがコピーされた後に環境変数に設定されます。

次以降の各節では、「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定に関する情報を示しています。

- 133 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
- 135 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の管理サーバーの設定」
- 135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定」
- 136 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の HADB の設定」
- 136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定」
- 138 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Communications Express の設定」
- 139 ページの「「あとで設定」オプションでのインストール後の Delegated Administrator の設定」
- 139 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Proxy Server の設定」
- 140 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定」
- 141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定」
- 141 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Message Queue の設定」
- 142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定」
- 143 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」
- 144 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定」

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定

Access Manager のインストールディレクトリは、<インストールディレクトリ>¥AccessManager です。Access Manager の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
amconfig.jar
initialconfig.jar
Configurator.properties
```

「あとで設定」オプションでのインストール後、これらのファイルがインストールされるので、Access Manager を設定できるようになります。

注 Web Server は、Access Manager のデフォルトのコンテナです。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Access Manager を設定する**

デフォルト値は、AMConfigurator.properties ファイルに書き込まれます。

Access Manager には、次のインストール可能なコンポーネントがあります。

1. アイデンティティ管理とポリシーサービスコア
2. Access Manager 管理コンソール
3. 連携管理の共有ドメインサービス
4. Access Manager SDK

注 Access Manager の設定プログラムを実行する前に、Web コンテナサービスを起動する必要があります。

Access Manager を設定するには、次の手順を実行します。

1. AccessManager¥Setup¥AMConfigurator.properties にある Access Manager のプロパティファイルに手動で値を入力します。
2. DEPLOY_LEVEL プロパティ値を次のいずれかに設定することにより、Access Manager を部分的に配備できます。

1 - フルインストール (Web コンテナ、Directory Server を設定し、サービスをインストールする)

2 - コンソールのみのインストール (AMSDK をインストールし、Web コンテナを設定する)

3 - SDK のみ (SDK のみをインストールする)

4 - コンテナ設定付きの SDK (SDK をインストールし、Web コンテナを設定する)

上のどの選択肢でもサンプルも設定されます。

5 - 連携のみ (Web コンテナのみを設定する)

6 - サーバーのみ (1 と同じ)

11 - フルアンインストール

12 - コンソールのみのアンインストール

13 - SDK のアンインストール

14 - コンテナの設定を解除して SDK のみをアンインストール

15 - 連携のみアンインストール

16 - サーバーのみアンインストール

21 - フル再インストール

26 - サーバーの再インストール

31 - SDK の再インストール

32 - コンソールの再インストール

33 - コンソールと SDK の再インストール

35 - Liberty の再インストール

注 `AMConfigurator.properties` ファイル内の `WS61_HOST` キーでは、大文字と小文字が区別されます。Web Server インスタンス名とまったく同じにする必要があります。

---

3. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥`AccessManager¥Setup` に変更します。
4. `AMConfig.bat` を実行して、Access Manager を設定します。
5. Access Manager コンソールを使用する前に、Web コンテナサービスを再起動します。
6. 設定を確認するには、156 ページの「Access Manager の起動と停止」に進みます。

注 Web コンテナ : インストールで Application Server と Web Server の両方を選択した場合は、Web Server が、使用されるデフォルトの Web コンテナになります。

「あとで設定」オプションでのインストール後の管理サーバーの設定

「あとで設定」オプションでのインストールが完了すると、コンポーネントがインストールされ、管理サーバーの設定を開始できるようになります。管理サーバーのインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥Server-Root です。管理サーバーの設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
configure-ad.class

ADConfig.bat
```

注 設定時は、最初に Directory Server を設定し、次に管理サーバーを設定する必要があります。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に管理サーバーを設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥Server-Root¥setup に変更します。
2. ADConfig.bat を実行して、設定を完了します。
3. 各パネルで、必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、157 ページの「管理サーバーの起動と停止」に進みます。

ヒント 設定解除時は、最初に管理サーバーを設定解除し、次に Directory Server を設定解除する必要があります。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Application Server の設定

Application Server のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥AppServer です。「あとで設定」オプションでのインストールが完了すると、コンポーネントがインストールされ、Application Server の設定を開始できるようになります。
Application Server の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
AppServConfig.jar

initialconfig.jar

ASConfigurator.properties
```

デフォルト値は、ASConfigurator.properties ファイルに書き込まれます。

注 フォルダ名に空白文字が含まれていると、Application Server のインストールと設定を行うことはできません。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Application Server を設定する**

Application Server には、別々に設定できる次のインストール可能なコンポーネントがあります。

1. ドメイン管理サーバー
2. ロードバランサプラグイン

Application Server を設定するには、次の手順を実行します。

1. `AppServer¥Setup¥ASConfigurator.properties` にある Application Server のプロパティファイルに手動で値を入力します。
2. コマンドパスを `<インストールディレクトリ>¥AppServer¥Setup` に変更します。
3. `DASConfigure.bat` を実行して、ドメイン管理サーバーを設定します。
4. `LBConfigure.bat` を実行して、ロードバランサプラグインを設定します。
5. 設定を確認するには、158 ページの「Application Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」オプションでのインストール後の HADB の設定

1. `<インストールディレクトリ>¥Hadb¥4.4.1-2¥lib` にある `mgt.cfg` と `hadb.properties` のすべてのプロパティに値が入力されているかどうかを確認します。
2. コマンドパスを `<インストールディレクトリ>¥Hadb¥4.4.1-2¥lib` に変更します。
3. `HADBConfig.bat` を実行して、HADB 管理エージェントを設定します。
4. 設定を確認するには、167 ページの「HADB 管理エージェントの起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Calendar Server の設定

Calendar Server をインストールする前に、Directory Preparation Script が正しく設定されていることを確認します。Calendar Server のインストールディレクトリは、`<インストールディレクトリ>¥Calendar Server` です。

Calendar Server を設定するには、Directory Server の詳細を指定する必要があります。設定中に comm_dssetup.pl perl スクリプトの実行を選択した場合は、次の詳細が必要になります。Calendar Server を設定する前に、Directory Server に対してこの Directory Preparation Script がまだ実行されていない場合は、実行する必要があります。

サーバールート : Directory Server のインストール場所

管理 ID: admin (デフォルト) または cn=Directory Manager

管理パスワード : adminuser (デフォルト)

リモート Directory Server のドメイン名とホスト名

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Calendar Server を設定する**

手順 1: Directory Preparation Script の実行

1. Directory Preparation Script (comm_dssetup.pl) を実行することによって、通信サービス (Calendar Server、Messaging Server、および Delegated Administrator Utility) 用に Directory Server を設定します。

注 別の通信コンポーネントの設定中に同じ Directory Server 上で Directory Preparation Script をすでに実行している場合は、この手順を省略してください。

---

a. Directory Server が稼働していることを確認します。必要に応じて、161 ページの「Directory Server の起動と停止」を参照してください。

b. Directory Server がインストールされているマシンで、次のように Directory Preparation Script を実行する必要があります。

```
perl comm_dssetup.pl
```

c. コマンドプロンプトで、パスを < インストールディレクトリ >¥DSSetup に変更します。

注 Detected DS version という応答を受け取った場合。このツールを Root として実行してから、システムで使用している perl をチェックする必要があります。スクリプトを再度実行する前に、Directory Server に付属している active perl または nsperl を PATH 変数に設定する必要があります。

---

d. dssetup.bat を実行して、設定を完了します。

手順 2: Calendar Server の設定

Calendar Server には、GUI ベースの設定プログラムがあります。この設定プログラムは、次の手順で起動できます。

2. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥Calendar Server¥bin¥config に変更します。
3. CSConfig.bat を実行して、設定を完了します。
4. パネルでの操作を続行します。
5. 設定を確認するには、160 ページの「Calendar Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Communications Express の設定

Communications Express のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥CommsExpress です。Communications Express の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
config-uwc.class
UwcCfgDefaults.properties
installer.properties
```

➤ 「あとで設定」オプションでのインストール後に Communications Express を設定する

1. < インストールディレクトリ >¥CommsExpress¥lib にある Communications Express プロパティファイルに、Directory Server と Web Server のエントリを手動で値を入力します。
2. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥CommsExpress¥lib に変更します。
3. CEConfig.bat を実行して、設定を完了します。

注 Communications Express の設定プログラムを実行する前に、Directory Preparation Script が正しく設定されていることを確認してください。

設定後の手順 :

Communications Express にログインする前に、設定後の手順をいくつか実行する必要があります。

a. Calendar Server を再起動します。

b. Web Server または Application Server (Web コンテナとして選択した方) を再起動します。

「あとで設定」オプションでのインストール後の Delegated Administrator の設定

Delegated Administrator のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥DelegatedAdmin です。

注 Delegated Administrator を設定する前に、Schema 2 で commdssetup を実行する必要があります。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Delegated Administrator を設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥DeligatedAdmin¥lib に変更します。
2. DAConfig.bat を実行して、設定を完了します。
3. 一連のパネルが表示され、Access Manager、Web Server、および Directory Server に関する情報の入力が求められます。詳細情報を入力し、設定を完了します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Web Server の起動と停止」に進みます。

注 Delegated Administrator の設定プログラムを実行する前に、Access Manger と Directory Server が正しく設定されていることを確認してください。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Proxy Server の設定

「あとで設定」オプションでのインストールが完了すると、コンポーネントがインストールされ、Directory Proxy Server の設定を実行できるようになります。Directory Proxy Server のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥Server-Root です。Directory Proxy Server の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
Sun_Java_TM_System_Directory_Proxy_Server_v5_2.class
```

➤ **「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Directory Proxy Server を設定するには**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥Server-Root¥setup に変更します。

2. 上に示した場所から、次のコマンドを入力します。

   DPSConfig.bat

   - <インストールディレクトリ> は、この製品がインストールされているディレクトリです。
   - 管理サーバーと同じ管理者名とパスワードを入力します。
   - 有効なポート番号を入力します。デフォルトのポート番号は 489 です。
   - <インストールディレクトリ> 値を書き換える場合は、スラッシュとバックスラッシュを上に示したものと同じにしてください。
   - インスタンス選択のパネルで、有効なインスタンス名を入力します。

3. 設定を確認するには、165 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server の設定

「あとで設定」オプションでのインストールが完了すると、コンポーネントがインストールされ、Directory Server の設定を実行できるようになります。これらの製品のインストールディレクトリは、<インストールディレクトリ>¥Server-Root です。Directory Server の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

configure-ds.class

DSConfig.bat

➤ 「あとで設定」オプションでのインストール後に Directory Server を設定する

1. コマンドパスを <インストールディレクトリ>¥Server-Root¥setup に変更します。
2. DSConfig.bat を実行して、設定を完了します。
3. 各パネルで、必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、161 ページの「Directory Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定

Instant Messaging のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥Instant Messaging です。Instant Messaging の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
IMConfig.bat

Config.class
```

「あとで設定」オプションを選択すると、これらのファイルがコピーされ、プロパティファイルにデフォルト値が設定されます。

注 Instant Messaging を設定する前に、Web Server インスタンスを起動する必要があります。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Instant Messaging を設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥Instant Messaging に変更します。
2. IMConfig.bat を実行して、Instant Messaging の設定プログラムを GUI モードで起動します。
3. 各パネルで、必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、167 ページの「Instant Messaging の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Message Queue の設定

Message Queue コンポーネントには、追加の設定は不要です。インストールの一部として、すでに設定が完了しています。このコンポーネントでは、「あとで設定」オプションはサポートされていません。作成されるサービスエントリは次のとおりです。Message Queue Broker (MQ_broker)。Message Queue のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥MessageQueue です。

注 Message Queue は「後で設定」インストールモードをサポートしませんが、「後で設定」モードで Message Queue をインストールすることは可能です。ただし、「後で設定」モードでは、Message Queue Broker サービスをサービスパネルから手動で開始する必要があります。

設定を確認するには、169 ページの「Message Queue の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Messaging Server の設定

Messaging Server のインストールディレクトリは、<インストールディレクトリ>¥Server-Root です。Messaging Server の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
Msconfig.bat
Configure.class
```

Messaging Server を設定するには、Directory Server の詳細を指定する必要があります。設定中に comm_dssetup.pl perl スクリプトの実行を選択した場合は、次の詳細が必要になります。Messaging Server を設定する前に、Directory Server に対してこの Directory Preparation Script がまだ実行されていない場合は、実行する必要があります。

サーバールート : Directory Server のインストール場所

管理 ID: admin (デフォルト) または cn=Directory Manager

管理パスワード : adminuser (デフォルト)

リモート Directory Server のドメイン名とホスト名

➤ 「あとで設定」オプションでのインストール後に Messaging Server を設定する

手順 1: Directory Preparation Script の実行

1. Directory Preparation Script (comm_dssetup.pl) を実行することによって、通信サービス (Calendar Server、Messaging Server、および Delegated Administrator Utility) 用に Directory Server を設定します。

注 別の通信コンポーネントの設定中に同じ Directory Server 上で Directory Preparation Script をすでに実行している場合は、この手順を省略してください。

---

   a. Directory Server が稼働していることを確認します。必要に応じて、161 ページの「Directory Server の起動と停止」を参照してください。

   b. Directory Server がインストールされているマシンで、次のように Directory Preparation Script を実行する必要があります。

      ```
      perl comm_dssetup.pl
      ```

   c. コマンドプロンプトで、パスを <インストールディレクトリ>¥DSSetup に変更します。

   d. dssetup.bat を実行して、設定を完了します。

手順 2: Messaging Server の設定

2. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥Server-Root¥sbin に変更します。
3. MSConfig.bat を実行して、設定を完了します。

   設定中にポート競合が報告された場合、次のように configutil コマンドを使用してポートを変更します。

   - 現在のディレクトリを < インストールディレクトリ >¥Server-Root¥lib に変更します。
   - コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。configutil -o <service.servicename.nsmsgport> -v <new port number>
     <new port number> は、新しいポート番号の値です。
4. 設定を確認するには、170 ページの「Messaging Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定

Portal Server の最後の設定手順は、Sun の Web コンテナに配備されるのか、それともサードパーティ製の Web コンテナに配備されるのかによって異なります。Portal Server コアの設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
psconfig.jar
```

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Portal Server を設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥PortalServer¥config に変更します。
2. PSConfig.bat を実行して、Portal Server の設定プログラムを起動します。
3. 必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Portal Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」オプションでのインストール後の Portal Server SRA の設定

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Portal Server SRA を設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥PortalServer¥config に変更します。
2. SRAConfig.bat を実行して、Portal Server SRA の設定プログラムを起動します。
3. 必要な情報を指定します。

4. 設定を確認するには、171 ページの「Portal Server の起動と停止」に進みます。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後にゲートウェイを設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥PortalServer¥config に変更します。
2. GWConfig.bat を実行して、ゲートウェイの設定プログラムを起動します。
3. 必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Portal Server の起動と停止」に進みます。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Netlet プロキシを設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥PortalServer¥config に変更します。
2. NLPConfig.bat を実行して、Netlet プロキシの設定プログラムを起動します。
3. 必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Portal Server の起動と停止」に進みます。

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Rewriter プロキシを設定する**

1. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥PortalServer¥config に変更します。
2. RWPConfig.bat を実行して、Rewriter プロキシの設定プログラムを起動します。
3. 必要な情報を指定します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Portal Server の起動と停止」に進みます。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Web Server の設定

「あとで設定」オプションでのインストールが完了すると、コンポーネントがインストールされ、Web Server を設定できるようになります。Web Server のインストールディレクトリは、< インストールディレクトリ >¥WebServer です。Web Server の設定に使用されるファイルは、次のとおりです。

```
config.jar

WSConfigurator.exe

WSprop.properties
```

➤ **「あとで設定」オプションでのインストール後に Web Server を設定する**

1. WebServer¥Setup¥WSprop.properties にある Web Server のプロパティファイルに手動で値を入力します。
2. コマンドパスを < インストールディレクトリ >¥WebServer¥Setup に変更します。

3. `WSConfig.bat` を実行して、設定を完了します。
4. 設定を確認するには、171 ページの「Web Server の起動と停止」に進みます。

注 フォルダ名に空白文字が含まれていると、Web Server のインストールと設定を行うことはできません。

次の手順

この章で説明した設定作業が完了したら、155 ページの第 9 章「コンポーネントの起動と停止」に記載されているコンポーネントに固有の手順に従って、インストール後の設定を確認します。

第 8 章

サイレントモードでのソフトウェアのインストール

サイレントインストールは、類似した設定を共有する複数のホストに Sun Java™ Enterprise System をインストールするために使用される、対話処理のないインストールモードです。この章では、サイレントモードを使用して Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールする方法について説明します。

Windows インストールウィザードを使用したインストールでは、インストール用の入力をダイアログボックスへの応答という形でユーザーから受け取ります。しかし、サイレントインストールでは、エンドユーザーに入力は求められません。代わりに、入力を Install Shield Silent 応答ファイル (.iss ファイル) から取得します。このファイルを、応答ファイルと呼びます。

応答ファイルには、Windows インストールウィザードを使用してレコードの入力を実行するときに、ユーザーがダイアログボックスへの応答として入力する情報が含まれます。サイレントインストール中は、`Setup.exe` が、必要な入力を実行時に応答ファイルから読み取ります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 148 ページの「サイレントインストールのイベント」
- 149 ページの「応答ファイルの作成」
- 151 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」
- 154 ページの「次の手順」

サイレントインストールのイベント

サイレントインストールを実行するには、最初にレコードの入力セッションを実行して、サイレントインストールプロセスで使用する「応答ファイル」を作成します。この対話型のインストールセッション中に、インストーラへの応答が応答ファイルに取得されます。ユーザーの応答は、応答ファイル内でそれぞれが 1 つのプロンプトまたはフィールドに対応する、パラメータ群の一覧として保持されます。入力として応答ファイルを使用すると、多数のホストでインストーラを実行できます。このプロセスにより、企業内の複数のホストに設定を伝達することができます。

次の表は、Sun Java Enterprise System サイレントインストールのイベントの一覧です。左の列には、上位レベルのタスクと、各タスクのサブタスクの一覧を示しています。右の列には各タスクを実行する手順の参照先を示しています。

表 8-1 サイレントインストールのイベント

実行するタスク	情報の参照先
1. サイレントインストールを準備する	
インストール計画を作成します。	第 2 章「インストールシーケンスの作成」
非互換性についてシステムを調査します。	27 ページの「インストールされるコンポーネント」
2. 応答ファイルの作成	
インストーラを実行して、応答ファイルを生成します。	149 ページの「インストーラを使用して応答ファイルを生成する」
編集する前に、応答ファイルのコピーを作成します。	
対象システムに合わせて応答ファイルの値を編集します。	150 ページの「応答ファイルの編集」
3. インストールを実行する	
応答ファイルを指定して、インストーラを実行します。	151 ページの「サイレントモードでインストーラを実行するには」

応答ファイルの作成

応答ファイルを作成するには、レコードを入力するために、最初にインストーラを実行します。インストーラが生成する応答ファイルを使用することで、リアルタイムでの依存性チェックとエラーレポートの機能を活用できます。

応答ファイルの形式は .ini ファイルに似ていますが、応答ファイルの拡張子は .iss です。応答ファイルは、データエントリが埋め込まれた複数のセクションで構成されている、プレーンテキストファイルです。デフォルトでは、応答ファイルには Setup.iss という名前が付けられ、Windows System フォルダ内に作成されます。

警告 インストールの経験が豊富な場合、応答ファイルを手作業で作成することに慣れているかもしれませんが、最初の応答ファイルを手作業で作成することは避けてください。この方法では、インストール時、設定時、またはサーバーの起動時に問題が発生する可能性があります。

インストーラを使用して応答ファイルを生成する

この手順では、サイレントインストールを実行する Windows 上でインストーラを実行して、応答ファイルを生成します。

1. コマンドプロンプトにログインし、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

   cd <インストールディレクトリ>

2. Setup.exe /r コマンドを入力して、システムの Windows フォルダ内に応答ファイルを生成します。

   Setup.exe /r コマンドでインストールを実行すると、Setup.iss という名前のファイルにデータが格納されます。デフォルトでは、.iss ファイルは Windows System フォルダ内に作成されますが、/f1 オプションを使用すると、別の応答ファイル名と場所を指定することもできます。

3. その場合は、/f1 を入力して応答ファイルの作成場所を指定し、ファイル名を入力します。.iss 拡張子を持つファイルの絶対パスを指定してください。

   たとえば、Setup.exe /r /f1"C:¥Temp¥Setup.iss" と入力します。

   相対パスを使用すると予期しない結果を招くため、絶対パスが必要です。

4. サイレントインストーラに実行させる処理に合わせて、インストールを続行します。

   実行時に、Sun Java Enterprise System Windows インストーラのレコードセットアップ用に入力したデータと選択したオプションに関する情報はすべて、<ファイル名>.iss またはデフォルトのファイル名 Setup.iss に記録されます。

5. 以上で、レコードのインストール中に選択したオプションで応答ファイルを使用する準備が整いました。記録したオプションを変更するために、この応答ファイルを手動で編集することもできます。

応答ファイルの編集

応答ファイルを生成した後でも、その応答ファイルを編集して、ローカルパラメータを変更することができます。変更できるパラメータには、管理者ユーザー ID、管理者パスワード、パスワード再入力などがあります。

応答ファイルを編集する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 値を編集する以外は、パラメータを変更しないでください。
  - 値が指定されていない場合でも、パラメータを削除しないでください。
  - パラメータを追加しないでください。
  - パラメータの順序を変更しないでください。
- 元のタイプと形式に注意し、新しい値を入力するときはそれに従ってください。
- 削除する値の代わりに、ほかの値を入力します。パラメータが必須の場合、そのパラメータが削除されているとインストールまたは設定に失敗する可能性があります。
- コンポーネントを追加するには、`SunJavaES-count=`（*total*）と `SunJavaES-`（*count number*）`=SunJavaES¥...` の両方を変更します。次に例を示します。

  元のデータ：

  ```
  SunJavaES-count=2
  SunJavaES-0=SunJavaES¥MessageQueue
  SunJavaES-1=SunJavaES¥DirectoryServer
  ```

  変更後のデータ：

  ```
  SunJavaES-count=3
  SunJavaES-0=SunJavaES¥MessageQueue
  SunJavaES-1=SunJavaES¥DirectoryServer
  SunJavaES-2=SunJavaES¥WebServer
  ```

- サブコンポーネントを追加するには、合計カウントとカウント数の両方を変更します。サブコンポーネントは、メインコンポーネントの後に追加されます。
  例：

  ```
  SunJavaES-3=SunJavaES¥AccessManager¥AMAdministrationConsole
  ```

- 応答ファイルには、SdWelcome ダイアログボックスに対応するセクションがあります。
  例 :

  ```
  [{311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C}-SdWelcome-0]

  Result=1
  ```

このセクションヘッダー [{311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C}-SdWelcome-0] は、このデータが ProductCode (および PRODUCT_GUID) 値が {311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C} である製品の SdWelcome ダイアログボックスに関係することを示しています。

ヘッダーの末尾にある -0 は、これが SdWelcome への最初の呼び出しであることを示しています。インストール中に 2 番目の SdWelcome ダイアログボックスが表示された場合、ヘッダーの末尾は -1 となります。

Result=1 は、SdWelcome 関数からの戻り値を示しています。戻り値 1 は、「次へ」ボタンをクリックしたことを示しています。

- SdSetupType ダイアログでは、CONFIG_TYPE パラメータの Quick Configure が「クイック設定」を、Configure Later が「あとで設定」を指定します。

サイレントモードでのインストーラの実行

応答ファイルを生成したマシンと同じオペレーティングシステムが動作しているマシン上で、インストーラを実行します。

応答ファイルの内容に基づいてサイレントモードでインストールを実行するには、/s 引数を付けて Setup.exe を実行します。デフォルトでは、Setup.exe は、Setup.exe と同じディレクトリ内で Setup.iss という名前の応答ファイルを探します。/f1 引数を使用すると、別の名前と場所の応答ファイルを指定できます。

サイレントインストールでは、エラーが発生してもダイアログは表示されません。Setup.log という名前のファイルに状態情報が記録されます。このファイルは、デフォルトでは、応答ファイルの使用先ディレクトリと同じディレクトリに作成されます。Setup.exe に /f2 引数を使用すると、ログファイルに別の名前と場所を指定できます。

➤ サイレントモードでインストーラを実行するには

1. コマンドプロンプトにログインし、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

   cd <インストールディレクトリ>

2. Setup.exe /s コマンドを入力して、サイレントモードでのインストール手順を開始します。

注 デフォルトでは、setup.iss ファイルは Windows System フォルダ内に作成されます。setup.exe /s でサイレントインストールを開始する前に、このファイルを Windows System フォルダから setup.exe が存在するフォルダにコピーする必要があります。そうしないと、セットアップで -3 のエラーが返されます。

サイレントモードでインストールを実行すると、デフォルトでは、setup.exe が格納されているディレクトリと同じディレクトリ内に Setup.log という名前のログファイルが作成されます。/f2 オプションを使用した場合は、応答ファイルと名前が同じで .log の拡張子を持つログファイルが作成されます。

3. ログファイルの別の場所とファイル名を指定するには、/f2 を入力します。ファイルには絶対パスを指定します。

たとえば、Setup.exe /s /f2"C:¥Setup.log" と入力します。

必ず、絶対パスを指定してください。相対パスを使用すると、予期しない結果を招きます。

インストールしようとしているコンポーネントの数とタイプによっては、時間がかかる場合があります。インストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

Setup.log ファイルの理解

Setup.log は、/s 引数を付けて Setup.exe を実行した場合に生成されるサイレントインストールログファイルのデフォルトの名前です。このファイルは、デフォルトでは、応答ファイル Setup.iss が格納されているディレクトリ内に作成されます。/f2 オプションを使用すると、Setup.log に別の名前と場所を指定できます。

Setup.log ファイルには、3 つのセクションが含まれています。最初のセクションは、Install Shield Silent と呼ばれます。このセクションは、これがログファイルであることを明確にするとともに、サイレントセットアップで使用されている Install Shield Silent のバージョン情報を示します。

2 番目のセクションは、Application と呼ばれます。このセクションは、インストールされたアプリケーションの名前とバージョン、および会社名を明示します。

3 番目のセクションは、Response Result と呼ばれます。このセクションには、サイレントセットアップが成功したかどうかを示す結果コードが含まれています。Response Result セクション内の ResultCode キー名には、整数値が割り当てられます。Install Shield によって、ResultCode キーには次のいずれかの戻り値が設定されます。

表 8-2　ログファイルの応答 ResultCode キー

ResultCode	ResultCode の説明
0	成功
-1	一般的なエラー
-2	モードが無効である
-3	Setup.iss ファイル内に必要なデータが見つからない
-4	使用可能なメモリーが不足している
-5	ファイルが存在しない
-6	応答ファイルに書き込めない
-7	ログファイルに書き込めない
-8	Install Shield Silent (.iss) 応答ファイルへのパスが無効である
-9	一覧の型 (文字列または数値) が無効である
-10	データ型が無効である
-11	セットアップ中に不明なエラーが発生した
-12	ダイアログボックスの順序が違う
-51	指定されたフォルダを作成できない
-52	指定されたファイルまたはフォルダにアクセスできない
-53	選択したオプションが無効である

サイレントインストールに成功すると、`Setup.log` ファイルは次のようになります。

```
[ResponseResult]
ResultCode=0
```

次の手順

サイレントインストールを完了したら、131 ページの「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」に進み、コンポーネントの設定に関する最後の手順を実行します。インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネントでは追加設定が必要です。

注 ほかのどの作業に進む場合でも、インストール後の設定に関する要件をよく確認しておいてください。

第 9 章

コンポーネントの起動と停止

この章では、インストールと設定がすんだ Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントを起動および停止する方法について説明します。ここで説明する手順を実行することで、コンポーネントが正常に動作するかどうかを確認できます。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 156 ページの「前提条件」
- 156 ページの「Access Manager の起動と停止」
- 157 ページの「管理サーバーの起動と停止」
- 158 ページの「Application Server の起動と停止」
- 160 ページの「Calendar Server の起動と停止」
- 161 ページの「Directory Server の起動と停止」
- 165 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
- 167 ページの「HADB 管理エージェントの起動と停止」
- 167 ページの「Instant Messaging の起動と停止」
- 169 ページの「Message Queue の起動と停止」
- 170 ページの「Messaging Server の起動と停止」
- 171 ページの「Portal Server の起動と停止」
- 171 ページの「Web Server の起動と停止」
- 177 ページの「次の手順」

前提条件

この章で説明する手順を実行する前に、131 ページの第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」に記載されているインストール後の設定作業をすべて完了しておく必要があります。

注 「クイック設定」オプションを使用した場合は、インストールルートの場所にある summary.txt ファイルを参照して、各製品に関連した情報を確認してください。

Java Enterprise System の起動シーケンス

ほかのサービスを起動するために、まず Directory Server と Web コンテナ (Web Server または Application Server) を起動する必要があります。Sun Java Enterprise System は、これらのサービスのインスタンスをインストール中に作成します。Portal Server と Access Manager は Web コンテナ内で動作するため、Web コンテナを起動した場合にのみアクセスできます。

Access Manager の起動と停止

Access Manager が正常に機能するかどうかは、Directory Server と Web コンテナに依存しています。Access Manager は、次の Web コンテナに配備できます。

- Web Server
- Application Server

デフォルトでは、Web コンテナはインストールの完了時に起動されます。Access Manager が機能するには、Directory Server も動作している必要があります。

Access Manager は、サービスパネルに起動と停止のエントリがありません。また、スクリプト、.exe、および .bat ファイルも存在しません。

管理サーバーの起動と停止

管理サーバーが機能するかどうかは Directory Server に依存しています。デフォルトでは、管理サーバーはインストールの完了時に起動されます。

また、管理サーバーの起動と停止は、インストールディレクトリの bin フォルダにある .bat ファイルにアクセスすることによっても可能です。さらに、「サービス」から起動する方法もあります。

➤ **管理サーバーを「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Administration Server」>「Start Server」を選択します。

➤ **管理サーバーを「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」一覧から「Sun Java System Administration Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **管理サーバーを start-admin.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥Server-Root に移動します。
2. start-admin.bat をクリックして、管理サーバープロセスを起動します。

注 管理サーバーを再起動するには、[INSTALLDIR]¥Server-Root¥restart-admin.bat をクリックします。

➤ **管理サーバーをコンソールから停止するには、次の手順に従います。**

1. 左側にある「System Server Console」のツリー表示区画で、[DOMAINNAME] > [HOSTNAME] >「Server Groups」をクリックして、各ノードを展開します。
2. 「管理サーバー」をクリックします。

   左の区画に、「管理サーバー」コンソールが表示されます。
3. 「開く」をクリックして、「タスク」タブを表示します。
4. 「タスク」タブの「サーバーの停止」をクリックすると、管理サーバーが停止されます。

➤ **管理サーバーを「サービス」から停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Sun Java System Administration Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

➤ **管理サーバーを stop-admin.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥Server-Root` に移動します。
2. `stop-admin.bat` をクリックして、管理サーバープロセスを停止します。

Application Server の起動と停止

Application Server が機能するかどうかは、Message Queue に依存しています。デフォルトでは、Application Server はインストールの完了時に起動されます。

また、Application Server の起動と停止は、インストールディレクトリの bin フォルダにある `.bat` ファイルにアクセスすることによっても可能です。ただし、「サービス」一覧からの起動と停止はできません。

➤ **Application Server ドメインを起動するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin` に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server ドメインを起動します。

   `asadmin start-domain --user <管理ユーザー ID> --password <管理パスワード> <ドメイン名>`

   たとえば、`domain1` を、管理ユーザー ID「`admin`」と管理パスワード「`admin123`」を使用して起動するには、次のコマンドを実行します。

   ```
   asadmin start-domain --user admin --password admin123 domain1
   ```

➤ **Application Server ドメインを停止するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin` に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server ドメインを停止します。

```
asadmin stop-domain < ドメイン名 >
```

たとえば、domain1 を停止するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin stop-domain domain1
```

➤ **Application Server インスタンスを起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server インスタンスを停止します。

```
asadmin start-instance --port < 管理ポート > --user < 管理ユーザー ID> --password
< 管理パスワード > < インスタンス名 >
```

たとえば、管理ポート 4850 上の instance1 を、管理ユーザー ID「admin」と管理パスワード「admin123」を使用して起動するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin start-instance --port 4850 --user admin --password admin123
instance1
```

➤ **Application Server インスタンスを停止するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server インスタンスを停止します。

```
asadmin stop-instance --port < 管理ポート > --user < 管理ユーザー ID> --password
< 管理パスワード > < インスタンス名 >
```

たとえば、管理ポート 4850 上の instance1 を、管理ユーザー ID「admin」と管理パスワード「admin123」を使用して停止するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin stop-instance --port 4850 --user admin --password admin123 instance1
```

➤ **Application Server エージェントを起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server エージェントを起動します。

```
asadmin start-node-agent --port < 管理ポート > --user < 管理ユーザー ID>
--password < 管理パスワード > < ノードエージェント名 >
```

たとえば、管理ポート 4850 上の [HOSTNAME] を、管理ユーザー ID「admin」と管理パスワード「admin123」を使用して起動するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin start-node-agent --port 4850 --user admin --password admin123
[HOSTNAME]
```

➤ **Application Server エージェントを停止するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥ApplicationServer¥bin に移動します。
2. 次のコマンドを実行して、Application Server エージェントを停止します。

```
asadmin stop-node-agent < ノードエージェント名 >
```

たとえば、[HOSTNAME] を停止するには、次のコマンドを実行します。

```
asadmin stop-node-agent [HOSTNAME]
```

Calendar Server の起動と停止

Calendar Server が機能するかどうかは Directory Server に依存しています。デフォルトでは、Calendar Server はインストールの完了時に起動されます。

Calender Server には、次のサービスがあります。これらのサービスは、「コントロール パネル」の「サービス」のエントリから起動および停止することができます。

- Sun Java™ System Calendar Server ENS Service 6.0
- Sun Java™ System Calendar Server Notification Service 6.0
- Sun Java™ System Calendar Server Admin Service 6.0
- Sun Java™ System Calendar Server HTTP Service 6.0
- Sun Java™ System Calendar Server DWP Service 6.0

➤ **Calendar Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Calendar Server」>「Start Server」を選択します。

➤ **Calendar Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から、起動する Calendar Server サービスを選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **Calendar Server を start-cal.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥Calendar Server¥bin に移動します。
2. start-cal.bat をクリックして、Calendar Server プロセスを起動します。

➤ **Calendar Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から、停止する Calendar Server サービスを選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

Directory Server の起動と停止

デフォルトでは、Directory Server はインストールの完了時に起動されます。

また、Directory Server の起動と停止は、インストールディレクトリの bin フォルダにある `.bat` ファイルにアクセスすることによっても可能です。さらに、「サービス」一覧から起動する方法もあります。

Directory Server の起動

➤ **Directory Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

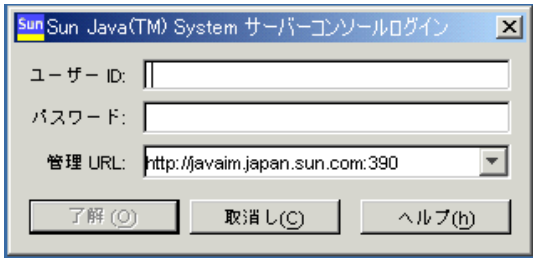
1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Directory Server」>「サーバーの起動」を選択します。

➤ **「管理サーバー」コンソールから Directory Server を起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Administration Server」>「Administration Server Console 5.2」を選択します。

   System Server へのログイン画面が表示されます。

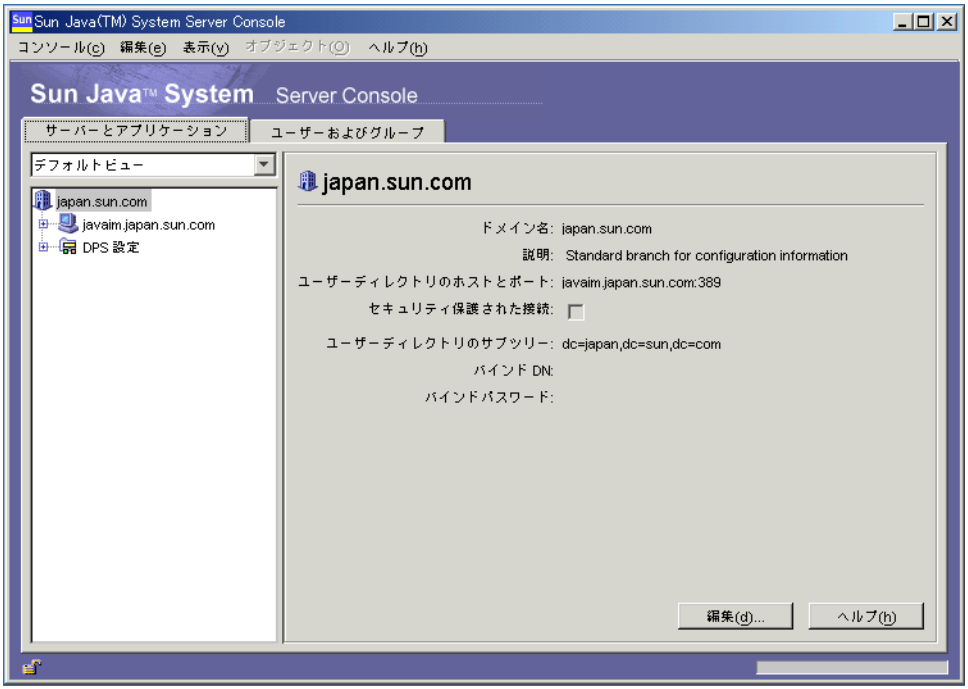
図 9-1　System Server へのログイン画面



2. ユーザー ID とパスワードを入力します。管理 URL を選択して「OK」をクリックします。

   「システムサーバー」コンソールが表示されます。

図 9-2　「システムサーバー」コンソール画面

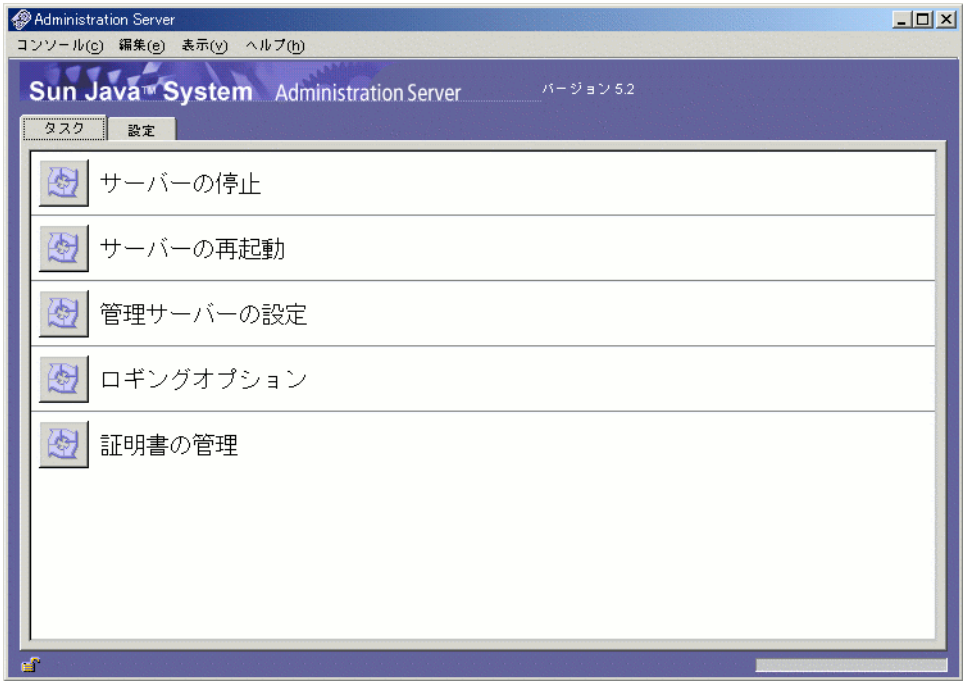


3. 左側にある「System Server Console」のツリー表示区画で、[DOMAINNAME] > [HOSTNAME] >「Server Groups」をクリックして、各ノードを展開します。

4. 「Directory Server」をクリックします。

   左の区画に、「Directory Server」コンソールが表示されます。

図 9-3　「管理サーバー」コンソールの「タスク」タブ画面



5. 「開く」をクリックして、「タスク」タブを表示します。サーバーは正常に動作しています。
6. サーバーが停止している場合は、「Directory Server の起動」ボタンをクリックすることにより起動できます。状態ログが表示されます。

➤ **Directory Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Directory Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **Directory Server を start-slapd.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥Server-Root¥< インスタンスフォルダ > に移動します。

2. `start-slapd.bat` をクリックして、Directory Server プロセスを起動します。

注 Directory Server を再起動するには、`[INSTALLDIR]¥Server-Root¥<` インスタンスフォルダ `>¥restart-slapd.bat` をクリックします。

Directory Server の停止

➤ **Directory Server をコンソールから停止するには、次の手順に従います。**

1. 左側にある「System Server Console」のツリー表示区画で、[DOMAINNAME] > [HOSTNAME] >「Server Groups」をクリックして、各ノードを展開します。
2. 「Directory Server」をクリックします。

   「タスク」タブが表示された「ディレクトリサーバー」コンソールが表示されます。
3. 「開く」をクリックして、「タスク」タブを表示します。
4. 「タスク」タブの「Directory Server の停止」をクリックすると、サーバーが停止されます。状態ログが表示されます。

➤ **Directory Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Directory Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

➤ **Directory Server を stop-slapd.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥Server-Root¥<` インスタンスフォルダ `>` に移動します。
2. `stop-slapd.bat` をクリックして、Directory Server プロセスを停止します。

Directory Proxy Server の起動と停止

Directory Proxy Server が機能するかどうかは、管理サーバーに依存しています。デフォルトでは、Directory Proxy Server はインストールの完了時に起動されます。

Directory Proxy Server の起動と停止は、「管理サーバー」コンソールからも可能です。さらに、「サービス」一覧から起動する方法もあります。

➤ **Directory Proxy Server を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Directory Proxy Server」>「Start Server」を選択します。

➤ **Directory Proxy Server を「管理サーバー」コンソールから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「管理サーバー」>「Administration Server Console 5.2」を選択します。

   System Server へのログイン画面が表示されます。

2. ユーザー ID とパスワードを入力します。管理 URL を選択して「OK」をクリックします。

   「システムサーバー」コンソールが表示されます。

3. 左側にある「System Server Console」のツリー表示区画で、[DOMAINNAME] > [HOSTNAME] >「Server Groups」をクリックして、各ノードを展開します。

4. 「Directory Proxy Server」をクリックします。

   左の区画に、「Directory Proxy Server」コンソールが表示されます。

5. 「開く」をクリックして、「タスク」タブを表示します。何も問題がなければ、サーバーは正常に動作しています。

6. サーバーが停止している場合は、「Directory Proxy Server の起動」ボタンをクリックすることにより起動できます。

➤ **Directory Proxy Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。

2. 「管理ツール」を選択します。

3. 「サービス」を選択します。

4. 「サービス」一覧から「Directory Proxy Server」を選択し、次のいずれかを実行します。

   - 右クリックして「開始」を選択します。

- 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
- 「操作」メニューの「開始」を選択します。

注 Directory Proxy Server の状態をチェックするには、[INSTALLDIR]¥Server-Root¥dps-[INSTANCE_NAME]¥status-dps.exe をクリックします。

➤ **Directory Proxy Server インスタンスを start-dps.exe から起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥Server-Root¥dps-[INSTANCE_NAME] に移動します。
2. start-dps.exe をクリックして、Directory Proxy Server プロセスを起動します。

注 Directory Proxy Server を再起動するには、[INSTALLDIR]¥Server-Root¥dps-[INSTANCE_NAME]¥restart-dps.exe をクリックします。

➤ **Directory Proxy Server をコンソールから停止するには、次の手順に従います。**

1. 左側にある「System Server Console」のツリー表示区画で、[DOMAINNAME] > [HOSTNAME] >「Server Groups」をクリックして、各ノードを展開します。
2. 「Directory Proxy Server」を選択します。

   左の区画に、「Directory Proxy Server」コンソールが表示されます。
3. 「開く」をクリックして、「タスク」タブを表示します。
4. 「タスク」タブの「Directory Proxy Server の停止」をクリックすると、サーバーが停止されます。

➤ **Directory Proxy Server を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Directory Proxy Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

➤ **Directory Proxy Server インスタンスを stop-dps.exe から停止するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥Server-Root¥dps-[INSTANCE_NAME] に移動します。
2. stop-dps.exe をクリックして、Directory Proxy Server プロセスを停止します。

HADB 管理エージェントの起動と停止

デフォルトでは、HADB は Sun Java Enterprise System が正しく設定され、動作している場合に起動されます。

HADB が正常に設定されると、サービスパネルに HADBMgmtAgent サービスが登録され、実行されます。HADB を停止するには、次の手順を実行します。

➤ **HADB を「サービス」から停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から、停止する HADBMgmtAgent サービスを選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

Instant Messaging の起動と停止

Instant Messaging が機能するかどうかは、Directory Server と Web Server に依存しています。デフォルトでは、Instant Messaging はインストールの完了時に起動します。

また、Instant Messaging の起動と停止は、インストールディレクトリの bin フォルダにある .bat ファイルにアクセスすることによっても可能です。さらに、「サービス」一覧から起動する方法もあります。

➤ **Instant Messaging を「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Instant Messaging」>「Start Server」を選択します。

➤ **Instant Messaging を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Instant Messaging」を選択し、次のいずれかを実行します。
   a. 右クリックして「開始」を選択します。
   b. 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   c. 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **Instant Messaging を imadmin.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥Instant Messaging¥bin` に移動します。
2. `imadmin.bat start` を実行して、Instant Messaging サーバーを起動します。

   このバッチファイルにより、Sun Java System Instant Messaging インスタンスが起動されます。

➤ **Instant Messaging の停止**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Instant Messaging」を選択し、次のいずれかを実行します。
   a. 右クリックして「停止」を選択します。
   b. 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   c. 「操作」メニューの「停止」を選択します。

➤ **Instant Messaging を imadmin.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥Instant Messaging¥bin` に移動します。
2. `imadmin.bat stop` を実行して、Instant Messaging サーバーを停止します。

   このバッチファイルにより、Sun Java System Instant Messaging インスタンスが停止されます。

Message Queue の起動と停止

Message Queue には依存関係はありません。デフォルトでは、Java Enterprise System インストーラは、Windows 上で自動的に起動する設定で Message Queue をインストールします。Windows 上で Message Queue サービスを起動または停止することが必要になる場合があります。

➤ **Message Queue を Windows の「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Message Queue」>「Message Broker」を選択します。

➤ **Windows サービスを使用して Message Queue を起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Message Queue Broker」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **Windows サービスを使用して Message Queue を停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Message Queue Broker」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「サービス」一覧から「Message Queue」を選択します。

Messaging Server の起動と停止

Messaging Server は、Directory Server と管理サーバーに依存しています。デフォルトでは、Messaging Server のサービスはすべて、「クイック設定」モードでインストールを完了したときに起動されます。

`[INSTALLDIR]¥[Server-Root]¥sbin` フォルダにある `start-msg.bat` または `stop-msg.bat` ファイルを使用すると、Messaging Server のすべてのサービスを一度に起動および停止することができます。また、対応するオプションを選択し、必要なサービスのみを選択することもできます。オプションが選択されていない場合は、デフォルトですべてのサービスが起動されます。さらに、「サービス」から起動する方法もあります。

➤ **Messaging Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Messaging Server」を選択します。
5. サービスのプロパティを選択し、ログオンしているユーザーにログオンを変更し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

➤ **Messaging Server を start-msg.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥[server-root]¥sbin` に移動します。
2. `start-msg.bat` をクリックして、Messaging Server プロセスを起動します。

➤ **Messaging Server の停止**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Messaging Server」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

➤ **Messaging Server を stop-msg.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥[server-root]¥sbin` に移動します。
2. `stop-msg.bat` をクリックして、Messaging Server プロセスを停止します。

Portal Server の起動と停止

Portal Server の起動と停止のメカニズムは、Web コンテナ (Web Server または Application Server のどちらか) の起動と停止のメカニズムの一部です。Portal Server は、Directory Server、Access Manager または Access Manager SDK、および Web コンテナに依存しています。

デフォルトでは、Portal Server はインストールの完了時に起動されます。

注 Mobile Access は、Portal Server の一部として、独自に停止、起動されることはありません。Portal Server または Access Manager を起動すると、Mobile Access は自動的に起動されます。

Web Server の起動と停止

Web Server には依存関係がありません。

➤ **Web Server を Windows の「スタート」メニューから起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Web Server」>「Start Web Server Administrator Server」を選択します。

   コマンド画面が表示されます。

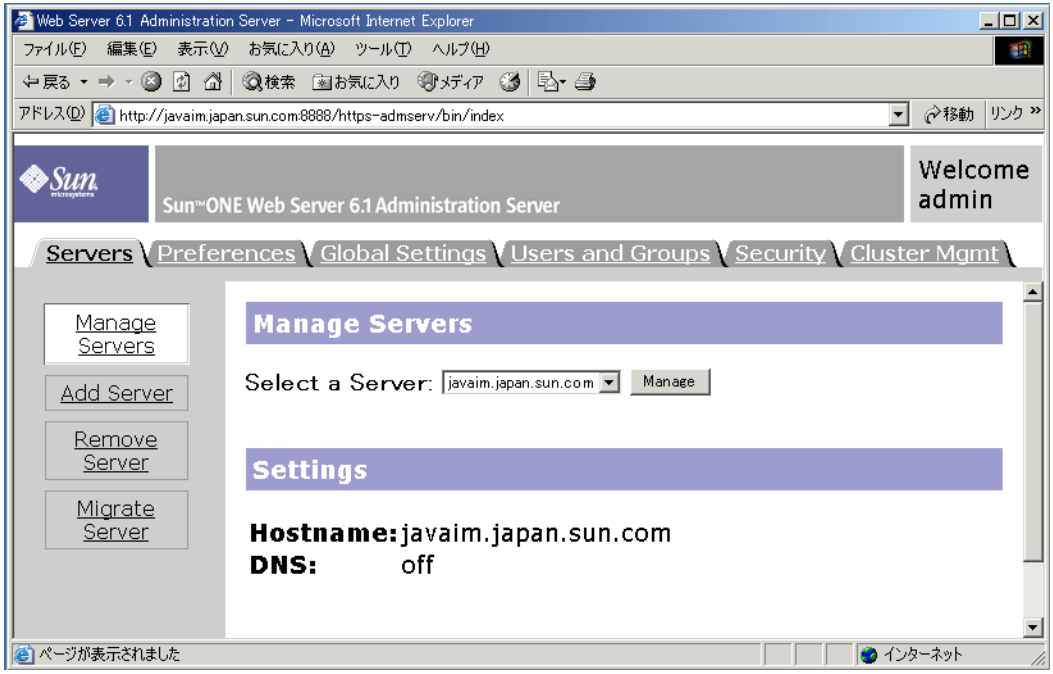
➤ **Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を起動および停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「Sun Microsystems」>「Web Server」>「Administration Web Server」を選択します。

   「Web Server 6.1 Administration Server Login」画面が表示されます。
2. ユーザー名とパスワードを入力し、「OK」をクリックします。

   「Web Server 6.1 Administration Server」画面が表示されます。

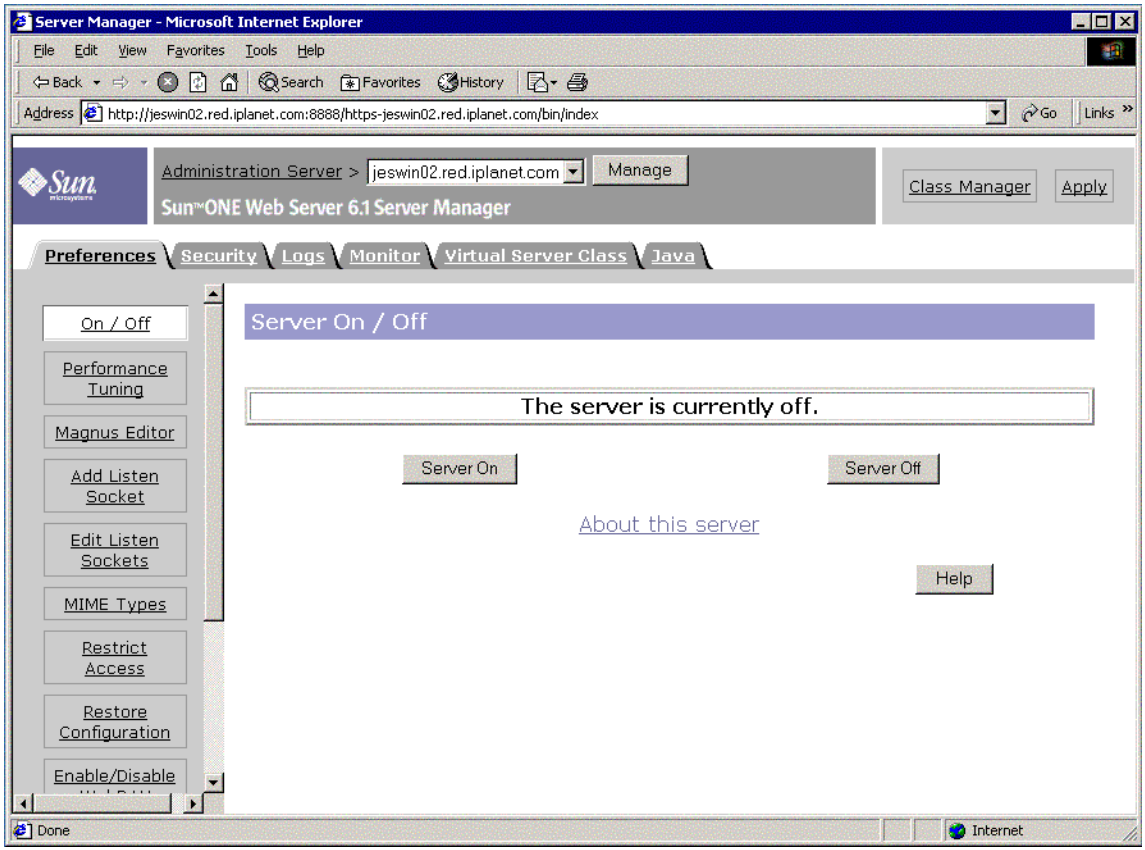
図 9-4　「Web Server 6.1 Administration Server」画面



3. ドロップダウンリストからサーバーを選択し、「Manage」をクリックします。

   「Server Manager」画面が表示されます。

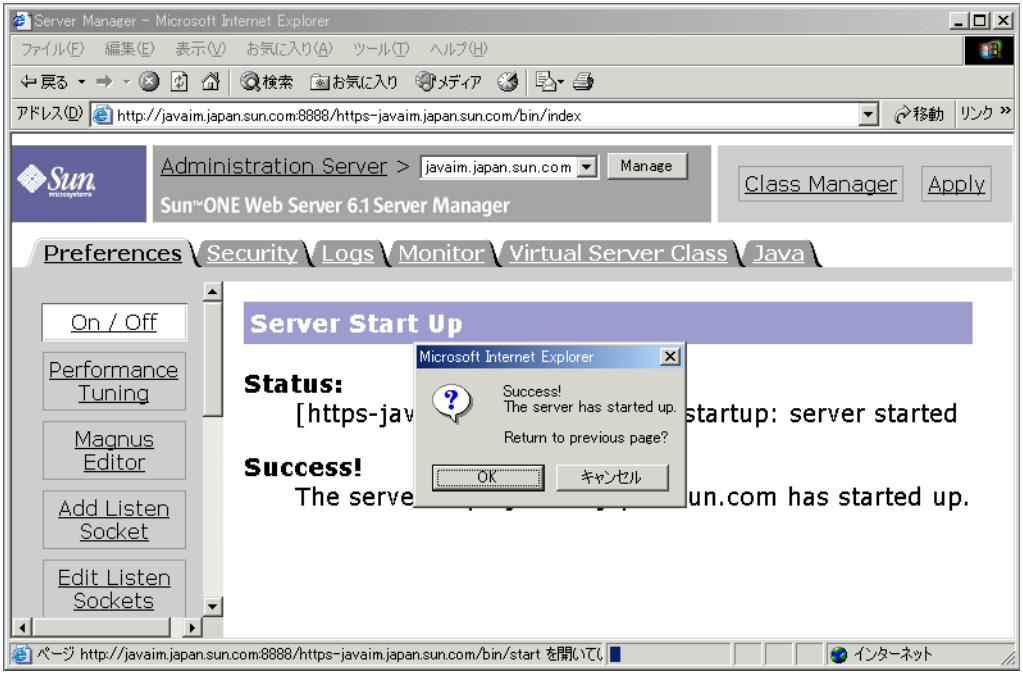
図 9-5　Web Server の「Server Manager」画面



4. 「Server On」をクリックします。

   Web Server が起動され、確認ダイアログボックスに「Success! the server has started up.」と表示されます。

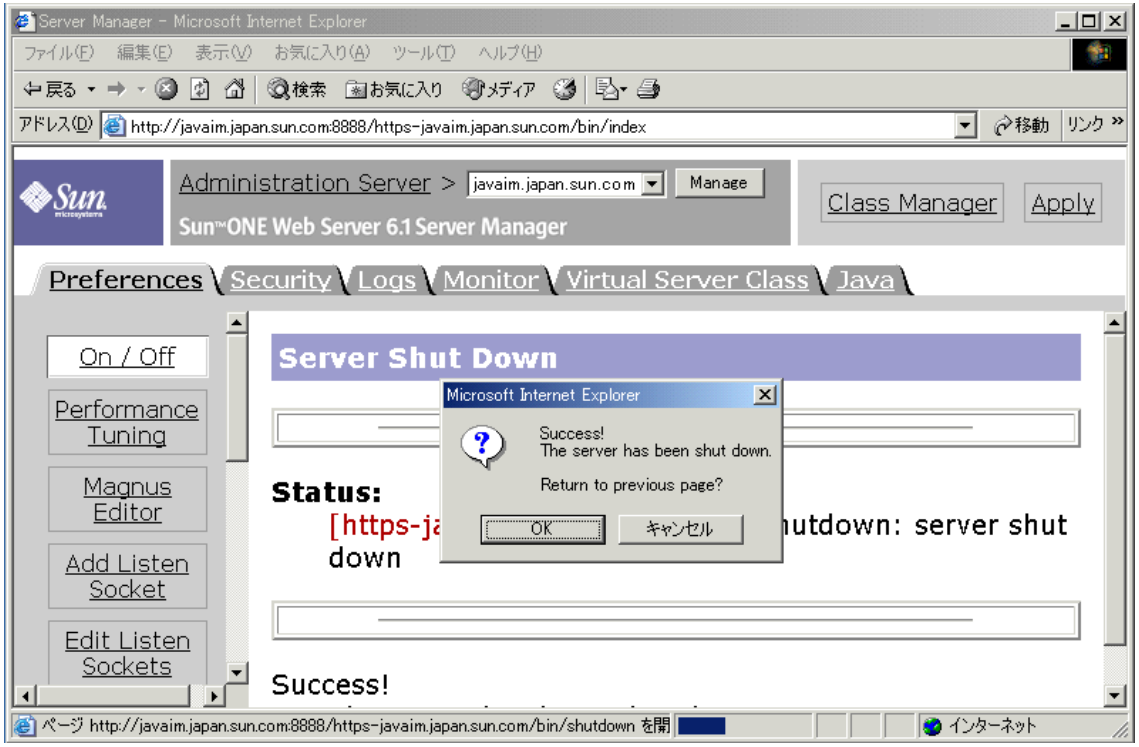
図 9-6　Web Server の Server Manager の成功確認ダイアログボックス



5. Web Server を停止するには、「Server Off」をクリックします。

   Web Server が停止され、確認ダイアログボックスに「Success! the server has been shut down.」と表示されます。

図 9-7　Web Server の停止画面



➤ **Web Server を「サービス」から起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Web Server 6.1」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「開始」を選択します。
   - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューをクリックして、「開始」オプションをクリックします。
5. 「Sun Java System Web Server 6.1 Administration Server」を選択して手順 4 を繰り返し、Web Server を起動します。

➤ **Web Server を startsvr.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. `[INSTALLDIR]¥WebServer¥https-admserv` に移動します。

2. startsvr.bat をクリックして、Web Server プロセスを起動します。

➤ **Web Server インスタンスを startsvr.bat から起動するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥WebServer¥https-[INSTANCE_NAME] に移動します。
2. startserv.bat をクリックして、Web Server プロセスを起動します。

➤ **Web Server を停止するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「管理ツール」を選択します。
3. 「サービス」を選択します。
4. 「サービス」一覧から「Web Server 6.1」を選択し、次のいずれかを実行します。
   - 右クリックして「停止」を選択します。
   - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
   - 「操作」メニューの「停止」を選択します。
5. 「Sun Java System Web Server 6.1 Administration Server」を選択して手順 4 を繰り返し、Web Server を停止します。

➤ **Web Server を stopsvr.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥WebServer¥https-admserv¥stopsvr.bat に移動します。
2. stopsvr.bat をクリックして、Web Server プロセスを停止します。

➤ **Web Server インスタンスを stopsvr.bat から停止するには、次の手順に従います。**

1. [INSTALLDIR]¥WebServer¥ https-[INSTANCE_NAME]¥stopsvr.bat に移動します。
2. stopsvr.bat をクリックして、Web Server プロセスを停止します。

次の手順

この章で説明したタスクを終了すると、インストールと設定を終えた Sun Java Enterprise System コンポーネントが正常に動作していることの確認が完了します。

これでコンポーネントの管理を開始することができます。以下のマニュアルは、その作業を始めるうえで役立ちます。

- 『Sun Java Enterprise System ドキュメントロードマップ』(http://docs.sun.com/doc/817-7068?l=ja)
- Java ES コンポーネントのマニュアル :

  http://docs.sun.com/prod/entsys.05q1

第 10 章

ソフトウェアのアンインストール

この章では、Sun Java Enterprise System インストーラを使用して、インストールされている Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントをアンインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 179 ページの「前提条件」
- 180 ページの「アンインストール前の作業」
- 181 ページの「グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行」
- 184 ページの「サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行」

前提条件

この章で説明している作業を実行する前に、アンインストールプロセス全体を十分に理解し、各自のアンインストール状況に特有の問題について認識しておく必要があります。

サイレントアンインストールを実行する場合は、サイレントインストールのプロセスに精通している必要があります。147 ページの第 8 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」を参照してください。

アンインストール前の作業

次の表は、アンインストールを開始する前に必要な作業を示しています。この作業の中には、ユーザーが遭遇するアンインストールの特定の状況には適用されないものもあります。

左の列は、作業の一般的な実行順序を示し、中央の列は実行する操作を説明しています。右の列は、便利なその他の情報と参照先を示しています。

表 10-1 アンインストール前のチェックリスト

順序	実行するタスク	便利な情報と参照先
1	アンインストールする各コンポーネントに必要な処理を確認します。	
2	Sun Java Enterprise System インストーラによって各ホストシステムにインストールされているソフトウェアを確認します。	181 ページの「グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行」
3	以後のインストールでデータの再利用を考えている場合は、アンインストールするコンポーネントの設定データまたはユーザーデータをバックアップまたはアーカイブします。	
4	設定ディレクトリをホストしている Directory Server インスタンスが稼働していることを確認します。	アンインストールプログラムがアンインストール対象のコンポーネントの設定を解除できるようにするには、この Directory Server インスタンスが稼働している必要があります。
5	必要に応じて、管理サーバー、Directory Server、および Access Manager の管理者アクセス情報を収集します。	6 ページの「アンインストールプログラム用の管理者アクセス情報」
6	設定によって生じるコンポーネント間の依存関係を調べ、データのバックアップ、依存コンポーネントの設定変更による依存関係の解消、適切な順序でのコンポーネントのアンインストールなど、適切な対応をとる必要があります。	47 ページの「設定によるコンポーネントの依存関係」
7	独自のシステムにインストールされている Messaging Server をアンインストールする前に、管理サーバーの設定を解除します。	

グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行

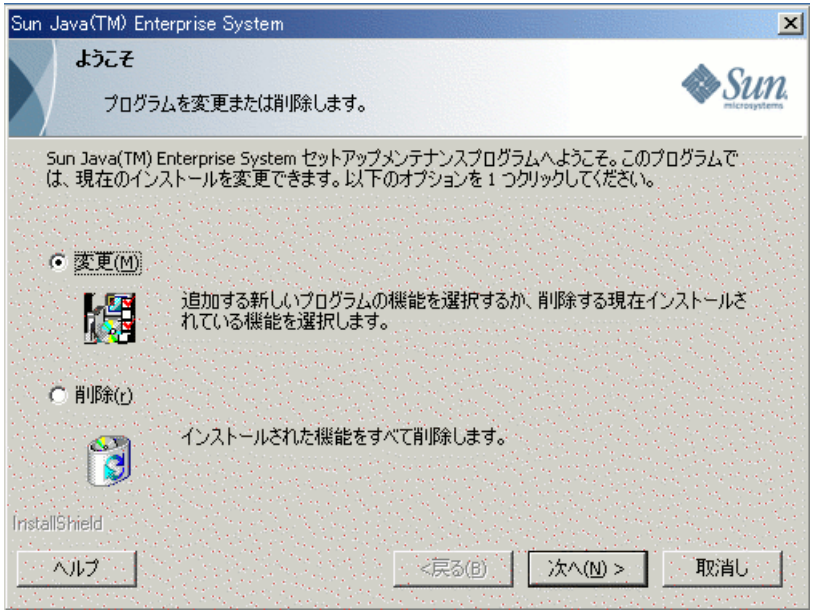
180 ページの「アンインストール前の作業」で説明している関連作業が完了すると、アンインストールプログラムを実行する準備が整います。

➤ **Windows ウィザード/グラフィカルアンインストールプログラムを起動するには、次の手順に従います。**

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。
3. 「Sun Java(TM) Enterprise Systems」を選択します。
4. 「変更と削除」をクリックします。

   プログラムを変更または削除するための「ようこそ」画面が表示されます。

図 10-1　インストールされたコンポーネントを変更するための「ようこそ」画面

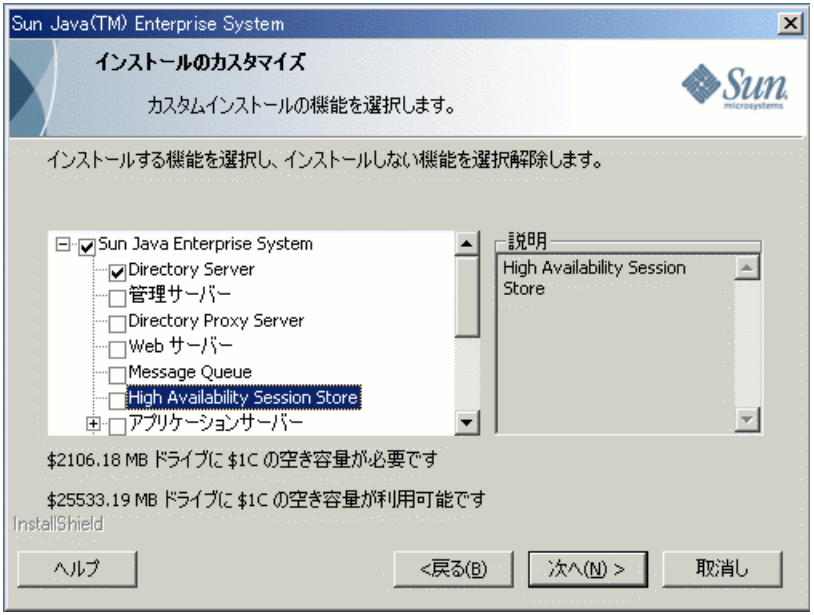


➤ **現在のインストール内容を変更するには、以下の手順を実行します。**

1. InstallShield ウィザードで、新しいプログラム機能を追加する、または現在インストールされている機能を削除するために「変更」を選択します。
2. 「次へ」をクリックします

コンポーネント選択画面が表示されます。

図 10-2　アンインストールするコンポーネントの選択



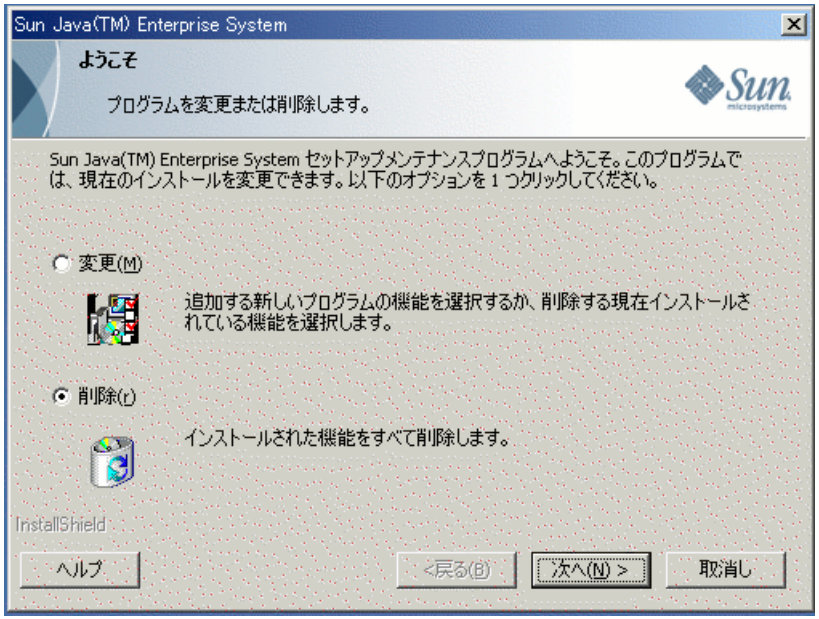
3. コンポーネントを確認します。
   - システムにインストールされて有効になっているコンポーネントを選択できます。システムにインストールされていないコンポーネントは選択できません。
   - コンポーネントによっては、サブコンポーネントを含むものもあります。それらのコンポーネントを展開すると、対応するサブコンポーネントが表示されます。
   - サブコンポーネントを含むコンポーネントの選択を解除したときは、コンポーネントを展開し、サブコンポーネントのリストを確認します。
4. インストールするコンポーネントを選択し、アンインストールするコンポーネントの選択を解除します。「次へ」をクリックします

   アンインストールプログラムにより、ソフトウェアが変更されます。

➤ **インストールされているすべてのコンポーネントを削除するには、以下の手順を実行します。**

1. InstallShield ウィザードで「削除」を選択します。

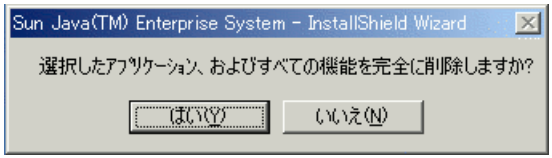
図 10-3　インストールされたコンポーネントを削除するための「ようこそ」画面



2. 「次へ」をクリックします。

   削除の確認ダイアログボックスが表示されます。

図 10-4　インストールされたコンポーネントの削除確認ダイアログボックス



3. 「はい」をクリックして削除を確認します。

   「セットアップステータス」画面が表示され、次に「設定解除」ダイアログボックスが表示されます。これらの製品が設定解除された後、サーバーが停止され、削除されます。

4. ウィザードの「完了」画面が表示されます。「サマリーの表示」ボタンをクリックすると、インストールまたはアンインストールの詳細事項のサマリーを表示できます。「完了」をクリックして、アンインストールのセットアップを終了します。

図 10-5　アンインストールの完了画面

サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行

サイレントアンインストールは、設定内容が似ている複数のホスト上の Sun Java Enterprise System コンポーネントをアンインストールする場合に有効です。サイレントモードでのアンインストールの手順は、147 ページの第 8 章「サイレントモードでのソフトウェアのインストール」で説明されている、サイレントモードでのインストールの手順に似ています。

➤ 応答ファイルを生成する

サイレントアンインストール用の応答ファイルを作成するには、最初にグラフィカルモードでレコードのアンインストールを実行して、応答ファイルを生成する必要があります。詳細は、149 ページの「応答ファイルの作成」を参照してください。

1. コマンドプロンプトにログインし、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

   `cd <インストールディレクトリ>`

2. `Setup.exe /r` コマンドを入力して、システムの Windows フォルダ内に応答ファイルを生成します。

Setup.exe /r コマンドでアンインストールを実行すると、Setup.iss という名前のファイルにデータが格納されます。デフォルトでは、この .iss ファイルは、Windows の System フォルダ内に作成されます。/f1 オプションを使用すると、応答ファイルに別の名前と場所を指定できます。

3. その場合は、/f1 を入力して応答ファイルの作成場所を指定し、ファイル名を入力します。.iss 拡張子を持つファイルの絶対パスを指定します。

   たとえば、Setup.exe /r /f1"C:¥Temp¥Setup.iss" と入力します。

注 相対パスを使用すると予期しない結果を招くため、絶対パスが必要です。

実行時に、Sun Java Enterprise System Windows インストーラのレコードアンインストールセットアップ用に入力したデータと選択したオプションに関する情報はすべて、< ファイル名 >.iss またはデフォルトのファイル名 Setup.iss に記録されます。

4. 以上で、レコードのアンインストール中に選択したオプションで応答ファイルを使用する準備が整いました。記録したオプションを変更するために、この応答ファイルを手動で編集することもできます。

   これで、応答ファイルを使用して、サイレントアンインストールを開始できます。

5. コマンドプロンプトにログインし、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

   cd < インストールディレクトリ >

6. Setup.exe /s コマンドを入力して、サイレントモードでのアンインストール手順を開始します。

注 デフォルトでは、setup.iss ファイルは Windows の System フォルダ内に作成されます。setup.exe /s でサイレントアンインストールを開始する前に、このファイルを Windows System フォルダから Setup.exe が存在するフォルダにコピーする必要があります。そうしないと、セットアップ中に -3 エラーが返されます。

サイレントモードでアンインストールを実行すると、デフォルトでは、setup.exe が格納されているディレクトリと同じディレクトリ内に Setup.log という名前のログファイルが作成されます。/f1 オプションを使用する場合は、応答ファイルと名前が同じで .log の拡張子を持つログファイルが作成されます。

7. ログファイルの別の場所とファイル名を指定するには、/f2 を入力します。ファイルには絶対パスを指定します。

たとえば、`Setup.exe /s /f2"C:¥Setup.log"` と入力します。

注 必ず、絶対パスを指定してください。相対パスを使用すると、予期しない結果を招きます。

インストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

第 11 章

トラブルシューティング

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) のインストールとアンインストールの問題を解決する方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 187 ページの「一般的なトラブルシューティング方法」
- 191 ページの「インストールに関する問題」
- 194 ページの「アンインストールに関する問題」
- 194 ページの「コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報」
- 204 ページの「トラブルシューティングの追加情報」

一般的なトラブルシューティング方法

ここでは、問題の原因を追求するための一般的なガイドラインについて説明します。ここでは、次の内容について説明します。

- 188 ページの「インストールログファイルの検証」
- 188 ページの「コンポーネントログファイルの検証」
- 189 ページの「製品の依存関係の検証」
- 189 ページの「リソースと設定のチェック」
- 190 ページの「インストール後の設定のチェック」
- 190 ページの「配布メディアのチェック」
- 190 ページの「Directory Server の接続性チェック」
- 190 ページの「Web Server のファイルとディレクトリの削除」
- 190 ページの「パスワードの確認」

インストールログファイルの検証

インストールまたはアンインストール中に問題が発生した場合は、ログディレクトリ内の次の対応するログファイルをチェックします。

`%TEMP%/SunJavaES.log`

`%TEMP%` は、そのシステム上のユーザー定義の TEMP フォルダです。

アンインストールとインストーラのログファイルを、Java ES 設定ログとともに検証すると、問題の原因の特定に役立ちます。

ログファイルをトラブルシューティングに使用するには、最初に発生した問題を特定します。それは、最初の問題が原因となって、次々と問題が引き起こされることがよくあるためです。次の手順を実行します。

1. インストールのサマリーファイルを参照します。このファイルには、何がインストールされ、設定されているかについての概要が記載されています。このファイルの場所は `<InstallDir>¥Summary.txt` です。問題が発生した場合は、どのコンポーネントが問題の原因であるかを確認します。複数の問題が発生している場合は、最初の問題を特定します。
2. 詳細なログファイルを参照します。
   a. 最初に発生したエラーまたは警告を探して、解決を試みます。1 つのエラーを解決すると、関連性がないように見える後続の多数のエラーも解決することがよくあります。
   b. 問題の原因となっているコンポーネントの名前を見つけます。
   c. 設定プログラムのログを確認します。設定ログは製品の `<インストールディレクトリ>` にあり、正確な場所は `Summary.txt` に記載されています。
   d. インストーラのログファイルではインストールまたはアンインストールに関係している問題がないか、設定プログラムのログでは設定に関連した問題がないかを探します。

コンポーネントログファイルの検証

コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、ログファイルを調べます。194 ページの「コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報」には、多くのコンポーネントログファイルの一覧が示されています。

製品の依存関係の検証

多数のコンポーネントに、インストール時の相互依存関係があります。1 つのコンポーネントに影響を与える問題は、別のコンポーネントにも影響を与える可能性があります。満たされていない相互依存関係がないかをチェックするには、34 ページの「コンポーネントの相互依存関係がインストールに与える影響」をよくお読みください。その後、以下を実行してください。

- サマリーファイルとログファイルを確認して、関連するコンポーネントに問題が発生していないかどうかを確認します。これにより、最初に解決すべきことの手がかりが得られる可能性があります。
- 正しい接続情報を指定しているかどうかチェックします。
  例 :
  - Directory Server の設定時に指定した情報は、Directory Server を使用するコンポーネントに指定したディレクトリ情報と一致しているか。
  - Portal Server または Portal Server SRA に指定した Access Manager の情報は、Access Manager に指定した情報と一致しているか。

リソースと設定のチェック

次のホストレベルの問題は、インストール時に問題を引き起こす可能性があります。

- **アップデート :** 推奨サービスパックがインストールされているか。
- **ディスク容量 :** ディスクパーティションがどのように設定され、どのパーティションにインストールディレクトリを作成しているか。

インストールに進む前に、28 ページの「システムの準備状態の確認」を参照して、すべての要件を満たしているかどうかをチェックしてください。

- **ネットワークポート :** 設定中に、Sun Java Enterprise System コンポーネントのポート番号を指定します。以下を実行してください。
  - ファイル内の標準ポート番号を調べる。
  - サマリーログファイルを参照し、標準の設定と比較する。ポート番号を誤って入力していないか、またはあるサーバーに対して通常は別のサーバーで使用するポートを設定していないか。
  - `netstat -a` コマンドを使用して、現在システムで使用しているポートを調べる。すでに他で使用中のポート番号を割り当てていないか。

設定中に、正しいホスト名とドメイン名を入力したことを確認してください。

インストール後の設定のチェック

コンポーネントの起動に問題がある場合は、第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」に概要が記載されている手順を正しく実行したことを確認します。

配布メディアのチェック

DVD または CD からのインストールでは、メディアの汚れや損傷を調べます。ディスクに汚れがあると、インストール時に問題が発生する可能性があります。

Directory Server の接続性チェック

Directory Server に依存するコンポーネントをインストールする場合、次のいずれかの問題によって問題が発生する可能性があります。

- Directory Server に対して不正なユーザー ID およびパスワードを指定した。
- 不正な LDAP ポートを指定した。
- Directory Server に接続できない。

「あとで設定」モードの場合は、Directory Server に依存する製品を設定する前に、Directory Server が稼働していることを確認する必要があります。

Web Server のファイルとディレクトリの削除

編集済みの設定ファイルなど、カスタマイズされたファイルの上書きを防ぐために、そのファイルが格納されるディレクトリには Web Server をインストールできません。

Web Server を再インストールする場合、インストールディレクトリをチェックして、それが空であることを確認します。空ではない場合は、どこか別の場所にファイルをアーカイブしてからインストールを再試行します。

パスワードの確認

インストーラは、コンポーネントごとにパスワードの入力を求めます。複数のホストに複数のコンポーネントをインストールする場合、各ホストで正しいパスワードを入力することが重要です。

パスワードの問題を解決するには、いったんアンインストールしてから再インストールすることが必要となる場合があります。アンインストールに失敗した場合は、191 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」を参照してください。

インストールに関する問題

ここでは、インストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 191 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」
- 192 ページの「インストールの失敗」
- 193 ページの「予期しない外部エラー」
- 193 ページの「サイレントインストールの失敗 : 「応答ファイルに互換性がないか、破損している」」
- 193 ページの「サイレントインストールの失敗」

アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗

アンインストールに失敗すると、コンポーネントが削除されずに残る場合があります。このような場合は、Java ES を再インストールする前に、コンポーネントを手動で削除する必要があります。

➤ **ファイルをクリーンアップする**

以前にインストールまたは設定解除に失敗している場合は、Sun Java Enterprise System をインストールする前に、次のクリーンアップ手順を実行する必要があります。

1. Sun Java Enterprise System サービスがすべて停止され、「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」から削除されていることを確認してください。
2. 以前にインストールされた Sun フォルダが存在する場合は、すべて削除します。
3. 残されたサービスエントリがないかどうかをチェックします。サービス内にサービスエントリが残っている場合は、レジストリをクリーンアップする必要があります。サービスエントリの一覧については、表 11-1 を参照してください。
4. レジストリのクリーンアップ :
   a. `HKLM¥Software¥Sun Microsystems¥Entsys¥Installer` を削除します。

b. `HLKM¥System¥CurrentControlSet¥Services` の下にある Sun Java ES サービスエントリをすべて削除します。

5. 上記のいずれかの手順を実行した場合は、インストールを開始する前にシステムを再起動します。

表 11-1　再インストール前に削除が必要なコンポーネントのサービスエントリ

製品名	サービスエントリ
Directory Server	slapd-< ホスト名 >
管理サーバー	admin52-serv
Calendar Server	• JavaESCalendarAdminService6 • JavaESCalendarDWPService6 • JavaESCalendarHTTPService6 • JavaESENSService6 • JavaESNotificationService6
HADB	HADBMgmtAgent
WebAdminServer	https-admserv61
Web Server	https-< ホスト名 >.red.iplanet.com
Instant Messaging	iim
	calagent
Message Queue	MQ_Broker
Directory Proxy Server	SunONEDPS
Messaging Server	Messaging Bootstrap

インストールの失敗

Windows インストーラのエラーが原因で、インストールに失敗することがあります。

- `エラー 1603. インストール中に重大なエラーが発生しました :` このエラーは、Microsoft Web サイト `http://support.microsoft.com/?scid=kb%3Bja%3B834484&x=4&y=12` で説明されているいずれかの原因により発生します。
- `Error 1628 - Failed to complete script based install:` このエラーは、実行時にのみ発生します。このエラーは通常、アンインストール、修復、またはパッチの適用中に発生します。

これらのエラーのトラブルシューティングを行うには、http://support.installshield.com/kb/view.asp?articleid=Q107319 を参照してください。

予期しない外部エラー

電源障害またはシステム障害が発生した可能性があります。あるいは、インストーラプロセスを停止するために CTRL/C を入力したか、またはタスクマネージャからインストーラを強制終了した可能性もあります。

推奨処理 : インストール中または設定プロセスで障害が発生した場合は、おそらく一部だけがインストールされたままになっています。アンインストールプログラムを実行してください。アンインストールプログラムが失敗した場合は、191 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」の手順を実行します。

サイレントインストールの失敗 :「応答ファイルに互換性がないか、破損している」

使用時と同じプラットフォーム上で作成された応答ファイルを使用している場合、不明なファイルの破損エラーが原因で問題が発生している可能性があります。

推奨処理 : 新しい応答ファイルを生成して再インストールします。

この手順については、149 ページの「応答ファイルの作成」を参照してください。

サイレントインストールの失敗

応答ファイルを編集した場合は、そのためにエラーが発生した可能性があります。たとえば、次の点をチェックしてください。

- すべてのローカルホストパラメータが設定され、矛盾のない値が設定されているか。
- パラメータ値の大文字、小文字の区別は適切か。
- 目的のパラメータを入力せずに、必須のパラメータを削除してしまっていないか。
- 使用するすべてのポート番号は有効であり、かつ割り当て済みではないか。

推奨処理 : 問題を解決し、149 ページの「応答ファイルの作成」に説明されている方法で再度応答ファイルを生成します。

アンインストールに関する問題

ここでは、アンインストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 194 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」

アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った

アンインストールに失敗し、ファイルまたはサービスエントリが残されているために手動のクリーンアップが必要な場合は、191 ページの「ファイルをクリーンアップする」を参照してください。

コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報

ここでは、コンポーネントについてのさまざまなヒントを提供し、役立つマニュアルを紹介します。

ここでは、次の内容について説明します。

- 195 ページの「Access Manager のトラブルシューティングツール」
- 195 ページの「管理サーバーのトラブルシューティングツール」
- 196 ページの「Application Server のトラブルシューティングツール」
- 196 ページの「Calendar Server のトラブルシューティングツール」
- 197 ページの「Communications Express のトラブルシューティングツール」
- 198 ページの「Directory Proxy Server のトラブルシューティングツール」
- 198 ページの「Directory Server のトラブルシューティングツール」
- 199 ページの「Instant Messaging のトラブルシューティングツール」
- 200 ページの「Message Queue のトラブルシューティングツール」
- 200 ページの「Messaging Server のトラブルシューティングツール」
- 201 ページの「Portal Server のトラブルシューティングツール」
- 202 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール」
- 202 ページの「Web Server のトラブルシューティングツール」

- 203 ページの「Delegated Administrator のトラブルシューティングツール」
- 204 ページの「High Availability Session Store のトラブルシューティングツール」

Access Manager のトラブルシューティングツール

表 11-2　Access Manager のトラブルシューティングツール

項目	詳細
設定ファイル	AMConfig.properties < インストールディレクトリ >/AccessManager/Config
ログファイルとデバッグファイル	ログファイルのディレクトリ： < インストールディレクトリ >/AccessManager/Logs デバッグファイルのディレクトリ： < インストールディレクトリ >/AccessManager/Debug
デバッグモード	『Sun Java System Access Manager Developer's Guide』(http://docs.sun.com/doc/817-7649) を参照してください。

管理サーバーのトラブルシューティングツール

表 11-3　Administration Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	インストールログのディレクトリ： < インストールディレクトリ >/Server-root/admin-serv/logs/ 設定ログファイル： • Administration_Server_install.A*timestamp* Administration_Server_install.B*timestamp* ログのオプションについては、『Sun Java System Administration Server Administration Guide』(http://docs.sun.com/doc/817-7612) を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Administration Server Administration Guide』(http://docs.sun.com/doc/817-7612) を参照してください。

Application Server のトラブルシューティングツール

表 11-4　Application Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	ログファイルのディレクトリ : < インストールディレクトリ >/ApplicationServer/Setup/ Application Server インスタンスのログディレクトリ (最初に作成するインスタンスのデフォルトの場所): < インストールディレクトリ >/ApplicationServer/ メッセージログのファイル名 : • server.log (サーバーインスタンスごとに存在する)
設定ファイル	設定ファイルのディレクトリ : < インストールディレクトリ >/ApplicationServer/Config
トラブルシューティング	『Sun Java System Application Server Enterprise Edition Troubleshooting Guide』(http://docs.sun.com/doc/819-0086) を参照してください。

Calendar Server のトラブルシューティングツール

表 11-5　Calendar Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	管理サービス (csadmind): admin.log 分散データベースサービス (csdwpd): dwp.log HTTP サービス (cshttpd): http.log イベント通知サービス (csnotifyd): notify.log デフォルトのログディレクトリ : < インストールディレクトリ >/CalenderServer/logs 詳細は、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1476?l=ja) を参照してください。
設定ファイル	< インストールディレクトリ >/CalenderServer/bin/config/ics.conf

表 11-5　Calendar Server のトラブルシューティングツール (続き)

項目	詳細
デバッグモード	デバッグモードを使用するには、Calendar Server の管理者が `ics.conf` ファイルで `logfile.loglevel` 設定パラメータを設定します。 例 : `logfile.loglevel = "debug"` 詳細は、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1476?l=ja) を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1476?l=ja) を参照してください。

Communications Express のトラブルシューティングツール

表 11-6　Communications Express のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	インストールログのディレクトリ : `uwc-installed-path/install/uwc.log` この場所は、uwc logging.properties で指定された値に依存します。
トラブルシューティング	『Sun Java System Communications Express 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1065?l=ja) の「障害追跡」の章を参照してください。

Directory Proxy Server のトラブルシューティングツール

表 11-7　Directory Proxy Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	デフォルトのログファイル : <インストールディレクトリ >/Server-Root/dps-hostname/logs/fwd.log 詳細は、『Sun Java System Directory Proxy Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2016?l=ja) を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Directory Proxy Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2016?l=ja) を参照してください。

Directory Server のトラブルシューティングツール

表 11-8　Directory Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	インストールログファイルは、tmp フォルダに格納されています。 設定ログファイル : • Directory_Server_install.A*timestamp* Directory_Server_install.B*timestamp* ログファイルの管理については、『Sun Java System Directory Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2011?l=ja) を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Directory Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2011?l=ja) を参照してください。

Instant Messaging のトラブルシューティングツール

表 11-9　Instant Messaging のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	サーバーログ : xmppd.log エージェントカレンダログ : agent-calendar.log デフォルトのログディレクトリ :< インストールディレクトリ >/Instant Messaging/log 詳細は、『Sun Java System Instant Messaging サーバー管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1487?l=ja) を参照してください。
設定ファイル	< インストールディレクトリ >/Instant Messaging/config/iim.conf
デバッグモード	デバッグモードを使用するには、Instant Messaging Server の管理者が iim.conf ファイルで iim.log.iim_server.severity 設定パラメータを設定します。 例 : ! サーバーコンポーネントのログ重要度 iim.log.iim_server.severity = "DEBUG" ! マルチプレクサコンポーネントのログ重要度 iim.log.iim_mux.severity = "DEBUG" 詳細は、『Sun Java System Instant Messaging サーバー管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/<doc no:>) を参照してください。
トラブルシューティング	詳細は、『Sun Java System Instant Messaging サーバー管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1487?l=ja) を参照してください。

Message Queue のトラブルシューティングツール

表 11-10　Message Queue のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	インストールログファイル : <インストールディレクトリ >/MessageQueue/var/instances/<インスタンス名 >/log 『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2217?l=ja) を参照してください。
トラブルシューティング	パフォーマンスの問題については、『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-2217?l=ja) の「メッセージサービスの分析と調整」の章を参照してください。 『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』の「問題のトラブルシューティング」の章、および Message Queue Forum を参照してください。Message Queue Forum の URL は次のとおりです。http://swforum.sun.com/jive/forum.jspa?forumID=24 また、http://developers.sun.com/prodtech/msgqueue/reference/techart/index.html からアクセスできる知識データベースにも、関連記事が掲載されています。

Messaging Server のトラブルシューティングツール

表 11-11　Messaging Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
実行ファイルの場所	<インストールディレクトリ >/Sun/Server-root/sbin
ログファイル	<インストールディレクトリ >/Sun/Server-root/data/log
トラブルシューティング	『Sun Java System Messaging Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1054?l=ja) を参照してください。

Portal Server のトラブルシューティングツール

表 11-12　Portal Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイルとデバッグファイル	Portal Server では、Access Manager と同じログファイルおよびデバッグファイルが使用されます。これらのファイルのディレクトリは、次のとおりです。 • ログファイル : <インストールディレクトリ >/AccessManager/Logs • デバッグファイル : <インストールディレクトリ >/AccessManager/debug Portal Server のログファイルとデバッグファイルの管理については、『Sun Java System Portal Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/817-7298?l=ja) を参照してください。 Portal Server デスクトップの場合、デバッグファイルは次のとおりです。 • desktop.debug • desktop.dpadmin.debug これらのファイルの管理については、『Sun Java System Portal Server 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/817-7298?l=ja) を参照してください。 dpadmin、par、rdmgr、および sendrdm の Portal Server コマンド行ユーティリティーには、デバッグメッセージを生成するためのオプションがあります。これらのオプションは、『Portal Server Administrator's Guide』に記述されています。

Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール

表 11-13　Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングツール

項目	詳細
デバッグログ	Portal Gateway のデバッグログは、次のディレクトリに格納されています。 • <インストールディレクトリ>/PortalServer/debug **注**：Access Manager 管理コンソールからのロギングを有効にした場合、NetFile などの Portal Server サービスのログは /<インストールディレクトリ>/AccessManager/debug に格納されます。

Web Server のトラブルシューティングツール

表 11-14　Web Server のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	Web Server のログファイルには、errors ログファイルと access ログファイルの 2 種類があり、どちらも次のディレクトリに格納されます。 <インストールディレクトリ>/Web Server>/https-instance-name/logs errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーが一覧表示されます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳細は、『Sun One Web Server 6.1 管理者ガイド』(http://docs.sun.com/doc/817-7509?l=ja) を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun One Web Server 6.1 Installation and Migration Guide』(http://docs.sun.com/doc/819-0131) を参照してください。
設定ファイルのディレクトリ：	<インストールディレクトリ>/Web Server>/https-instance-name/config

表 11-14　Web Server のトラブルシューティングツール (続き)

項目	詳細
デバッグモード	次のオプションを使用できます。 • ログ出力は、診断とデバッグに利用できる可能性があります。/*server_root*/`https`-*instance_name*/`config/server.xml` ファイルの `LOG` 要素にある `loglevel` 属性の値を info、fine、finer、または finest に設定できます。これらの値は、デバッグメッセージの詳細度を示し、finest で詳細度が最大になります。LOG 要素については、『Sun ONE Web Server Administrator's Configuration File Reference』(http://docs.sun.com/doc/817-6248-10) を参照してください。 • デバッグフラグを有効化してサーバーの Web コンテナをデバッグモードで起動し、JPDA (Java Platform Debugger Architecture) デバッガとの連携準備を整えることができます。これを行うには、/*instance_root*/`https`-*server_name*/`config/server.xml` ファイルの `JAVA` 属性にある `jvm.debug` フラグの値を `true` に設定します。詳細は、『Sun ONE Web Server Administrator's Configuration File Reference』(http://docs.sun.com/doc/817-6248-10) を参照してください。 • Sun Java System Studio 5, Standard Edition のプラグインは、Web アプリケーションのデバッグに利用できます。詳細は、『Sun ONE Web Server Programmer's Guide to Web Applications』(http://docs.sun.com/doc/817-6251-10) を参照してください。

Delegated Administrator のトラブルシューティングツール

表 11-15　Delegated Administrator のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	インストールログのディレクトリ： • IscliCfgDefaults.properties • Installer.properties • statefile.properties
実行ファイルの場所	[インストールディレクトリ]¥DelegatedAdmin¥lib

表 11-15　Delegated Administrator のトラブルシューティングツール (続き)

項目	詳細
トラブルシューティング	『Delegated Administrator 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1101?l=ja) を参照してください。

High Availability Session Store のトラブルシューティングツール

表 11-16　High Availability Session Store のトラブルシューティングツール

項目	詳細
ログファイル	• HADB.properties • mgt.cfg
実行ファイルの場所	[インストールディレクトリ]¥Hadb¥4.4.1-7¥lib
トラブルシューティング	『High Availability Session Store Administrator's Guide』(http://docs.sun.com/doc/819-0216) を参照してください。

トラブルシューティングの追加情報

このマニュアルに記載されている次の追加情報も、トラブルシューティングに役立ちます。

- 31 ページの第 2 章「インストールシーケンスの作成」には、コンポーネントの相互依存関係に関する情報が記載されています。詳細は、34 ページの表 2-2 を参照してください。
- 131 ページの第 7 章「「あとで設定」オプションを使用した場合のインストール後の設定」
- 155 ページの第 9 章「コンポーネントの起動と停止」

Java ES コンポーネント

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアに含まれる選択可能な共有コンポーネントの一覧を示します。

選択可能なコンポーネント

Java ES インストーラの「コンポーネントの選択」ページでは、選択可能なコンポーネントが、支援するサービス別にグループ分けされています。コンポーネントのインストール時にともにインストールされるサブコンポーネントは、それぞれ次のとおりです。

- Sun Java System Directory Server 5 2005Q1
- Sun Java System Administration Server 5 2005Q1
- Sun Java System Directory Proxy Server 5 2005Q1
- Sun Java System Web Server 6 2005Q1 Update 1 Service Pack 4
- Sun Java System Message Queue 3.6 2005Q1
- Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2004Q4
  - Application Server Administration Client
  - ドメイン管理サーバー
  - Load Balancing Plugin
  - サンプルアプリケーション
  - PointBase
- Sun Java System Access Manager 2005Q1

  Calendar Server と Messaging Server の Delegated Administrator プロビジョニングツールは、Access Manager インストール時に自動的にインストールされます。

  - アイデンティティー管理とポリシーサービスコア (Delegated Administrator Utility を含む)
  - Access Manager 管理コンソール
  - 連携管理の共有ドメインサービス
  - Access Manager SDK
- Sun Java System Messaging Server 6 2005Q1
- Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1
- Sun Java System Instant Messaging 6 2005Q1
  - Instant Messaging Server コア (サーバーとマルチプレクサソフトウェアを含む)
  - Instant Messaging リソース
  - Access Manager Instant Messaging Service
- Sun Java System Portal Server 2005Q1
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 2005Q1
  - Secure Remote Access コア
  - ゲートウェイ
  - Netlet プロキシ
  - Rewriter プロキシ
- Sun Java System Communications Express 2005Q1

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、選択可能なコンポーネントにローカルサービスとテクノロジサポートを提供します。Sun Java Enterprise System コンポーネントをインストールする際、必要な共有コンポーネントがまだインストールされていなければ、インストーラがそれらの共有コンポーネントを自動的にインストールします。

このリリースの Sun Java Enterprise System には、次の共有コンポーネントが含まれています。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)
- Apache Common Logging
- Apache SOAP (Simple Object Access Protocol) Runtime
- Common Agent Container
- Web サービスコンテナのための共通ライブラリ
- ICU (International Components for Unicode)
- J2SE™ プラットフォーム 1.5.0 (Java 2 Platform, Standard Edition)

- JAF (JavaBeans™ Activation Framework)
- JATO (Java Application Framework)
- JavaHelp™ Runtime
- JavaMail™ Runtime
- JAXB (Java Architecture for XML Binding) Runtime
- JAXP (Java API for XML Processing)
- JAXR (Java API for XML Registries) Runtime
- JAX-RPC (Java APIs for XML-based Remote Procedure Call) Runtime
- JCAPI (Java Calendar API)
- JDMK (Java Dynamic Management™ Kit) Runtime ライブラリ
- JSS (Java Security Services)
- KTSE (KT Search Engine)
- LDAP C SDK
- LDAP Java SDK
- NSPR (Netscape Portable Runtime)
- NSS (Network Security Services)
- SAML (Security Assertions Markup Language)
- SASL (Simple Authentication and Security Layer)
- SNMP (Simple Network Management Protocol) Peer
- Sun Java Web コンソール
- Tomcat サーブレット JSP コンテナ
- XML C Library (`libxml`)
- ZLIB (Zip 圧縮ライブラリ)

デフォルトのポート番号

Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストーラは、ポート番号の入力をユーザーに要求する際、使用中のポートの実行時チェックを実行して適切なデフォルト値を表示します。デフォルトのポート番号が、別のコンポーネント、または同じコンポーネントの別のインスタンスで使用されている場合、インストーラは別の値を提示します。たとえば、Web Server と Application Server はどちらも、デフォルトポート 8080 を使用します。両方のコンポーネントを同じホストにインストールすると、最初に設定するコンポーネントにデフォルトポート 8080 が与えられます。2 番目に設定するコンポーネントには、8081 や 8082 などの、別のデフォルトポートが与えられます。

次の表は、デフォルトのポート番号、および Java ES コンポーネントでの各ポートの目的を示しています。

注 Access Manager と Portal Server は、それぞれが配備される Web コンテナのポート番号を使用するため、この表には含まれません。

表 B-1 コンポーネントのデフォルトのポート番号

コンポーネント	ポート	目的
管理サーバー	390	標準の HTTP ポート
Application Server	8080	標準の HTTP ポート
	443	HTTP over SSL
	3700	標準の IIOP ポート
	4849	管理サーバーのポート
	7676	標準の Message Queue ポート
	8686	JMX ポート
	8181	HTTPS over SSL

表 B-1　コンポーネントのデフォルトのポート番号 (続き)

コンポーネント	ポート	目的
Calendar Server	80	標準の HTTP ポート
	389	LDAP ポート
	443	HTTP over SSL
	57997	ENS
	59779	DWP
Common Agent Container	10162	JMX ポート (TCP)
	10161	SNMP アダプタポート (UDP)
	10162	トラップ用 SNMP アダプタポート (UDP)
	10163	Commandstream アダプタポート (TCP)
Directory Proxy Server	489	LDAP リスナ
Directory Server	389	標準の LDAP リスナ
	636	LDAPS over SSL
Instant Messaging	49909	マルチプレクサポート
	49916	セキュリティ保護されたモード、Netlet 発信ポート
	49917	セキュリティ保護されたモード、Netlet 着信ポート
	49919	Instant Messaging サーバー間ポート
	49999	Instant Messaging のポート
Message Queue	80	標準の HTTP ポート
	443	HTTP over SSL
	7676	ポートマッパ
	7677	HTTP トネリングサーブレットポート

表 B-1　コンポーネントのデフォルトのポート番号 (続き)

コンポーネント	ポート	目的
Messaging Server	25	標準の SMTP ポート
	80	Messaging Express (HTTP) のポート
	110	標準の POP3 ポート / MMP POP3 プロキシ
	143	標準の IMAP4 ポート / MMP IMAP プロキシ
	443	HTTP over SSL
	992	POP3 over SSL
	993	IMAP over SSL または MMP IMAP プロキシ over SSL
	7997	イベント通知サービスのポート
	27442	製品の内部通信のために Job Controller によって使用される
	49994	製品の内部通信のために Watcher によって使用されます
Portal Server Secure Remote Access	8080	標準の HTTP ポート
	443	HTTP over SSL
	10443	Rewriter プロキシポート
	10555	Netlet プロキシポート
	49916	セキュリティ保護されたモード、Netlet 発信ポート
	49917	セキュリティ保護されたモード、Netlet 着信ポート
Web Server	80	標準の HTTP ポート
	443	HTTP over SSL
	8888	標準の管理ポート

応答ファイルの例

この付録では、サイレントインストール用に準備された応答ファイルの一例を示します。

```
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-DlgOrder]
Dlg0={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdLicense2-0
Count=12
Dlg1={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-LanguageSelection-0
Dlg2={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdAskDestPath-0
Dlg3={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdSetupType2-0
Dlg4={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdSetupType-0
Dlg5={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdComponentTree-0
Dlg6={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdConfigure-0
Dlg7={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdStartCopy-0
Dlg8={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SprintfBox-0
Dlg9={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SprintfBox-1
Dlg10={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdShowInfoList-0
Dlg11={47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdFinish-0
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdLicense2-0]
Result=1
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-LanguageSelection-0]
French=DISABLED
Japanese=DISABLED
Simplified Chinese=DISABLED
```

```
German=DISABLED
Korean=DISABLED
Traditional Chinense=DISABLED
Spanish=DISABLED
Result=0
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:¥Sun¥
Result=1
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdSetupType2-0]
Result=303
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdSetupType-0]
CONFIG_TYPE=Quick_Configure
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdComponentTree-0]
SunJavaES-type=string
SunJavaES-count=13
SunJavaES-0=SunJavaES¥DSSetup
SunJavaES-1=SunJavaES¥JSS
SunJavaES-2=SunJavaES¥NSPR
SunJavaES-3=SunJavaES¥SASL
SunJavaES-4=SunJavaES¥ICU
SunJavaES-5=SunJavaES¥XERCES_c
SunJavaES-6=SunJavaES¥NSS
SunJavaES-7=SunJavaES¥LDAPCSDK
SunJavaES-8=SunJavaES¥AdminConsole
SunJavaES-9=SunJavaES¥LDAPJDK
SunJavaES-10=SunJavaES¥DirectoryServer
SunJavaES-11=SunJavaES¥AdministrationServer
SunJavaES-12=SunJavaES¥DirectoryProxyServer
Component-type=string
Component-count=1
Component-0=SunJavaES
```

```
Result=1
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdConfigure-0]
Administrator User ID=admin
Administrator Password=adminuser
Retype password=adminuser
Result=0
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdStartCopy-0]
Result=1
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SprintfBox-0]
Result=7
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SprintfBox-1]
Result=7
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdShowInfoList-0]
Result=1
[{47B851DE-00FF-4356-B988-05EC63092344}-SdFinish-0]
Result=1
bOpt1=0
bOpt2=0
```

用語集

このマニュアルセットで使用されている用語の完全なリストについては、『Java Enterprise System 用語集』(http://docs.sun.com/doc/819-1933?l=ja) を参照してください。

索引

A

Access Manager
- Directory Server の例 (単一セッション), 78
- Portal Server の例 (単一セッション), 81
- インストール後
  - 「あとで設定」オプション , 133
- 起動と停止 , 156
- サブコンポーネント , 205
- 設定情報 , 97
- トラブルシューティングツール , 195

Access Manager SDK, 65
- コンポーネント間の相互依存関係 , 34

ADMIN_PASSWD プロパティファイルパラメータ , 97

Administration Server の設定 , 96

AM_ENC_PWD プロパティファイルパラメータ , 98

AMConfigurator.properties ファイル , 97

AMLDAPUSERPASSWD プロパティファイルパラメータ , 97

Ant, 206

Apache Common Logging, 206

Apache SOAP Runtime, 206

Application Server
- インストール後
  - 「あとで設定」オプション , 135
- 起動と停止 , 158
- サブコンポーネント , 205
- 設定情報 , 105
- トラブルシューティング , 196
- 例 (単一セッション), 58

AS_ACC_CONFIG プロパティファイルパラメータ , 107

AS_ADMINHOST プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ADMINPASSWD プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ADMINPORT プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ADMINPROTOCOL プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ADMIN プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ANT_LIB プロパティファイルパラメータ , 108

AS_ANT プロパティファイルパラメータ , 108

AS_CONFIG_MODEL プロパティファイルパラメータ , 107

AS_CONFIG プロパティファイルパラメータ , 106

AS_DEF_DOMAINS_PATH プロパティファイルパラメータ , 107

AS_DEPLOY_LOCATION プロパティファイルパラメータ , 107

AS_DOMAIN_NAME プロパティファイルパラメータ , 106

AS_HADB プロパティファイルパラメータ , 108

AS_HTTPPORT プロパティファイルパラメータ , 105

AS_HTTPSPORT プロパティファイルパラメータ , 105

AS_ICU_LIB プロパティファイルパラメータ , 109

AS_INSTANCE_DIR プロパティファイルパラメータ , 108
AS_INSTANCE_NAME プロパティファイルパラメータ , 108
AS_JATO_LIB プロパティファイルパラメータ , 109
AS_JAVA プロパティファイルパラメータ , 107
AS_JDMK_HOME プロパティファイルパラメータ , 107
AS_JHELP プロパティファイルパラメータ , 107
AS_JMS_ADMIN プロパティファイルパラメータ , 107
AS_JMS_PASSWORD プロパティファイルパラメータ , 107
AS_LB_PLUGIN_TYPE, 109
AS_NATIVE_LAUNCHER_LIB_PREFIX プロパティファイルパラメータ , 107
AS_NATIVE_LAUNCHER プロパティファイルパラメータ , 107
AS_NODE_AGENT プロパティファイルパラメータ , 106
AS_NODEAGENT_DIR プロパティファイルパラメータ , 106
AS_NSS_BIN プロパティファイルパラメータ , 109
AS_NSS プロパティファイルパラメータ , 108
AS_ORB_PORT プロパティファイルパラメータ , 106
AS_PERL プロパティファイルパラメータ , 108
AS_POINTBASE_SAMPLESDB プロパティファイルパラメータ , 106
AS_POINTBASE プロパティファイルパラメータ , 106
AS_WEBCONSOLE_LIB プロパティファイルパラメータ , 108
AS_WEBSERVICES_LIB プロパティファイルパラメータ , 106
AS_WSINSTALLDIR プロパティファイルパラメータ , 109
AS_WSINSTANCEDIR プロパティファイルパラメータ , 109
AS_WSINSTANCENAME, 109
AS81_ADMIN_IS_SECURE プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_ADMINPASSWD プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_ADMINPORT プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_ADMIN プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_DOCS_DIR プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_DOMAIN プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_HOST プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_INSTANCE_DIR プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_INSTANCE プロパティファイルパラメータ , 104
AS81_PORT プロパティファイルパラメータ , 104
ASIIOP_MUTUALAUTHPort プロパティファイルパラメータ , 106
ASIIOP_SSLPort プロパティファイルパラメータ , 106
ASJMSPort プロパティファイルパラメータ , 105
ASJMX_ADMINPort プロパティファイルパラメータ , 105

B

BASEDIR プロパティファイルパラメータ , 118

C

Calendar Server
  Messaging Server を使用する例 , 74
  インストール後
    「あとで設定」オプション , 136
  起動と停止 , 160
  トラブルシューティング , 196
Common Agent Container, 206
Communications Express

インストール後
「あとで設定」オプション , 138
設定情報 , 128
トラブルシューティング , 197
例 (単一セッション), 60

D

DEFAULT_ORG_DN プロパティファイルパラメータ , 120
Delegated Administrator
インストール後
「あとで設定」オプション , 139
トラブルシューティング , 203
Delegated Administrator Server
設定情報 , 110
DEPLOY_ADMIN_HOST プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_ADMIN_PASSWORD プロパティファイルパラメータ , 120
DEPLOY_ADMIN_PORT プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_ADMIN_PROTOCOL プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_ADMIN プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_CELL プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_DIR プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_DOCROOT プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_INSTANCE_DIR プロパティファイルパラメータ , 117
DEPLOY_INSTANCE プロパティファイルパラメータ , 117
DEPLOY_JDK_DIR プロパティファイルパラメータ , 117
DEPLOY_NODE プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_NOW プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_PRODUCT_DIR プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_PROJECT_DIR プロパティファイルパラメータ , 118
DEPLOY_TYPE プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_URI プロパティファイルパラメータ , 119
DEPLOY_VIRTUAL_HOST プロパティファイルパラメータ , 118
Directory Proxy Server
インストール後
「あとで設定」オプション , 139
起動と停止 , 165
トラブルシューティング , 198
例 (単一セッション), 63
Directory Server
インストール後
「あとで設定」オプション , 140
起動と停止 , 161
トラブルシューティング , 198
DS_DIRMGR_DN プロパティファイルパラメータ , 117
DS_DIRMGR_PASSWORD プロパティファイルパラメータ , 120
DS_DIRMGRDN プロパティファイルパラメータ , 101
DS_DIRMGRPWD プロパティファイルパラメータ , 101
DS_HOST プロパティファイルパラメータ , 101, 117
DS_PORT プロパティファイルパラメータ , 101

H

HADB
起動と停止 , 167
High Availability Session Store
インストール後
「あとで設定」オプション , 136
設定情報 , 111

トラブルシューティング , 204

I

ICU, 206
IDSAME_ADMIN_PASSWORD プロパティファイルパラメータ , 120
IDSAME_AMCONSOLE プロパティファイルパラメータ , 119
IDSAME_AMSERVER プロパティファイルパラメータ , 117
IDSAME_BASEDIR プロパティファイルパラメータ , 118
IDSAME_LDAPUSER_PASSWORD プロパティファイルパラメータ , 120
INSTALLDIR プロパティファイルパラメータ , 112
installer.properties, 110
Instant Messaging
インストール後
「あとで設定」オプション , 141
起動と停止 , 167
サブコンポーネント , 206
設定情報 , 115
トラブルシューティング , 199
IS.HostNamePortNumber プロパティファイルパラメータ , 111
IS.HostName プロパティファイルパラメータ , 110
IS_BASEDIR プロパティファイルパラメータ , 120
IsAmadmin.Password プロパティファイルパラメータ , 110
IsAmadmin.User プロパティファイルパラメータ , 110
IscliCfgDefaults.properties, 110

J

JAF, 207
JATO, 207
Java ES ソフトウェアの入手 , 41
JavaHelp Runtime, 207
JavaMail Runtime, 207
JAXB, 207
JAXP, 207
JAXR, 207
JAX-RPC, 207
JCAPI, 207
JDK_DIR プロパティファイルパラメータ , 117
JDK_PATH プロパティファイルパラメータ , 117
JDMK, 207
JES_DIR プロパティファイルパラメータ , 118
JSS, 207

K

KTSE, 207

L

LAUserPassword.Password プロパティファイルパラメータ , 111
LDAP C SDK, 207
LDAP Java SDK, 207
LOAD_BALANCER_URL プロパティファイルパラメータ , 119

M

Message Queue
インストール後
「あとで設定」オプション , 141
起動と停止 , 169
トラブルシューティング , 200
Messaging Server
インストール後
「あとで設定」オプション , 142
起動と停止 , 170
設定情報 , 127

トラブルシューティング , 200

N

NLP_BASEDIR プロパティファイルパラメータ , 126
NLP_GATEWAY_PROFILE プロパティファイルパラメータ , 126
NSPR, 207
NSS, 207

P

Portal Server
インストール後
「あとで設定」オプション , 143
起動と停止 , 171
設定情報 , 117
トラブルシューティング , 201
Portal Server SRA
インストール後
「あとで設定」オプション , 143
サブコンポーネント , 206
設定情報 , 121
トラブルシューティング , 202
PS_BASEDIR プロパティファイルパラメータ , 120
PS_HOST プロパティファイルパラメータ , 119
PS_PORT プロパティファイルパラメータ , 119
PS_PROTOCOL プロパティファイルパラメータ , 120

R

ROOT_SUFFIX_DN プロパティファイルパラメータ , 120

S

SAML, 207
SASL, 207
SERVER_HOST プロパティファイルパラメータ , 119
SERVER_PORT プロパティファイルパラメータ , 119
SERVER_PROTOCOL プロパティファイルパラメータ , 118
SNMP, 207
Sun Java Web コンソール , 207

T

TLAUserPassword.User プロパティファイルパラメータ , 110
Tomcat サーブレット JSP コンテナ , 207

U

UGDIR_BINDDN プロパティファイルパラメータ , 128
UGDIR_BINDPW プロパティファイルパラメータ , 128
UGDIR_URL プロパティファイルパラメータ , 128

W

Web Server
インストール後
「あとで設定」オプション , 144
起動と停止 , 171
設定情報 , 113
トラブルシューティング , 202
Web コンテナ , 97
Web サービスのための共通ライブラリ , 206

WS61_ADMIN プロパティファイルパラメータ , 103
WS61_HOST プロパティファイルパラメータ , 102
WS61_INSTANCE プロパティファイルパラメータ , 103
WS61_IS_SECURE プロパティファイルパラメータ , 103
WS61_PORT プロパティファイルパラメータ , 102

X

XML C Library, 207

Z

ZLIB, 207

あ

アンインストール
　アンインストール前のチェックリスト , 180
　サイレントモード , 184
　全般的な動作 , 46
　手順 , 45

い

依存
　コンポーネント , 34
　リモート , 37
依存性の確認 , 43
インストール
　依存性の確認 , 43
　インストール前のチェックリスト , 48
　キャンセル , 93
　グラフィカルインタフェース , 83
　言語の概要 , 43
　主要な問題 , 33
　設定オプション , 44
　前提条件 , 48
　手順 , 42
　ポート番号 , 209
　モード , 42
インストールされているソフトウェアの検出 , 43

か

管理サーバー
　インストール後
　　あとで設定 , 135
　起動と停止 , 157
　トラブルシューティング , 195

き

キャンセル、インストール , 93

く

グラフィカルインタフェース
　アンインストール , 181
　インストール , 83

し

収集、設定情報 , 95

は

配備アーキテクチャーの例 , 32

ひ

評価インストールの例 , 52

ま

マニュアル , 19

れ

例
- Calendar Server と Messaging Server, 74
- Schema 1 Calendar-Messaging, 76
- アイデンティティ管理 , 78
- インストールシーケンス , 51
- 応答ファイル , 213
- 単一セッションインストール , 52
- 通信サービスと共同作業サービス , 78
- 配備アーキテクチャー , 32
- リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例 , 81

れ